2015年11月
多　可　町

多可町合併10周年記念誌
多可の里風土記
～62集落を訪ねて～

多可町合併10周年記念誌

多可の里風土記

～ 62集落を訪ねて ～

多可町合併10周年記念誌

多可の里風土記

～ 62集落を訪ねて ～

多可町の「多」をもとに、次の意味を込めています。
（緑 色）　・・・みどり広がる大地
（赤 丸）　・・・創造・発見・実り

豊かな自然との共生、躍動する人の姿を織りこみ、新しい時代への飛翔・新生「多可町」の飛躍と発展をイメージしています。

町　章

多可町住民憲章

美しく豊かな自然に恵まれたわたしたちのまちは、長い歴史とよき伝統のなかで、個性ある文化や産業をはぐくみ、栄えてきました。

わたしたちは、ふるさと多可を愛し、お互いの理解とつながりを深め、みんなが主役のまちをめざして、ここに住民憲章を定めます。

わたしたちは

1．健康で心豊かにくらし　やすらぎのあるまちをつくります

1．みどりと清流を守り　うるおいのあるまちをつくります

1．働くことをよろこび　活力のあるまちをつくります

1．学びを楽しみ　文化のかおり高いまちをつくります

1．いのちと人権を大切にし　心ふれあうまちをつくります

（平成 18 年 3 月 6 日制定）

はじめに

多可町は、平成 17 年 11 月に、中町、加美町、八千代町の 3 町が合併して誕生しました。この度、合併 10 周年を記念し、記念誌『多可の里風土記 ～62 集落を訪ねて～』を作成いたしました。

旧町にはそれぞれ、いにしえから積み上げられ、継承されてきた歴史や文化がありますが、中でも、中区の『山田錦』、加美区の『杉原紙』、八千代区の『敬老の日』の 3 つの発祥地であることは、日本の歴史、文化、産業に大きな影響を与えたものを生みだした町として、全国に誇りうるものと考えます。しかし、これらは、一朝一夕で生まれてきたわけではなく、私達の先人達が、永い間受け継いできた精神、文化、技術から生まれてきたものです。

町内の各地区には、寺社や祭礼をはじめとして、継承されてきた特色ある歴史や文化が、今も脈々と受け継がれ、地域のコミュニティーの核として残されています。この土壌の上に、『山田錦』、『杉原紙』、『敬老の日』が生み出されてきたものと考えます。

本誌は、町内 62 集落に今も継承されている歴史や文化を概観したものですが、合併から 10 年を経過した今、あらためて先人たちの営みに思いをはせ、大切な遺産をさらに後世に受け継ぎ、これからの町づくりに活かしていきたいと思います。

平成 27 年 11 月 1 日
多可町長　戸　田　善　規

目　次

はじめに
目次　例言

多可町全図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
中　　区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
加　美　区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
八 千 代 区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
多可町の指定文化財一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・78
多可町歌（歌詞）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
敬老のうた　きっとありがとう（歌詞）・・・・・・81

【細目次】

町章・多可町住民憲章 ・・・・・・・・・・・・・・・2
はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
目次　細目次　例言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・4
多可町全図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
中区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
中区地図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
コラム「山田錦（やまだにしき）」・・・・・・・9
門　前（もんぜん）・・・・・・・・・10
東　山（ひがしやま）・・・・・・・12
牧　野（まきの）・・・・・・・・・・14
間　子（まこう）・・・・・・・・・・16
天　田（あまだ）・・・・・・・・・・18
奥　中（おくなか）・・・・・・・・・20
茂　利（しげり）・・・・・・・・・・22
安　坂（あさか）・・・・・・・・・・24
坂　本（さかもと）・・・・・・・・・26
森　本（もりもと）・・・・・・・・・28
中安田（なかやすだ）・・・・・・・30
安楽田（あらた）・・・・・・・・・11
田野口（たのくち）・・・・・・・13
鍛冶屋（かじや）・・・・・・・・・15
岸　上（きしかみ）・・・・・・・17
高　岸（たかぎし）・・・・・・・19
徳　畑（とくばた）・・・・・・・21
中村町（なかむらまち）・・・・23
糀　屋（こうじや）・・・・・・・25
曽我井（そがい）・・・・・・・・・27
西安田（にしやすだ）・・・・・・29
東安田（ひがしやすだ）・・・・31
加美区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
加美区地図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
コラム「杉原紙（すぎはらがみ）」・・・・・・・34
山寄上（やまよりかみ）・・・・・・35
清　水（きよみず）・・・・・・・・・37
山　口（やまぐち）・・・・・・・・・39
市　原（いちはら）・・・・・・・・・41
大　袋（おおぶくろ）・・・・・・・43
箸　荷（はせがい）・・・・・・・・・45
杉　原（すぎはら）・・・・・・・・・47
観音寺（かんのんじ）・・・・・・・49
熊野部（くまのべ）・・・・・・・・・51
棚　釜（たなかま）・・・・・・・・・53
奥荒田（おくあらた）・・・・・・・55
寺　内（てらうち）・・・・・・・・・57
山野部（やまのべ）・・・・・・・・・59
鳥　羽（とりま）・・・・・・・・・36
轟　（とどろき）・・・・・・・・38
西　山（にしやま）・・・・・・・・40
丹　治（たんじ）・・・・・・・・・42
三　谷（みだに）・・・・・・・・・44
門　村（かどむら）・・・・・・・・46
奥豊部（おくとよべ）・・・・・・48
豊　部（とよべ）・・・・・・・・・50
岩座神（いさりがみ）・・・・・・52
多　田（ただ）・・・・・・・・・・・54
的　場（まとば）・・・・・・・・・56
西　脇（にしわき）・・・・・・・・58
八千代区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
八千代区地図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
コラム「敬老の日（けいろうのひ）」 ・・・・・62
大　屋（おおや）・・・・・・・・・・・63
中　村（なかむら）・・・・・・・・・65
下　村（しもむら）・・・・・・・・・67
赤　坂（あかさか）・・・・・・・・・69
中野間（なかのま）・・・・・・・・・71
下野間（しものま）・・・・・・・・・73
柳山寺（りゅうさんじ）・・・・・・75
上三原（かみみはら）・・・・・・・77
坂　本（さかもと）・・・・・・・64
横　屋（よこや）・・・・・・・・66
門　田（かどた）・・・・・・・・68
俵　田（たわらだ）・・・・・・70
仕出原（しではら）・・・・・・72
下三原（しもみはら）・・・・・74
中三原（なかみはら）・・・・・76
多可町の指定文化財一覧・・・・・・・・・・・・・・・78
多可町歌（歌詞）・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
敬老のうた　きっとありがとう（歌詞）・・・・・81

例　　言

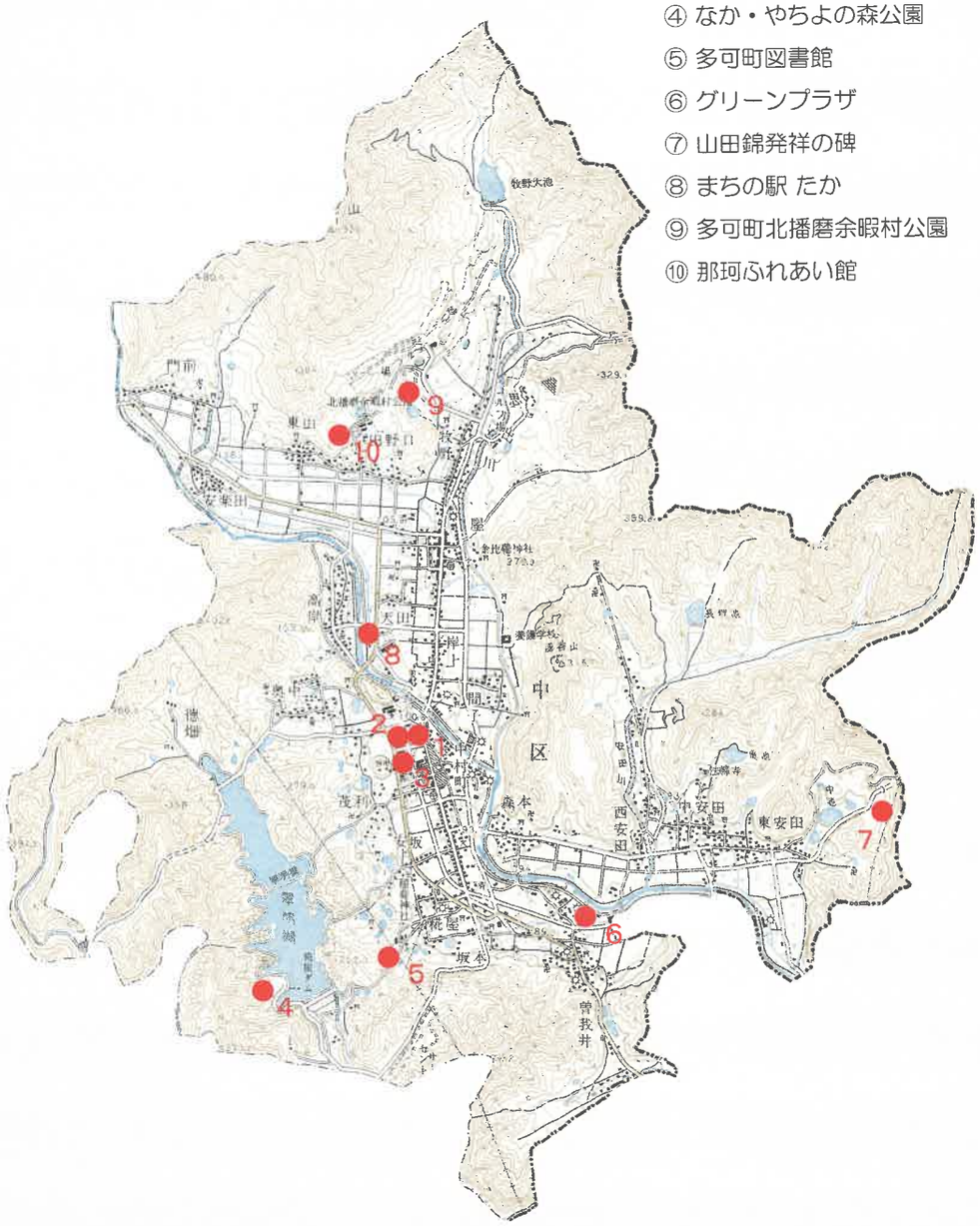
- 本書は多可町合併 10 周年記念事業の一つとして作製した記念誌である。
  本文中には町内 62 集落に残る社寺、祭礼、伝承等を掲載している。
- 本文中の原稿は、播磨学研究所 運営委員兼研究員　埴岡真弓 氏に依頼して作成し、
  編集は、多可町教育委員会 教育総務課 那珂ふれあい館にて行った。

多可町全図
播州峠
三国岳
三国峠
舟坂峠
竜ケ岳
清水坂
篠ケ峰
千ケ峰
加美区
飯森山
高坂峠
入相山
小野尻峠
石金山
笠形山
中区
石原坂
舟坂峠
武嶋山
八千代区
遠坂

中　区

中区地図

① 多可町役場
② ベルディーホール
（多可町文化会館）
③ 多可町中央公民館
④ なか・やちよの森公園
⑤ 多可町図書館
⑥ グリーンプラザ
⑦ 山田錦発祥の碑
⑧ まちの駅 たか
⑨ 多可町北播磨余暇村公園
⑩ 那珂ふれあい館



コラム

山　田　錦（やまだにしき）

現在 90 種以上ある醸造用玄米、いわゆる酒米の中で、昭和 11 年（1936）に誕生して以来「酒米の王様」として変わらぬ評価を受けている「山田錦」。多可町域でも広く栽培されているが、その母親品種「山田穂」は中区で誕生した。生みの親は、天保 14 年（1843）に東安田村で生まれた山田勢三郎である。なお、父親品種は滋賀県で育成された「短棹渡船（たんかんわたりぶね）」。「渡船」は明治・大正時代の代表的な酒米で、酒米の元祖といわれる「雄町」の系譜を引く。「山田穂」と「短棹渡船」は、大正 12 年（1923）にはじめて兵庫県立農事試験場で交配され、昭和 11 年の水稲原種改廃協議会で新原種として認められた。他府県でも栽培が行われてはいるが、今も北播磨を産地とする「山田錦」の評価は高い。

山田勢三郎頌徳碑

山田勢三郎は、２ヘクタール余りの田地を耕作し、多くの小作地も所有する豪農だった。江戸時代、東安田村は一橋領に属し、酒米「安田米」の産地として知られていたという。勢三郎は毎年２千俵もの米を作り、酒造家に販売していたとされる。そのかたわら米の品種改良に励んでいた勢三郎は、明治 10 年（1877）頃、自作田の中にすぐれた稲穂を発見。試作を繰り返し、ついに立派な酒米の育成に成功し、「山田穂」と命名した。勢三郎は小作人や近所の農家にも種子を分け、「山田穂」の生産量を増やすことに努め、明治 20 年代には多可郡内で広く栽培されるようになったとされる。出荷にあたって一俵一俵に「山田穂」の焼き印を押すなどの努力を重ね、「山田穂」は兵庫県の酒米の代表品種としての名声を博した。

明治 37 年、山田勢三郎が 61 歳の時、安田地域の有志は、「山田穂」の生みの親である氏を讃える頌徳碑を勢三郎の自宅近くの小高い丘の上に建立する。碑文には勢三郎が池を開くなど水利にも心を砕いたことも記され、「山田穂」によって村に豊かさがもたらされたことを感謝する文面が見られる。明治 39 年に描かれた肖像画は、羽織袴の正装に身を包み、扇子を手にして坐した姿の勢三郎を描いたもの。その風貌は、「性温厚行儀好恵修」と碑文に刻まれた、穏やかで真摯な篤農家であった勢三郎の人柄を偲ばせる。没年は、大正８年（1919）。なお、頌徳碑は、平成元年、県道柏原谷川中線開通に伴い、石原坂トンネル公園に移転された。

日本酒の日コンサート

多可町では、平成５年から毎年、日本酒の日である 10 月 1 日に歌手の加藤登紀子を招いて「日本酒の日コンサート」を開催している。また、平成 18 年には「山田錦」生誕 70 周年を記念して「日本酒で乾杯の町宣言」も行った。勢三郎が生んだ「山田穂」は、今もなお多可町に多くの恵みをもたらしている。

門　前（もんぜん）

瑞　光　寺

集雲山瑞光寺は臨済宗天龍寺派に属し、室町時代の地誌「峰相記」にも「松井庄瑞光寺」と見える古刹。本尊は釈迦如来。元弘２年（1332）、赤松円心の三男則祐が母の菩提を弔うため、夢窓国師を招いて開創したとされる。同寺が所蔵する夢窓国師画像は、重要文化財である天龍寺の妙智院本を手本に制作したとされる。また、夢窓国師を招請したのは、足利尊氏の母の兄弟、上杉憲房・憲藤だともいう。上杉家の系図には松井庄は尊氏から憲房に贈られたと記されており、憲房が「瑞光院」と号したのは瑞光寺に因むとか。この地方の名産「杉原紙」の権利を持っていたといい、室町時代の日記「蔭涼軒日録」には瑞光寺が幕府に納める杉原紙についての記載が見られる。15 世紀初めには、瑞光寺が松井庄の左方（東半分）を、赤松氏が右方を支配していた。また、天正時代に書かれた「赤松記」には、瑞光寺の僧が還俗して嘉吉の乱で断絶した得平氏を再興した話が載る。

背後の高城山は古城跡と伝えられ、秋にはモミジの紅葉が美しい。天正３年（1575）赤松氏が守る高城山は別所氏によって落城、寺も全焼したという。天和３年（1683）、夢窓国師の法孫である天龍寺 207 世、文礼周郁禅師が寺を再建した。享保 17 年（1732）、失火によって再び伽藍の大部分を失うが、妙音堂（弁財天）・聯芳堂（開山堂）のみは火災を免れた。「千石太郎兵衛」と称された池田太郎兵衛の一族が中心になり、有縁無縁の寄進によって寺は復興を遂げたとされる。境内の石碑などに、尽力した池田一族の名が刻まれている。聯芳堂が現在地に移築された跡地には、ミニ霊場が造られた。泉回遊式と枯山水様式の二つの庭園は、中興である文礼禅師が手がけたと伝えられ、禅風の優雅な佇まいを感じさせる。寺には文礼禅師の自画像や、文礼禅師が鞍馬寺で吉祥天女と和歌を唱和した奇瑞を描いた「中興夢中図」などが残されている。中興夢中図の作者狩野永納は、京狩野派の三代目。

字「宮ノ下」に鎮座する八幡神社は、元弘２年（1332）、瑞光寺の鎮守として夢窓国師によって勧請されたという。もとは山嶺に祀られており、来山した文礼禅師が古い祠を修理し「瑞光寺護法の嶺」と称したと伝えられる。安政２年（1855）、現在地に遷した。１月第３日曜日（もとは 19 日）に、厄除け大祭が行われる。３人のお祷人が世話をするが、９月のお祷渡しでは、子どもが鳥居と拝殿の間を往復するなど特徴ある習わしが見られる。

八幡神社お祷渡し

安　楽　田（あらた）

妙見山麓、字「喜四郎山」に鎮座する荒田神社は、少名彦命・五百箇磐石命を祭神として祀る。五百箇磐石命は、明治 40 年（1907）に合祀した妙見山にあった星神社の祭神。創立年代は明らかではない。

荒　田　神　社

天平神護元年（765）神封４戸を与えられ、延暦年間（782 ～ 806）に坂上田村麻呂将軍が社殿を造営、白馬 60 匹を奉納し、祭主として奉仕した。また、天平勝宝元年（749）に女体の唐人が降臨した等の記録があるが、「播磨二宮」とされる加美区の荒田神社との混同が考えられる。荒田神社は、慶長年間（1596 ～ 1615）には集落の東のはずれにあったという。安楽田は銅山を中心に江戸時代に町場化するが、寛文８年（1668）の荒田町大火で神社は別当寺の大乗寺とともに延焼。貝野村大歳神社の境内を拡張して合祀、同社を後に荒田神社と称するようになったと伝えられる。貝野村は、衰退して安楽田に併合された。境内には、元禄６年（1693）建立の鳥居や寛保３年（1743）建立の石燈籠が残る。延享３年（1746）には、拝殿・鐘楼・随身門が建立された。末社は、龍花神社・皇太神社・稲荷神社。参道の途中に大乗寺跡と伝えられる場所が残り、山中に同寺の坊主墓という石塔があるとか。

荒田神社の秋祭りは、10 月第２土曜日・日曜日。祭りに奉納される「荒田神楽」は町の無形文化財に指定されており、安楽田神楽保存会によって「背次ぎ」など伊勢太神楽系の獅子舞が継承されている。豪農池田太郎兵衛が、災厄に疲れた村人を励ましそうと村の青年たちに習わせたとも、度重なる災厄は神の怒りに触れた祟りとし、神の怒りを鎮めるため、青年たちに習わせ奉納したとも伝えられている。池田家は貞享３年（1686）には高 590 石を有した近在でも稀な大地主で、その内約４分の１は安楽田にあった。地区の墓地に同家の墓碑が残る。なお、荒田神社のお当人の什物に「天道主日女命降臨図」があり、この図を掛けて「宮の頭」を行う。かつては、前日に「塩ヶ淵」で禊を行った。

荒　田　神　楽

かつて荒田神社があったという集落の東には天満神社が祀られており、足利尊氏が北野天満宮に松井庄の土地を寄進した時に勧請されたともいう。祭礼は７月 25 日。近くにある光明寺跡（お大師さん）には、戦国時代の年紀が刻まれた供養塔など古い石塔が並ぶ。他に、「だいじゅさん」と呼ばれる小社で７月16日に神事が行われる。

杉原川の東岸に位置する安楽田女夫岩遺跡からは、古墳時代後期の古墳５基のほか、縄文時代早期の土器も出土している。

東　山（ひがしやま）

東　山　古　墳　群

妙見山の麓には、総数200基にのぼる古墳があった。お椀型の円墳が並ぶ不思議な景色から、大昔、火の雨が降った時アマンジャコ（天邪鬼）が造った隠れ場所だという伝承も生まれた。県の指定文化財である東山古墳群が築かれたのは、古墳時代後期の７世紀とされる。大型の古墳が姿を消していった時代だが、東山では県下でも最大級の石室を持つ東山１号墳をはじめ、巨石を用いた古墳が次々に造られた。この地域にはそれ以前に大型古墳はなく、突如として現れた謎めいた古墳群だといわれている。南の天田地区には７世紀後半に建立されたと考えられる「多哥寺」（現在の量興寺）、さらにその南に古代の郡役所跡と推定される「思い出遺跡」があり、東山古墳群の築造主とのつながりが指摘されている。

東山古墳群の内、整備されたのは、妙見山から延びた低い尾根上に位置する16基。やや北に離れた４基の北群と、他の12基からなる南群をなす。南群の内、石室が開口しているのは１・２・10・11・13・14・15号墳の７基。入口はいずれも南、あるいは南東方向を向いている。巨石を用いた石室が数多く見られる、貴重な事例として知られる。様々な副葬品も発見されており、平成８年度から行われた発掘調査では多くの学問的成果が得られた。１号墳の横穴式石室の床面には拳大の川原石が丁寧に敷き詰められており、耳環や玉などの装身具、武器や馬具などが出土した。石室の入口に供えられていた高坏などの土器は、東山古墳群で発見された土器の中で最も古いもの。12号墳の大型の石室からは、組み合わせ式石棺とともに珍しい家形陶棺が見つかっている。隣接されている那珂ふれあい館には町内から発掘された出土品が展示されているほか、歴史や伝統文化を素材にした体験学習もできる。野外には、播州歌舞伎などが演じられる舞台が設置され、組み合わせ式家形石棺（県指定文化財）が屋外展示されている。この石棺は、東山古墳群から谷筋を挟んだ、南西の山裾にある村東山古墳から出土したもの。

正　福　寺

氏神は大年神社で、「東山村古由来書」によると古くは字「宮ノ下」に神社があったが江戸時代に廃され、後に字「太郎兵衛山」にあった小堂を明治７年（1874）現在地に移して神社としたという。旧地には「みこし蔵」と呼ばれる場所があるとか。宝池山正福寺は浄土真宗本願寺派で、正徳２年（1712）釈了和尚の開基を伝えている。２月の永代経供養では、御供さんのお飾りや餅の塔が作られる。

田　野　口（たのくち）

清水寺　聖観音菩薩立像

字「観音北山」に位置する梅峯山清水寺は、門前の瑞光寺末寺の禅宗寺院。元弘２年（1332）夢窓国師によって開創されたとも、応永年間（1394～1428）瑞光寺８世の足谿周麟によって開かれたともいう。本尊は聖観音菩薩。近くに、村づくり事業としてつくられた「ひょうたん山いやしの森」公園がある。ひょうたん山には、天狗伝説が残る。いやしの森では、この地区のトンドを行う。清水寺の堂裏にはかつて「いやしの名水」と呼ばれる清水が湧いており、それが寺名の由来になったとされる。

同寺は、古くは地区の西南にあったが、ある時火災に遭い、本尊の観世音菩薩が現在地に飛び移ったという伝承を持つ。そのため、「火除け観音さん」と親しまれているとか。高さ111㎝、寄木造りの観音立像は平安時代後期の作といわれ、大切に祀られている。元禄年間（1688～1704）、瑞光寺の文礼周郁禅師によって再興されたという。文化13年（1816）に改築された。江戸時代は尼寺だったと考えられ、庵主さんたちの墓も残っている。今は無住となり、田野口の老人会の方々がお守りしている。

境内には、「弥勒さん」と呼ばれる、江戸時代の供養塔などがある。石段下の池には、弁財天を祀る小さな祠があり、モリアオガエルがいるとか。この弁天さまは昔貝野村にあった大乗寺の仏様だと伝えられており、家に持ち帰った村人がこの地に祀ったのだとされる。寛政８年（1796）の棟札が残されており、弁天社が古くからあったことがわかる。なお、清水寺には、表・裏に「御祈祷之札」・「観音堂供養仏餉」と刻まれた版木が残されている。

参道を下ったところに鎮座しているのが、氏神の名越神社。同社は慶長年間（1596～1615）の記録にすでに載っている古社で、もとは東山地区との境にあったという。旧社地は、「なごせ」「宮ノ下」と呼ばれている。祭神は住吉三神の表筒男命・中筒男命・底筒男命と市杵嶋姫命で、明和元年（1764）の棟札に「住吉大明神」の記載がある。昔は杉原川がすぐ南に流れていて、そこで「夏越の祓い」を行ったことが神社の名前の由来ではないかともいわれるが、棟札から江戸時代は「住吉神社」と呼ばれていたと考えられる。４月のお当渡しでも、「住吉大神」の掛け軸が引き継がれている。当人は「当元」「相当」の二人。

名　越　神　社

10月に秋祭りがあるが、かつては６月晦日、「夏越の祓い」の日が祭日だった。境内に、明和４年（1767）建立の石燈籠が残るほか、金刀比羅神社・八坂神社・稲荷神社などが祀られている。

牧　野（まきの）

牧野は、江戸時代「牧野千軒」といわれ、鉱山関係者で大いに栄えた。この地区に多くの姓があるのは、各地から鉱山で働くために人々が集まってきた名残だともいう。氏神は、字「町西」に鎮座する八幡神社。鳥居をくぐって石橋をわたる手前に稲荷神社が祀られ、２月の初午には子ども相撲の奉納がある。境内に石灯籠の下部分のような２本の石柱が立っており、由来は不明だが「おばけどうろう」と呼ばれているとか。

八幡神社　湯立て神事

八幡神社は、慶長９年（1604）天田に住む二郎右衛門によって創建され、初めは天田の加都良神社の氏神だったが、後に牧野村の氏神になったと伝えられる。祭神は、品太和気命。本殿の横に、太神宮社・諏訪神社・山の神社・鍋の森神社・猿田彦神社・秋葉神社・愛宕神社・戎神社など 11 の小宮が並ぶ。村内に祀られていた神々が合祀されたといわれ、入角鉱山跡には山神社と秋葉神社らしい小社址が残っている。拝殿は、延享４年（1747）、安政６年（1859）の改築。寛延元年（1748）建立の石燈籠や、同２年に寄進された漱ぎ石がある。現在の鳥居は昭和 59 年（1984）のものだが、参道北側に保存されている古い鳥居は寛政２年（1790）のもの。昭和８年（1933）に完成した牧野大池は、農業用水確保のため、地区の人々が長い歳月を掛けてほぼ手作業で築堤した。費用も莫大であったことから、八幡神社の秋祭りは行われないことになったという。

有名なのは、１月第３日曜日（もと１月 19 日）に行われる厄除祭。「厄投げ神事」（銭投げ神事とも呼ばれる）と「湯立て神事」が行われる。厄年の男女が祈祷を受けた後、拝殿の前に陣取り、厄払いの銭投げとして５円や 10 円、100 円など硬貨を、集まった子どもたちに撒く。湯立て神事で使われたクマザサの葉は縁起物として参拝者に配られ、三角形に折って魔除けとして玄関などに飾られる。神事が終わると始まるのが、お当渡しの儀式。お当渡しの席で、新しいお当の人々はくじ引きで触れ元となる「当元」を決める。お当は一組７、８人で勤め、月毎の「鍵番」を決めて神社の世話をするそうだ。また、八幡神社の東方には観音堂があり、慶長４年（1599）の毘沙門天像、天保 13 年（1842）の如意輪観音像が祀られており、数珠繰りが行われている。

観　音　さ　ん

「観音さん」と呼ばれているのは、西国三十三ヵ所などの多くの石仏が立ち並ぶ場所。享保 10 年（1725）喜兵衛という人が造ったという。「牧野のお地蔵さん」と親しまれる地蔵尊は、大飢饉があった同３年に建立されたと伝えられる。

鍛　冶　屋（かじや）

中区には、かつて「鍛冶屋線」という鉄道が走っていた。全通したのは大正 12 年（1923）５月、平成２年に廃止された。鉄路の跡地は「歩っ歩（ポッポ）の道」というウォーキングロード、終点鍛冶屋駅は記念館、曽我井駅はメモリアルパーク、中村町駅は「あかね坂公園」になり、気動車一両も鍛冶屋線記念館に保存されている。鍛冶屋線が一番にぎわったのは、終着駅の鍛冶屋にある大歳金刀比羅神社の秋祭りの時だった。「播磨の三大祭り」のひとつといわれ、臨時列車が出るほどの人出だったという。

鍛冶屋駅記念館

字「ヌタノ谷」に鎮座する大歳金刀比羅神社の祭神は、大歳神・大己貴命・保食神・事代主神。境内社の一つに、「金工神」とも記される天目一神社がある。明治時代の記録によると、天正３年（1575）に「宮ヶ谷」に祀られたとされる。永正 11 年（1514）の年紀を持つ神像の図も、描かれている。古老の伝説として、境内に金床があり昔は鍛冶職が集まって刀を打ったこと、北の方に天目一神にゆかりがあるらしい「御影塚」があることなどを記す。同社は洪水によって流失、文政年間（1818～1830）現在地に祀られ、大歳神社が合祀されて天目一神社は末社へと変貌していったとされる。大歳神社は延宝５年（1677）の検地帳にすでに載っているが、場所は確定できない。この検地帳には、「大日屋敷」「阿弥陀堂」も載っている。寛政６年（1794）、藤井孫右衛門が病気平癒を祈願し、讃岐の琴平宮から勧請した金刀比羅神社を祀る。近郷からも参拝者を集めるようになり、社地も狭くなり、明治 44 年（1911）氏神の大歳神社に合祀されたという。いずれの神名も捨てがたいとして、現在の大歳金刀比羅神社が誕生した。

11 月の金刀比羅祭りには、巫女舞いが女子中学生たちによって奉納され、男子小学生たちは「御供はさみ」として参詣者に「御供さん」を配る。町の無形文化財に指定されているのが、大晦日に行われる「スズメノモン」。「大歳さん」「金刀比羅さん」と呼ばれるお当人が勤める行事で、12 月 31 日公会堂（もとは当人宅）で玄米１升５合を鍋でいって杵でつき、ワラ苞に入れて「大歳さん」が背負う。「金刀比羅さん」の掛け声を合図に杖をついて神社へ。拝殿にワラ苞を納め、杖をご神木の杉に納める。大杉の前に祀られているのは 山神社。かつては杉の根元に当人が「スズメの宮」というものを作ったとか。その後、１月１日に当人の引き継ぎが行われる。また、１月の第２または第３土曜日（旧１月 14 日）に子どもたちがキツネガリを行う。

大歳金刀比羅神社

間　子（まこう）

坂本から鍛冶屋まで続く「ふしぎの道」は、「塩屋の足跡」「八百八橋」「寒タデ」「出水」「歩く雀」「石の子」「五月の幟」という、「間子の七不思議」をたどる道だ。「塩屋の足跡」は領主の姫君が遠乗りして塩屋のわき水で口をすすぎ、姫と馬の足跡が残ったという石。土地が低いため溝や川が多く石橋が多いという「八百八橋」。年中青々としている間子の「寒タデ」、「出水」はどんな渇水期にも枯れない七つのわき水。「石の子」は村の東にある「石の子山」から出る丸石で、子宝石と信じられていたとか。「五月の幟」は、軍勢の旗指物と間違えられないよう節句の幟を立てない習わし。落ち武者が敵勢のものと間違え切腹したともいう。「間子の雀」はトコトコ歩くといい、加都良大橋にはそのモニュメントがある。この中区でもっとも大きな橋の名前は、字「宮山」に鎮座する加都良神社に由来する。

塩谷の足跡

延喜式神名帳には「多可郡加都良之命神社」があり、諸説はあるが、明治時代にこの社が式内社とされた。社伝によれば、淳仁天皇の時代、天平元年（729）に大和国袖振山（吉野金峯山）より勧請され、「勝手祠」の呼称があるという。加都良神社も古くは「勝手大明神」と呼ばれた。もとは高田郷全体の氏神だったが、正保４年（1647）分離して間子一村の氏神になったといわれている。本殿は神明造り。拝殿に掛けられた絵額２枚は、天保 13 年（1842）４月の大祭を描いたもの。播磨・丹波・但馬の全ての神職が参加したと伝えられ、湯立て行事や神幸行列などが描かれている。秋祭りは 10 月第２日曜日で、明治時代には獅子舞が出ていた記録がある。神社の前を流れる思い出川では、７月に川下祭りが行われる。お当人が作った茅の輪をくぐり、大祓の神事の後、形代を川へ流す。花火も打ち上げられる。正月 14 日に近い土曜日の夕方トンドも、思い出川の川原で行われる。トンドが終わると、幼稚園から中学１年までの男の子たちが「ゴーカレ、ゴーカレ」と唱えながら全ての家を訪問。夜８時になると、小学校３年から中学１年までの男の子はお当人から御幣をもらい、村境に差して歩く。伝統的な「きつね追い」の行事だ。

川　下　祭　り

字「出口」にある恵比須神社は、商売繁盛の神として広く信仰され、かつては南にある小野原で 12 月 28 日「高田市」が開かれ、大いに賑わっていた。「亡者市」とも呼ばれ、本殿の中から亡者の声が聞こえたという伝承もある。大師堂には宝永５年（1708）の銘が刻まれた鰐口が掛けられ、室町時代の不動明王坐像や慶長３年（1598）造立の弘法大師像が安置されている。

岸　上（きしかみ）

間子の加都良神社のお旅所だったとされるのが、南垣内に鎮座する加都良神社。「宮の馬場」と呼ばれる地まで、神幸行列があったと伝えられる。間子の西に位置するため、「西宮」と呼ばれ、「西宮大明神」「西宮勝手大明神」と記された棟札が残る。かつては正月にキツネガリ神事がおこなわれていた。境内に秋葉神社の遙拝所があり、明治６年（1873）建立の石灯籠が立つ。岸上のお当は８人で、１月 10 日に近い日曜日にお当渡しが行われるが、加都良神社だけでなく、秋葉神社・祇園神社・御許神社の世話も行う。

秋　葉　神　社

秋葉神社は、字「妙法寺」に鎮座している。明治 20 年（1887）に安坂の諏訪神社を合祀。同 40 年（1907）に鍛冶屋の秋葉神社、牧野の戎神社を合祀、さらに岸上の若宮神社を合祀した。鎮火の神である秋葉神社は鉱山と関わりが深く、拝殿の石段は入角鉱山の鉱山長等によって寄進されたもの。旱魃の多い土地で火事が多かったため、文久２年（1862）安平重左衛門という人が遠州（静岡県）の秋葉神社（本宮）から勧請、「永寿講」を作って祀ったとされる。安平重左衛門は薬の行商をしていたといい、本宮のお札をもらい、自分の持ち山に祠を祀ったのが始まりと伝えられている。永寿講では、講員の代表が本宮へ参拝、お札を持ち帰って講員に配布した。かつて講員は多可郡、西脇市、加西市、氷上郡、神崎郡など広範囲にわたり、二千人を数えたとか。講はなくなったが、お札の頒布は今も続いている。例祭は、４月の第２日曜日（もとは３月）。かつては祭太鼓があって、橋が架かっていなかった思い出川の中へ入り秋葉神社まで行ったとか。

秋葉神社北側の山腹にある石の祠（阿弥陀さん）では、３月に阿弥陀祭りが行われる。隣接する大日堂に祀られている十一面観音像は、明暦３年（1657）の造立。字「西河原」にある小社、祇園神社の境内には、岸上出身の歌人橋本栄治の歌碑が立つ。字「垣内」に鎮座する小社、御許神社は「おゆるっさん」と親しまれ、どんな身の不浄でも浄めて下さるとして信仰が厚い。伝承によれば、安平氏の先祖が伊勢参りをした時、親族の死を知らせる飛脚が到来した。ケガレのため参拝すべきか悩んでいると、「ゆるす」というお札が天から舞い降りる。無事に参拝を済ませて戻った安平氏は、伊勢神宮の分霊を祀る祠を建立した。これが、御許神社の始まりという。

御　許　神　社

なお、岸上には「いちりやま」という小字が残る。姫路から丹波へ至る丹波街道の一里塚があったとされ、平成６年に一里塚モニュメントが建立された。

天　田（あまだ）

古代寺院「多哥寺」の系譜をひくことで知られるのが、天田の高寺山量興寺。高野山真言宗の寺院で、推古天皇の御願所として創建されたと伝えられている。創建時は塔・金堂・講堂が直線上に並ぶ四天王寺式の伽藍配置だったと考えられており、寺域は３丁四方に及んだとか。境内には塔の心礎とされる巨石が残っており、古代の郡名を冠した多哥寺の偉容がしのばれる。数度の発掘調査によって、白鳳時代と呼ばれる７世紀後半に創建されたこと、いったん衰微して平安時代前期に廃絶したことなどがわかっている。寺の北部では奈良時代後半の梵鐘鋳造遺構が検出されており、妙見山麓では瓦窯跡が発見された。「量興寺」として再興されたのは、平安時代末。天仁元年（1108）民部卿九条顕頼が建立、開基はその子ども寂信と伝えられる。

多哥寺塔芯礎（量興寺境内）

同寺には貴重な中世文書が伝えられており、町の指定文化財になっている。「量興寺寺領図」「地頭代仲原某畠地寄進状」「興善院領相伝系図」の３通で、寄進状は天福２年（1234）のもの。中区一帯は平家勢力の支配下にあったとされ、保元２年（1157）平清盛の義妹にあたる建春門院によって同寺の別当が任じられている。その後荒廃したものの、天正６年（1578）に地頭矢田部氏が本堂を再建。中興開山は良遍で、古名にちなむ「高寺山」を山号としたという。文政年間（1818～1830）には、寺子屋が開業されている。弘化２年（1845）火災に遭うが、再建された。本尊の薬師如来は、天正６年の造立。平安時代、鎌倉時代の仏像も祀られている。珍しいのは、天保５年（1834）造立の肖像彫刻、藤井孫右衛門像。孫右衛門は鍛冶屋油屋の６代目で、四国巡礼を数度行い、鍛冶屋に四国八十八ヵ所のミニ巡礼場を作った。

また、同寺には古い版木がいくつも残されており、地域の人々の信仰の中心であったことがわかる。１月に行われる「薬師当」では、今も牛玉宝印札をハゼウルシの木に挟んだ「ゴウヅイ」が２本ずつ配られ、お当人が住職から順に参加者の額にハゼウルシの木で赤土を押す貴重な習わしが残っている。薬師当の後、公民館でお当渡し。子どもの「七度半（しったはん）の使い」が行われるのが珍しい。隣接する加都良神社は正保４年（1647）間子からの分祠と伝えられ、１月１日に境内の八柱神社でハナフリ行事が行われる。１月14日には子どもたちが唱え事をしながら村の境に御幣を立てて歩く「きつねがり」の行事が行われるが、公民館で御幣の祈祷を行うのは量興寺の住職である。

薬　師　当

高　岸（たかぎし）

高田山浄福寺は、浄土真宗本願寺派の寺院。文明12年（1480）３月、京都より法賢という僧が訪れ、当地に道場を開いたと伝えられる。延宝の検地帳に「道場」の記載があり、道場主と考えられる「教了」の名が見える。浄福寺となったのは寛永７年（1630）、開基は道知。貞享元年（1684）に、木仏・寺号を許されている。元禄２年（1689）に本堂を建立し、移転した。本堂は、慶応元年（1865）に改築されている。本尊の阿弥陀如来は「安阿弥」様式とされ、「康雲」という仏師の銘がある。江戸時代の造立。本堂には、江戸中期の親鸞聖人絵伝や蓮如上人真筆と伝えられる六字名号なども安置されている。11月に報恩講を行う。かつては、正月９日から15日までに、婦人会や青年会などがそれぞれ報恩講を行っていたとか。また、２月に浄福寺の創立を記念する「御入寺」がある。

浄福寺　阿弥陀如来立像

字「老いの木」にある藤塚神社は、間子の七不思議の一つ、「五月の幟」に関わりがある。昔、別所長治が守る三木城が落城した時、ある武将が高岸まで逃げのびたが、間子に立った幟を見て藤の古木のもとで自刃した。哀れんだ村人が小社を祀ったのが、「藤塚さん」だとか。高岸の氏神は字「茨谷」に鎮座する大歳神社で、散在していた小社を合祀したとされる。明治７年（1874）に村社となり、同15年に「大歳神社」となった。境内社は、妙見神社と稲荷神社。大歳神社の秋祭りは、10月上旬の日曜日（もとは10月20日）。かつては奉納相撲が行われ、地方力士や行司を輩出した。１月にお頭渡し、２月に初午がある。2012年から４人のお頭人が２人となり、年４回あった「頭送り」も廃止された。「頭送り」は、３ヶ月ごとにお頭人が預かっている「神さん」（お当事箱）を次のお頭人宅に送り届ける儀式のこと。御幣を持った宮総代、「神さん」を持ったお頭人、「頭箱」を担いだお頭人の身内が、触れ太鼓をならし、伊勢音頭を歌いながら歩いた。

高岸から加美区山野部へ通じる、滝野街道に「フジノタナ」「鉾立」と呼ばれる崖がある。崖下の深い淵には龍神が棲むと信じられ、崖上の「雨乞い岩」という大岩では雨乞いの祈祷が行われたという。雨が降り続くと「陽乞い」の祈祷も行われたとか。なお、天田にある「隠岐の国のあごなし地蔵」は、高岸の人によって祀られている。「やなぎ寺」という寺があったことから「柳地蔵」とも呼ばれ、口の中の病に霊験あらたかとされる。「いぼとり地蔵さん」としても知られる。隠岐に流された小野篁が土地の娘阿古那（あこな）に与えたものと伝えられ、「あこな」が「あごなし」に転訛したとか。

大　歳　神　社

奥　中（おくなか）

多可町には、「播磨国風土記」に登場する巨人「大人」（おおひと）の面影を宿すアマンジャコ伝説が残っている。奥中のミニパークはそのひとつ、二つの山を運ぼうとして折れてしまった石の担い棒とされる、伝説ゆかりの石、「アマンジャコの長石」をモニュメントとして飾っている。長石と呼ばれる二つの石は、もとは用水路の中にあって分水の目印としての役割を果たしていた。

アマンジャコの長石

奥中にある高野山真言宗寺院が、神亀２年（725）法道仙人が開基したと伝えられる福王山観音寺。開基は行基とも伝えられる。什物の銘などから、もとは「西谷山」であった山号がいつの頃からか「福王山」となったとされる。本尊は十一面観音で、嘉永元年（1848）仏師山本平蔵の銘を持つ。本堂の弘法大師像は、明和６年（1769）吉田源之丞栄重の作。境内には、文化年中（1804～1818）夢告によって境内の楓の古木の下から掘り出されたという「日限り地蔵」が祀られている。遠近から信者が多く参詣したといい、楓の古木は近年まで残っていたとか。古い庭園や、旧多可郡役所の門柱なども残されている。また、多可町最古の歌碑でもある安政３年（1856）の石灯籠が立つ。名が刻まれている憲賀は観音寺の僧で、同寺で開かれた寺子屋の師匠を務めた。弟子たちが建てた墓も残っている。中央に「薬師如来」の名がある珍しい牛玉宝印の版木が残っており、今もお札が村総会で配られる。観音寺の山号「福王山」と同じ「福王寺」という名が残るのが、字「新宮前」に祀られている「桜木地蔵」。銘文によれば、寛政７年（1795）に奥中村が施主となって建立した。

その近くに熊野神社が鎮座する。前方の新宮池は、熊野灘を模したものとか。明治41年（1908）大歳神社を合祀したが、災いが続き、大歳神社を元に戻したと伝えられる。11月に、日の出とともに松明を燃やす「よいよいば」と「権現祭り」が行われる。このあたりは鵺退治の伝説で名高い源頼政の所領だったといい、頼政が熊野新宮から十二社権現を勧請、その内の天神三座を久安年中（1145～1151）大姫山に祀ったと伝えられる。文永４年（1267）天神社が火事になり、農夫久兵衛が神体を「束田」に移したという。その跡地とされる場所に小祠が残っており、この天神を夢のお告げによって徳畑に遷座したと伝えられている。

虫　送　り

奥中は、復活した虫送り行事が続いていることでも知られる。なお、地蔵菩薩や薬師如来なども祀られ、地区の人々に信仰されている。また、いくつかある池の内、蛇池は水が引くと蛇の舌が見えるという伝承を持つ。この池に神輿を放り込んで雨乞いしたともいう。

徳　畑（とくばた）

天神郷の奥中・徳畑・茂利・中村町の４地区は、徳畑の字「長尾谷」に鎮座する天神社の氏子。春祭りには神輿や各地区の屋台や子ども神輿が出て大変にぎわう。神輿は、天保４年（1833）大坂御堂門前の大和屋松尾吉右衛門で誂えたもの。神輿は、天神郷の男子中学生によって担がれる。祭神は、天御中主・高皇産霊・神産霊の「造化三神」と菅原道真。造化三神は、「天神（あまつかみ）」と呼ばれる神々の中でももっとも古い由緒を持つ。

天　神　社

伝承によると、熊野新宮の奥三神殿を祀り、熊野浦を模して「新宮池」を築き「桜木地蔵」を安置したとされる。新宮池・桜木地蔵は奥中に所在。奥中から宮遷りしてきた経緯については、「天神之御由来記」などにも詳しく書かれている。元禄年間（1688～1704）に京都吉田家から浦川和泉守が派遣され、近年まで浦川家が神官を務めていた。深遠な雰囲気に包まれた杉木立の参道があり、随身門は慶安４年（1651）の造立。「天神之御由来記」によると、明石郡神部村の仏師が随身像を刻んだという。本殿・幣殿・舞殿・拝殿と並ぶ風格のある社殿で、彫刻なども凝った意匠が施されている。拝殿に、「天神沿革」・「天神宮由来」の額が掛かっている。「天神沿革」によれば、明和元年（1764）に本殿・拝殿・舞殿が焼亡、本殿は翌年に棟上げされた。地区に残された記録に、明和３年「天神宮御遷宮」と記されている。

幣帛・神璽に「明和３年」の年号が残る。金幣は、嘉永元年（1848）「奥中邑六良兵衛」の寄進。拝殿には芝居絵などの絵馬が掛っているが、「索牛図絵馬」は、天保14年（1843）、宝亀院という寺子屋の寺子らが願主となって奉納している。

製作したのは、加美区山野部の常楽寺の絵馬にもその名が残る「資彦」。他にも、「手習社中」によって奉納された安政３年（1856）の絵馬があり、中区荒田神社などに作例が残る「服部南野」の名が記されている。また、地区にはいくつかの石造物が残されており、なかには半浮き彫りの手法で彫られた弘法大師と地蔵菩薩が並ぶ石碑も見られる。古い宝篋印塔や五輪塔など石塔が集められた場所もあり、徳畑の歴史を今もひっそりと伝えている。

天神社　随身像

翠明湖は、北播磨でも最大級の貯水池。中央に翠大橋がかかり、四季折々の風景が美しい。糀屋ダムによって仕出原川をせき止めて出来た湖で、徳畑、糀屋新田地区の大半の住民の移転によって、平成３年に完成。公募によって、「翠明湖」と名づけられた。多可町の観光、レジャースポットの一つとして親しまれている。

茂　利（しげり）

タケノコの産地で知られる茂利は、中世奥中と併せて「中村郷」と称されていたという。後に北の山側に位置する地域を「奥中」とし、南の大歳神社周辺の樹木の生い茂った地域を「茂利」としたとか。茂利の氏神大歳神社は、文永年中（1264～1275）には鎮座していたことが、徳畑の「天神之御由来記」に記されている。なお、同書には平安時代、中村郷が源三位頼政の領地であったとも記されている。茂利は奥中、徳畑、中村町とともに天神社の氏子でもあり、同社の春祭りには屋台や神輿を出す。宵宮には、茂利、奥中、中村町の屋台が大歳神社へ宮入りし、御旅所となる。

春　祭　り

大歳神社は、かつて茂利村と中村町２ヶ村の氏神だったと伝えられている。江戸時代初期の建築だったとされる大歳神社の旧本殿には棟札があり、寛文８年（1668）再興、願主は中山弥次兵衛・奥村太郎太夫だったことが記されていたという。旧本殿は、老朽化のため平成８年に改築された。お当の５人は、大歳神社と丸山の頂上にある祇園神社・山の神の世話をする。お当人は各隣保から一人ずつ出ており、お当事箱は、「元締め」となったお当人が預かる。１月のお当渡しの時には弓と的が飾られ、謡曲が流される。昭和 50 年頃までは「本当」「相当」の二人で勤め、太鼓を叩き賑やかにお当送りの行列をしたという。大歳神社の秋祭りは９月に行われるが、お当人は４月の春祭り、７月の祇園神社祭りにも世話をする。

祇園神社の創立年代ははっきりしないが、什物の一つには「安永九年（1780）西海坊　九月吉日　僧侶　三昧敬白」の文字が残されている。鎮座地の丸山は古墳で、昔頂上付近から遺物が見つかったとも伝えられている。中村町の近藤安太郎氏がさまざまな樹木を植えて「近藤植物園」とした時代があり、いまもその標柱が残っている。７月の祇園祭りでは、お当人は早朝から準備し、午後４時から神事が行われる。昔は、田植えが無事に終わったことを田の神に感謝する「さなぼり」行事と兼ねて行われていたとか。

田中大池近くに立つ小堂、観音堂は、かつて草葺き屋根だったという。本尊は、木造の東向如意輪観音。戦後になって床下から見つけ出され、安置し直された。脇に、石造弘法大師像が祀られている。いつの頃かこの石像の重みで床が抜け、本尊が床下の山砂の中に埋まっていたのを、村人が発見したそうだ。８月には、お盆の数珠繰りが行われている。平成 24 年に復活された 12 月の護摩供養は、今後５年ごとに行われるという。また、観音堂には、文化 13 年（1816）の俳額が掛かっている。

観音堂　数珠繰り

中　村　町（なかむらまち）

中世は安田庄に属し、中村郷と呼ばれていた地域で、姫路から丹波への街道が通っている。早くから町場化したとされ、安永６年（1777）と天保 11 年（1840）に大火のあった記録が残っている。「慶長国絵図」にすでに「中村町」と記されており、江戸時代は幕府領。郷蔵があったとされる。慶応４年（1868）に起きた多可郡一揆は、中村町の庄屋宅が襲われたことが発端となった。「播磨鑑」に医業博学で知られた奥村玄随（瑞）がいたことが記されているが、嘉永４年（1851）には医師奥村謙斎宅で巴流寺子屋が開かれた。徳畑の天神社に、「巴流生徒中」が奉納した明治８年（1875）の絵馬が残る。

祇　園　神　社

字「河端」に鎮座する祇園神社はもと字「岡ヶ鼻」にあったが、不便ということで稲荷神社・恵比須神社・星神社が祀られていた現在地に昭和３年（1928）に移転。３社を合祀して、祇園神社を本社とし、３社を末社とした。旧社地には、「祇園神社の宮跡」と刻んだ石碑が建てられている。この場所から現在地まで、本殿と長床を特別仕立ての牛車に乗せて運んだという。祇園神社では、１月に「十日戎」とトンド、２月に初午、７月に祇園祭（夏祭り）が行われる。祇園神社のお当は、戦前までは一升枡の米の中にこよりを入れ、くじ引きして選んでいたとか。字「川原」に鎮座する「だいじゅんさん」は、皇太神（豊受大神）「だいじんぐうさん」が訛ったものといわれる。祭りは 10 月。

中村町の薬師堂は茂利にあり、飛地となっているが、これは中村町が奥中・茂利から分村し、形成された町場であることによる。現在地は江戸時代、真言宗の金向山善福寺があった場所で、同寺には庵主さんがいたと伝えられている。明治後期に廃寺になった。薬師堂は中村町コミュニティーセンター近くにあったもので、戦後に善福寺跡に移転された。なお、薬師堂には高札場があったとされる。善福寺の遺物としては、鎌倉時代中ごろの作とされる薬師如来坐像や扉絵、石造の弥勒菩薩像があり、弥勒菩薩像は文政 12 年（1829）の造立。長寿会の主催で、年３回数珠繰りが行われている。５月は筍ご飯、12 月はぜんざい、２月は大根煮が振る舞われる。かつては、なな茶飯が振る舞われたという。２月の大祭には量興寺住職の読経があり、同寺の牛玉宝印のお札を長寿会が用意した細竹に挟んだ物が配られる。

地蔵盆の数珠繰り

茜坂の「いっぷく地蔵」では、地蔵盆には数珠繰りが行われる。なお、奥中に残る長石は、アマンジャコが奥中の太子山と中村町の丘山を両端に結びつけ、運ぼうとして折れた石の担い棒だと伝えられている。

安　坂（あさか）

永坂山鳳凰寺は、天台宗比叡山延暦寺派に属する。白雉元年（650）法道仙人の開基を伝えており、古くは糀屋新田の字「長坂山」にあったとされる。天正時代（1573～1592）に兵火にかかり、逃れて現在地に小堂を建立し、法灯を守っていたという。貞享年間（1684～1688）、法性院円遵和尚によって再興された。享保10年（1725）には、小銅鐘が鋳造されている。山号を長坂山から永坂山と改め、普光寺（加西市）末寺となった。

鳳　凰　寺

本尊十一面観音は一木造りで、室町時代の作。観音堂に祀られている不動明王は江戸時代の作で、「安坂村鳳凰寺」の銘がある。現在は使用されていないが、版木が5点残っており、その内の1点「不動明王札」は、鍾馗らしい絵像と陰陽道と関わりの深い五芒星が刻まれている珍しいもの。書画としては、江戸後期の涅槃図が伝えられている。また、「入唐求法巡礼行記」を著した、第3代天台座主の円仁（慈覚大師）巡錫の地という伝承があり、千日回峰行を2度成し遂げたことで知られる酒井雄哉師が訪れ、2点の書を残している。

字「箱谷」に鎮座する八坂神社が安坂の氏神で、祭神は素盞嗚尊。延宝の検地帳には記載が無く、創立年代ははっきりしない。境内社は諏訪神社。岸上の秋葉神社の由来記に、字「奥谷」にあった諏訪神社を明治20年（1887）に合祀したことが記されている。

安坂は糀屋・曽我井・森本・坂本とともに糀屋稲荷神社の氏子となっており、2月初午祭の弓射行事を今も継承している。それぞれの地区が的を用意し、お当人は自分の地区の的を射貫く決まりという。初午祭の後に、安坂の公民館で行われるのが、「初午当」と呼ばれるお当渡し行事。盃の交換の時に、謡が謡われ、男の子の「おさかなこれに」という言葉を合図に酒を飲み干す習わしが残る。祭壇には、「氏子5ヶ村は一村なり」という意味で一本の竹を5等分して作ったと伝えられる「的の尺竹」も飾られる。尺竹は安坂・糀屋・坂本のみに残されていたが、近年になって森本でも復元された。糀屋稲荷神社の秋祭りは氏子地区が順番に祭当番を務めるが、御神灯は古くから安坂の担当と決められている。なお、安坂の屋台は、明治30年に市川町市場から購入したもの。8月21日にはお大師祭りが行われ、数珠繰りがある。地蔵堂では、8月24日は地蔵盆が行われる。いずれの行事にも「なな茶飯」が振る舞われていた。また、9月1日には、安坂の共同墓地の入口にある「如来塚」で鳳凰寺住職が回向する行事が受け継がれている。

お当渡し祭壇

糀　屋（こうじや）

字「稲荷山」に鎮座する稲荷神社は、推古2年（594）に字「土井の後」に鎮座、神託により天安元年（857）現在地に移ったと伝えられる。中世には安田庄の鎮守神だったという。「平家物語」に、源義経を鵯越えに案内した多賀菅六久利がこの荘園の下司職だったと記されている。後白河法皇の寵愛した高階栄子（丹後局）が、同庄の領家だった時代もあった。天福2年(1234)には地頭代官、康永6年（1347）には足利尊氏が社領を寄進。永正元年（1504）には、赤松氏から釣鐘が奉納された。元亀2年（1571）兵火にかかり、天正元年（1573）再建されたが、同3年に別所氏に攻められる。慶長5年（1600）、初代姫路藩主の池田輝政によって社領を寄進された。

稲　荷　神　社

稲荷神社は、本田忠刻に再嫁した千姫が、自らの安産や娘勝姫の安産を祈願した神社として知られる。寛永11年（1634）には社殿、同20年には薩摩杉で造られ、「薩摩堂」と呼ばれた護摩堂を千姫が寄進したという。その社堂は現存しないが、家光によって朱印地が与えられ、代々社領が安堵された。糀屋谷から坂本への坂は、もと「三坂」だったが、千姫の安産を稲荷神社に祈願した使者が護符を持って越えようとした時、安産の知らせを受けたことから「産坂」となったと伝えられる。旧県社で、今は糀屋・曽我井・安坂・森本・坂本が氏子。境内に大日如来を祀る大日堂がある。背後の山に稲荷の小宮が祀られ、山麓から赤い鳥居が巡らされている。2月初午祭には弓射行事が行われ、8月1日の八朔祭りはダンジリや花火などでにぎわう。秋祭りは、神社奉賛会と祭当番地区によって行われる。

かつて、稲荷神社には延命寺という別当寺があった。持仏とされる仏像が残っており、千姫関係の文書や棟札などにその名が見える。延命寺は法道仙人開基を伝え、もとは坂本の「クゴ田」にあったが、その後に同社近くに移ったとされる。千姫との関係には、中興秀甫法師の功績があったという。伝承によれば、稲荷神社の森の南に庄太夫という庄屋があり、その娘が秋祭りの日行方しれずになった。翌日の夜神社の大杉の上にいるのを発見。高くてだれも登れなかったが、延命寺の住職が祈祷すると、娘は大杉から静かに降り立った。庄太夫は娘を稲荷神社の巫女とすることを決め、代々その家から巫女を奉ったとか。なお、大石内蔵助の親戚筋にあたり、討ち入りの盟約に参加しながら脱盟した奥野将監定良の墓と伝えられる石塔が墓地にある。

稲荷神社　秋祭り

坂　本（さかもと）

鳳　泉　寺

法道仙人を開基とするのが、糀屋稲荷神社のすぐ南にある臨済宗の瑞雲山鳳泉寺。聖武天皇の時、行基が開いたともいい、法幢寺を再興した大愚宗築の高弟黙印和尚が中興とされる。延宝の検地帳には「法音寺」、元禄の検地帳には「禅宗鳳凰寺」と載っており、次のような伝承を持つ。かつて、糀屋新田に長坂山鳳凰寺という寺があったが、天正年間（1573～1592）兵火にかかり、二院に分かれた。安坂へ逃れた一院が永坂山鳳凰寺になり、観音像を奉じて逃れた一院が、坂本の字「草山」の通称「南観音谷」に移った後、現在地に来て鳳泉寺になった。本尊の聖観音立像の手などに補修があるのは、そのとき兵火で焼けたためだとか。

糀屋新田の長坂山鳳凰寺は糀屋・奥の谷遺跡に、字「草山」の通称「南観音谷」は坂本・観音谷遺跡に相当するとされ、いずれも山林寺院跡が確認されている。聖観音立像は平安後期初頭のヒノキの一木造りで、県の指定文化財。昔は、その前で数珠繰りが行われていたという。達磨大師像は、享和元年（1801）の造立。庭は小堀遠州の作と伝えられる。近くの木立の中には住職の墓や古い石塔が並ぶが、その中の地輪部分に永和２年（1376）という年号が刻まれた五輪塔がある。文化３年（1806）の年号も刻まれており、室町時代に建立された五輪塔が荒廃した後、江戸時代に復元されたのではないかと考えられている。明治35年（1902）、字「クゴ田」にあった阿弥陀堂が鳳泉寺に合祀された。

「西阿弥陀」ともいったこの阿弥陀堂の跡地には、弘化４年（1847）造立の供養塔が立つ。その供養塔の下からは、光明真言を墨書した大量の経石が発見された。クゴ田は「供御田」で、糀屋稲荷神社の社領だったとされる。別名「しゃうめうじ」、あるいは「せんめい寺」ともいい、昔、照明寺という寺があったが、天正時代に稲荷神社の北に移され、同社の別当寺、延命寺となったといわれる。地蔵堂に祀られているのは、享保６年（1721）造立の石造地蔵菩薩。

鳳泉寺　聖観音菩薩立像

村の氏神は八幡神社だが、糀屋稲荷神社を祀る５ヶ村のひとつでもあり、お祷人は同社の２月初午、10月の秋祭りに奉仕する。７月にお日待祭がある八幡神社は字「友竹」に鎮座するが、附近に「土井の内」の字名が残っており、中世の土豪の居館と伝えられている。同所に鎮座する當勝神社は、「地神社」「二社様」とも呼ばれ、粟賀（朝来市）の當勝稲荷神社を勧請したという。土豪の居館にあった地神と合祀したので「二社様」とも呼ばれたとか。12月23日に「にじゅうそう」の祭りが行われる。

曽　我　井（そがい）

崇福寺　多層供養塔と仏頭・泥塔

字「山添」に位置する少林山崇福寺は臨済宗妙心寺派に属し、本尊は阿弥陀如来。慶安３年（1650）の開創を伝えている。中安田の法幢寺が本寺。開山の大愚宗築禅師は廃寺36ヵ寺を興したといわれ、法幢寺もまた禅師を中興とする。同寺の境内には、弘安８年（1285）の銘を持つ石造層塔が立つ。高さ２m余、七層の石塔で、兵庫県下でも数少ない鎌倉時代の多層供養塔として知られている。もとは字「山添」の北、字「堂ノ本」にあったが、昭和６年（1931）に修復され、同45年に崇福寺の境内に移された。昭和６年の修復時には、土中より鎌倉時代のものとされる石造の小仏頭２個、梵字のある泥宝塔１基も発見された。「堂前」「堂西」などの字名が残っており、中世に大きな寺院があったのではないかとも考えられている。なお、この石塔の下には、金の鶏が埋められていると伝えられていた。

崇福寺に残る記録には、曽我井の「株」にまつわる伝承が載っている。ひとつは、「徳平」株に関連するもの。文永２年（1265）安田庄にある霞ヶ城（森本城とも）の城主徳平采女正を祀った五輪塔が森本村宮山の藪にあり、寛政10年（1798）に森本と曽我井の徳平姓の家々が共同で供養したという。もうひとつは「大西」株の話。正元元年（1259）に没した大西権之助の父親、権之守規隆は三代将軍源実朝の家来で、多可郡に逃がれて住み着いた。山中に、大西株の祀る「実朝ゆかりの人の墓」と伝わる石塔があるとか。規隆の姉は藤原景倫の娘と記されているが、景倫は法名を願性といい、実朝の菩提を弔い、虚無僧でおなじみの普化宗の開祖法灯国師を後援したことで知られる。

氏神は、字「榎木」に鎮座する大年神社。江戸時代初め、延宝の検地帳に載る。「初午当」と呼ばれるお当があり、初午の日に行われる弓射神事では「花ガラ」と呼ばれる小さな的が参拝者に配られる。その後にお当渡しが行われ、お当事箱に入っている扇子を引き継ぐ。なお、曽我井は糀屋、安坂、坂本、森本とともに、糀屋稲荷神社の氏子である。

大　年　神　社

曽我井は、アマンジャコ伝説のひとつに登場する。ある時、アマンジャコは、田植えが終わった田に供え物をしながら加美区山寄上から南へ歩いてきた。ところが、曽我井で夜が明けてしまったため、曽我井から南の村ではタマツリをしない。曽我井まで来たアマンジャコが腰掛けたという石があったが、道路拡張のため山中に移された。その石を復元した「あまんじゃこの腰掛石」が、2014年に設置されている。

森　本（もりもと）

森本の氏神、日吉神社は中世の山城、森本城の山麓に鎮座している。森本城は霞ヶ城ともいい、安田庄の地頭得平頼兼によって築かれ、天正年間（1573～1592）藤本巻右衛門秀清が城主となり、別所重棟に攻められ落城したとされている。祭神は大山咋命。創立は明らかではないが、延宝５年（1677）の検地帳にすでに載っている。寛永13年（1636）に再建されたことを記した棟札が残っており、中区でもっとも古い神社建築。後補の部分もあるが、保存がよく、彩色も残っている。特に、いろんな動物や植物の姿をモチーフとする細部の彫刻には技巧がこらされており、蟇股には「見ザル、言わザル、聞かザル」の三猿の教えが彫り込まれている。古くは「山王宮」「山王社」と称し、明治になって「日吉神社」となった。境内社は、太神宮と金刀比羅神社。日吉神社の背後には巨岩があり、古くは磐座信仰があったとも考えられている。なお、お当渡しは、４月の春祭り。

日　吉　神　社

同神社の裏の山腹には、観音堂が祀られている。昭和56年（1981）旧の観音堂を取り壊した時に発見された棟札には、「享保元年（1716）」「宝林山常福寺」の文字が残っていた。境内に延命地蔵や不動明王などの石仏があるが、墓地内には中世の年号を刻んだ石塔が残っている。小さな石室に納められた宝篋印塔で、大永２年（1522）の年紀を持つ。その脇にも石室に納められた五輪塔の残欠や、古い板碑などが並んでおり、観音堂周辺の歴史の古さを感じさせる。かつて、この観音堂には耳の悪い人が多くお参りしたという。旧堂の扉にはカナクソ軽石や自然石などの穴があいた小石が数珠つなぎになっていたとか。参拝者が満願に供えたもので、今はお堂の縁の下に40個ほど残っている。本尊は、木造の十一面観音立像。

糀屋の字「樫木町」に鎮座する大年神社は、慶長の検地帳にすでにその名が記されており、古くは「大歳神社」と記されていた。お祭りや社殿の修築などは、森本が行っている。糀屋稲荷神社の御旅所で、明治初期まで同社の末社だった。貞享３年（1686）の棟札に、吉重山圓満寺法印長祐僧都の名がある。なお、日吉神社、大年神社ともに、弘化４年（1847）の彩色修理銘を持つ男神像が残されている。

観　音　堂

かつて滝野行橋へとつながる街道筋だった、杉原川沿いの字「酒迎松」。昔、ここに松の古木があった。伊勢参りに行った者が帰ってきた時、村人らが酒や弁当を用意し、羽織袴で迎えにそこまで行ったと伝えられる。酒迎松は「境迎松」ではないかとされ、枯れた古木の根元に小祠が祀ってあったという。

西　安　田（にしやすだ）

長野の本谷の奥に位置する、高野山真言宗の吉祥山圓満寺は、大化５年（649）法道仙人によって開かれたという由緒を持つ。播磨地域の多くの寺にこの仙人を開基とする伝承が伝えられており、もっとも古い伝承は法華山一乗寺（加西市）に残っている。弘法大師の中興を伝え、本尊は薬師如来。大永年間（1521～1528）に焼亡したとされ、衰微していたが、慶長14年（1609）に明覚上人によって再建された。

圓　満　寺

明覚は「台昉」とも称す。河内国に生まれ、高野山で修行を積み、播州と丹波の７ヶ寺の再興を志して山を下る。圓満寺の他、神崎郡福崎町の七種山金剛城寺などを再興した。圓満寺と金剛城寺に、明覚没後に弟子が造立した坐像が残されている。明覚は、姫路城ともゆかりが深い。慶長16年（1611）、城主池田輝政が病に倒れた時、法力が評判だった明覚が招かれて姫路城で病気平癒の祈祷を行った。圓満寺文書によれば、姫山の神であった刑部（長壁）明神が姿を現し、明覚と問答。明覚の助言により、輝政宛てに届いていた「天狗の手紙」に従って姫路城の鬼門に長壁神社を祀ったという。輝政の病状は回復し、この功により圓満寺は輝政から寺領を賜ったとされ、「天狗の手紙」や明覚が祈祷に用いた法具などが寺に伝えられている。

圓満寺の旧本堂があった場所には、母乳の出をよくする霊験があると女性たちに信仰されてきた「乳薬師の大イチョウ」が立つ。明覚が圓満寺にやってきた時、この木を眺めていると地中からクモがはい出てきたそうだ。木を登っては落ち、登っては落ちするので不思議に思い、その根元を掘ると経典と法具が現れた。石櫃や宝銭が出たともいう。圓満寺には鎌倉時代のものと推定される陶製の経筒（経典を納める容器）が残されており、伝承との関係が興味深い。なお、明覚が描いたとされる薬師如来立像図が、町指定文化財となっている。

平成元年～６年に行われた発掘調査で、現在寺院がある「本谷」とその東に位置する「宮ヶ谷」にわたって数々の伽藍が建ち並び、中世山岳寺院として栄えていた様子が明らかにされた。寺に残る古絵図にも、山門や仁王門、６つの塔頭、多宝塔などが描かれている。なお、字「森ノ前」に鎮座する大歳神社のご神木で、明覚が高田村の宇右衛門と共に「如来の尊影」を刻んで安置したと伝えられる。

明覚上人坐像

大歳神社の創立年代は不明だが、17世紀の半ばに作成された検地帳に載っており、その歴史は古い。西安田は中安田に鎮座する稲荷神社の氏子でもあり、秋祭りにはお祷人が宵宮の夜遅く「丑の刻参り」を行う。同社境内と字「花木谷」には當勝神社が祀られており、初午の日にお祭りがある。

中　安　田（なかやすだ）

大雄山法幢寺は、康永元年（1342）、夢窓国師に帰依した足利尊氏によって建立されたと伝えられている。臨済宗妙心寺派。「尊氏将軍御自筆日地蔵」と裏書きされた絹本の地蔵尊図が残っており、現在の本尊は聖観世音菩薩だが、創建当時は地蔵菩薩だったという。同寺は、天正９年（1581）兵火にかかり衰亡。寛永11年（1634）、京都・妙心寺の僧、大愚宗築が訪れた時は、夢窓国師の木像が残るのみだったとか。

法　幢　寺

開山堂に祀られている夢窓国師像は、室町時代の作。大愚和尚は美濃国生まれ、桃山時代から江戸時代初期に臨済禅の興隆に貢献をし、播州・但馬・丹波に大きな足跡を残した。法幢寺では、里人が大愚和尚の来寺を夢で予見したと伝えている。梵鐘や鐘楼は、再建当時のもの。慶安４年（1651）に造立された梵鐘には、大愚和尚の名が刻まれている。また、寛文７年（1667）造立の大愚宗築像が残る。同寺は万治２年（1659）に火災に遭うが、福井藩主松平光通の援助によって旧時に復した。釈迦堂はこの時の再建で、県下でも類例の少ない禅宗様仏殿として貴重。なお、厄神堂の阿弥陀如来像は、寛永14年（1637）の銘を持つ。

法幢寺は、自讃のある万治３年（1660）の大愚宗築画像をはじめ、すぐれた書画が数多く残ることでも有名。その中には、本願寺や禅宗寺院を中心に活躍した「土蔵」派の絵師の作品も２点ある。16世紀後半の「白衣観音図」、江戸初期の「釈迦三尊・地蔵・十王図」で、絵画史の上で注目されている。同寺には三代将軍家光が幼少期に描いたという鶏図があるが、近くに金鶏伝説を持つ大石が埋まっているのが興味深い。金の鶏が元旦の明け方に鳴くといい、村が疲弊した時に掘り出せと伝えられていた。かつて中安田には観音堂、地蔵堂、阿弥陀堂があり、数珠繰りが行われていた。近代に観音堂に合祀され、今はそれぞれの縁日に数珠繰りが行われている。

氏神の日向神社は、古くは大年神社だった。明治21年（1888）に安産の神様として有名な日岡神社（加古川市）の分霊を合祀し、日向神社と改名した。稲荷神社は、通称「安田稲荷」。もと西安田の「イヤガ谷」にあったが、墓地が近いため暦応３年（1340）に北方の山地「長石ヶ谷」に遷座。元和３年（1617）火災にあって現在地に移ったとされる。中安田の他、西安田・東安田・西脇市羽安町を氏子とし、秋祭りにはそれぞれの地区でお祷渡しが行われる。本宮では、中安田・東安田・羽安のお祷人が「祷上がり」神事を行う。なお、同社には、暦応３年（1340）の銘を持つ男神像が残っている。

観音堂　数珠繰り

東　安　田（ひがしやすだ）

妙心寺派に属する医王山善光寺の境内には、兵庫県の天然記念物に指定された巨木が立つ。薬師堂前にそびえるイブキの木で、高さ約17ｍ、根回りは５ｍ弱、樹齢数百年といわれている。言い伝えによると、明智光秀がこの寺を攻め、薬師堂に火を放った。ところが、火が仏像を避け、いつまでたっても焼け落ちない。怒った光秀が地面に杖を突き立てると、たちまち根を張り、芽を吹き、この大木に育ったとか。

善　光　寺

薬師三尊は行基作と伝えられ、平安時代末のものとされるが、薬師如来の背中には焼けこげた跡があるという。イブキの木の根方には地蔵菩薩と五輪塔の残欠が祀られており、伝説につながる戦乱の史実があったのかもしれないと想像させる。また、薬師堂には、「願掛け石」と呼ばれる穴の開いた石がいくつも供えられている。いつのものか不明だが、治病を願う庶民信仰の名残だ。庫裡だった本堂には、平安中期の本尊阿弥陀立像が祀られていた（現在は兵庫県立歴史博物館に寄託）。かつて寺は別の場所にあったといい、周辺に寺院址と思われる遺構が確認されている。旧善光寺跡地で発見された土器は平安中期に遡るといい、歴史の古さがしのばれる。

３月「柴燈大護摩供」が行われるのが、「武嶋の観音さん」。武嶋山は奇岩がそびえ立つ景勝地で、山腹に建つ観音堂わきの空き地で護摩供がある。観音堂は清巌寺という寺だったといい、貞享元年（1684）の銘を持つ十一面観音が本尊。観音堂まで登る道の脇には、四国八十八ヵ所の本尊と弘法大師の石仏２体を安置した石の祠が続く。番外や、西国三十三ヵ所の石仏もある。大正９年（1920）に開かれた霊場で、昭和23年（1948）に大峰山を模した行場が造られた。「磨崖仏」という表示の先には、奇岩に彫られた役行者像が見える。

字「西北山」に鎮座する安田神社は古くは八幡神社と称し、延宝の検地帳に載っている。境内に祀られた八幡神社はもと滝ヶ谷の南にあり、春の例祭には安田神社の幟が、１月の厄神祭には八幡神社の幟が立つ。また、中安田稲荷神社の氏子村でもあり、西安田・羽安とともに秋祭りに奉仕する。東安田のお祷人は６人で、秋祭りの時にお祷渡しが行われる。また、熊野神社は、鈴木家一族が「権現さん」として祭祀している。大山で豊臣秀吉との戦いに敗れた伯耆の国熊野の武士が、この地に住みついて祀ったという。字「ひらまつ山」には、「ひらまつさん」と呼ばれる小祠が祀られている。祭神は「まさかつさん」とされ、祠の下に刀が埋められているという伝承を持つ。なお、東安田の山中にある長持石の下には、金の鶏が埋まっていると伝えられている。

武嶋山　磨崖仏（役行者像）

加　美　区

加美区地図

① 加美プラザ（加美地域局）
② エコミール加美
③ 交流会館
④ 新松か井の水公園
⑤ 松か井の水
⑥ 岩座神の棚田
⑦ クラインガルデン岩座神
⑧ 農林業公園 ハーモニーパーク
⑨ 春蘭荘・桜公園
⑩ ラベンダーパーク多可
⑪ 道の駅 R427 かみ
杉原紙研究所

コラム

杉　原　紙（すぎはらがみ）

加美区清水に生まれた歌人山口茂吉は、「杉原紙の原産地と知られをりわれをはぐくみし播磨杉原谷」、「楮の木のかすかなる花見むとしてしまし下りたつ行春のにわ」と詠んでいる。楮の花が咲き、和紙の代名詞であった杉原紙の里である故郷を誇りに思う気持ちがにじむ。古くから播磨にはすぐれた造紙技術があったとされ、天平９年（737）の正倉院文書に「播磨経紙」が登場する。奈良時代の記録にはさまざまな「播磨紙」が記録に残っているが、昭和35・36年（1960・1961）に行われた正倉院に残る紙の調査でも、播磨国の紙は他国より進んだ技術で漉かれていたことが報告された。

川晒し作業

杉原紙の名称が初めて登場するのは、平安時代、永久４年（1116）のこと。関白藤原忠実の日記「殿暦」に、「楫（杉）原庄紙」を子どもたちに贈ったことが記されている。杉原庄は、加美区の北部・中部に広がっていた荘園。鎌倉時代、杉原紙は武家の公用紙として広く用いられた。やがて、杉原谷の紙漉き唄に「わたしゃ杉原山国育ち京じゃこれでもおかみの御用」とあるように、公家も公式に杉原紙を用いるようになる。康暦３年（1381）の「安田荘野間郷領家方年貢米等注進状」には、「美上品紙」など、何種類もの紙が記されている。高野山など大寺院でも、さかんに用いられた。

室町時代後半以降、杉原紙は他の地方でも漉かれるようになるが、「杉原」は「播州自杉原村始出」（15世紀後期「節用集」）と世間に広く認識されていた。「けさも峯降り千が峰は白い　ならぶ干し板の紙はなお白い　雪も白いが紙はなお白い」と紙漉き唄にも歌われた、白く上質な杉原紙は、和紙の代名詞的な存在となる。ただ、江戸時代に入ると、多可町域における紙漉きの中心は杉原谷から三原谷へと移っていくようだ。明治になると、洋紙の普及などによって和紙の生産は減少、ついに大正14年（1925）杉原谷での紙漉きは途絶えてしまう。

山口茂吉も、「杉原紙の原産地の名はのこれども紙を漉く家いまは村になし」と詠んだ。しかし、昭和15年（1940）寿岳文章・新村出両博士が杉原谷村を訪問。「杉原紙は杉原谷発祥」説が発表され、杉原紙復興への出発点となる。同41年「杉原紙発祥之地」石碑が杉原谷小学校に建立され、復興への熱意はますます高まった。同45年、藤田貞雄が労作『杉原紙』を上梓。宇高弥之助翁らによって杉原紙の紙漉きが再現され、同47年に町立杉原紙研究所が設立された。同58年に兵庫県重要無形文化財の指定、平成５年に兵庫県伝統的工芸品の認定を受ける。今も研究所で伝統的な杉原紙が漉かれており、高い評価を受けている。

紙漉き作業

楮の「一戸一株運動」などの取り組みを継承、発展させ、長い歴史を誇る杉原紙の里としての意義を深めていきたい。

山　寄　上（やまよりかみ）

杉原川の最上流に位置する山寄上は三国岳の東山麓にあり、山に近い川上の地であるため「山寄上」となったとされる。氏神は、字「奥田」に鎮座する青玉神社。文政10年（1827）の「安宅の関図」絵馬には、「山本文濠」という絵師の名が残っている。祭神は天目一筒命と五百筒磐石命。言い伝えによれば、天目一筒命は柚の木のトゲで目を突き、片方の目が青くなった。そのため青玉神社になったという。山寄上と鳥羽・清水の３地区は、この故事によって柚を植えなかった。創立年代は明らかでないが、三国岳の山頂に鎮座していた神社を現在地に分祠したと伝える。三国岳には、天目一命（天目一筒命）が鍛冶の腕を振るったとされる「鉄碪（てっちん）」という場所があるという。また、三国峠に近い「播磨踊場」に祠を作って天目一命を祀ったともいい、老人婦女子などは山寄上から遙拝した。その場所に建立したのが、氏神の青玉神社だとも伝えられる。

山寄上青玉神社　秋祭り

かつて、青玉神社のお祷は３人で務め、10月秋祭りのお祷渡しの時、「とりの盃」という盃事を行っていた。今は集落全体で順番に務める。「ことぼし」と呼ばれる御神体の灯籠や、「もっそ」と呼ばれる赤飯の神饌などを供えるが、以前の「もっそ」に使っていた木椀は鳥羽・青玉神社の古い鳥居の木で作ったものだった。青玉神社の秋祭りは、「曳山まつり」と呼ばれる。伝承によれば、昔男子の跡継ぎが生まれず、曳山を作り、「つくりもの」をして献上した。すると、跡継ぎが生まれるようになったとか。曳山に毎年飾られる「つくりもの」は、貴重な祭礼習俗。また、平安末期、あるいは鎌倉時代に、庄司の勧めによって青玉神社の祭礼に曳山を引くことになったともいう。かつては曳山が村中を廻り、曳山踊りが踊られていた。昭和49年（1974）曳山踊りを復活させ、同53年に県立播磨中央公園開園式で踊り、平成５年にも踊ったが、現在は踊られていない。かつては、北辰神社（北辰妙見宮）があり、「播磨妙見」として知られた。明治40年（1907）青玉神社に合祀。同社で９月に北辰神社祭を行う。青玉神社には山の神も境内社として祀られ、１月９日に山仕事に携わる人々が「カギ」と呼ばれる木の枝を奉納する。

観音堂

延宝の検地帳に載る寺堂は、臨済宗禅林寺、薬師堂、阿弥陀堂。禅林寺は、雲門寺第２世了徹和尚の開基とされる。雲門寺に統合され、廃寺となった。その跡地に観音堂があり、江戸時代の仏像が祀られている。薬師堂、阿弥陀堂は残っていない。しかし、地区には「庵垣内」「坊垣内」「寺が谷」などの地名があり、庵垣内からは平安時代の土器が発見された。なお、大玉谷の奥には、かつての木地師の住居地と思われる「木地屋敷」の地名が残っている。

鳥　羽（とりま）

鳥羽青玉神社

県の重要無形文化財である「杉原紙」の技術を継承する拠点、杉原紙研究所の所在地として知られる。研究所の近く、字「宮嶋」には古い宝篋印塔が残されていた。今は観音堂に移されている。経塚も発見されており、大正２年（1913）経筒と鏡三面が発掘された。現在、出土遺物は兵庫県立歴史博物館に寄託されている。経塚があったのは、青玉神社の別当だった蓮華山善慶寺の奥、「経の尾」。善慶寺は廃寺となり、その跡地に観音堂が立っている。伝千手観音像や地蔵尊像などが祀られ、５月に花祭りを行う。境内に５基の石碑が残るが、中央の石碑は寛永４年（1627）に寺を開いた椿齢保和尚の供養碑。山林の中に、住職墓も残っている。他に、大師堂があり、役行者像が祀られている。

氏神は字「奥小山」に鎮座する青玉神社で、祭神は天戸間見命と大歳御祖命。平安後期の青玉大明神像とともに、大歳大明神像、稲岡大明神像が祀られている。稲岡大明神は「井（亥）ノ岡大明神」が訛ったもので、天目一箇命を背負って下りた人物とされる。伝承によれば、天戸間見命は鍛冶の神である天目一箇命であり、初め三国岳の山頂に祀られていた。ある時、鳥羽の村人が参拝したところ、急に背中が重くなり、村人は不思議に思いながら下山した。村はずれで急に背中が軽くなったので、「背中に乗った神様が降りられた」としてその場所に社を建てたとか。

参道の傍らに、神様を降ろした場所を示す石がある。境内にそびえる７本の大杉は、県の指定天然記念物。途中から２本に分かれた夫婦杉には、夫婦円満・縁結びの信仰がある。また、「乳の木さん」と呼ばれる大イチョウもあり、母乳の出を良くするという。

７月15日に近い日曜日に行われる「湯立て祭り」は有名で、多くの人でにぎわう。拝殿前に、十二個の「本釜」と有志の人の「添え釜」が並ぶ。約10年前から設置されている中央の釜は、氏子全員のための釜。巫女が、熊笹で釜の中の湯を参拝者に振りかける。境内社は、熊野神社、愛宕神社、山の神社、稲荷神社。熊野神社の下には、お経が入った古い甕が埋まっているとか。山の神社に奉納された石灯籠は、文化年間（1804～1818）のもの。愛宕神社は神姫バス鳥羽車庫近くの西の山の大岩に祀られ、祭りの時に下から火を投げ上げて薪に点火したとか。大歳神社は明治29年（1896）に青玉神社に合祀されたが、青玉神社・大歳神社それぞれにお当人がいる。各２人ずつだったが、人口減少により、一代当を継承して行くため、平成18年から各当人を１人に改めた。10月の第二日曜日にお当渡しがある。

青玉神社　湯立て祭り

清　水（きよみず）

清水には、臨済宗妙心寺派寺院、避船山雲門寺がある。山号は、昔、杉原川の水量が多く、大水が出ると船を出して水難を避けたことに由来するとされる。町指定文化財の「出山釈迦・寒山拾得図」（室町時代）や曽我直庵筆「鷹・猿猴捉月図」（安土桃山時代）をはじめ、狩野元信筆と伝えられる「蘆葉達磨」図、雪舟の「半身達磨」図、一休和尚、沢庵和尚、白隠禅師の書など、多くの寺宝が残されている。

雲　門　寺

中興の仏徳大通禅師は美濃国に生まれ、夢窓国師によって得度、天寧寺（福知山市）で87年の生涯を閉じた。応永８年（1401）、禅師が奥山にあった古刹「雲門」に立ち寄り、「景徳庵」を結んだ。これが現在の雲門寺の始まりで、この時に禅師が岩穴に祀ったのが奥山地蔵とされる。明治末に合祀された薬師如来は霊験あらたかな「いぼ薬師」として知られ、参拝者も多い。８月24日に近い土・日曜日、奥山地蔵祭りが行われる。雲門寺北の通称「丹波ゆり」には、江戸中期に大井戸山山中から移されたという「行者場」があり、８月に祭りが行われている。

雲門寺は江戸時代に現在地に移ったとされるが、付近からは室町時代に梵鐘を鋳造した窯址が発見されている。本尊は十一面観音。本堂、観音堂、開山堂、大黒堂があり、江戸末期に作庭された池泉鑑賞式庭園が残っている。山寄上から西山までの禅寺の本院とされ、山寄上の禅林寺、鳥羽の善慶寺、轟の明寿寺、山口の慈眼寺、西山の荘厳寺は明治時代に雲門寺に統合された。隣接する天満宮は、昔「天神ヶ谷」に祀られていたが、洪水で山が崩れ、ご神体が今の西脇市まで流されたという。その場所は、「天神崩れ」として今も伝えられている。

氏神である西宮神社は天満宮に対して西に当たるので「西宮」、天満宮は「東宮」と呼ばれたとか。祭神は、積羽八重詞代主命。宮当番は４人で、１月の戎祭りで行われるお当渡し時にくじ引きで決まる。また、町内で最も古い応永17年（1410）の棟札が残されており、「椙原本庄西宮両所青玉大歳大明神」と記されている。他に、明徳４年（1393）の年紀を持つ狛犬も残されている。神宮寺の光明院があったが、今は残っていない。

なお、清水はアララギ派の歌人、山口茂吉の生誕地として有名。斎藤茂吉の門下生で、北部体育館前に「春の雪　峯降りしつつ寒からむわがふるさとの村を思へば」の歌柱が立つ。地区のあちこちに立つ茂吉の歌柱はよく知られているが、他に幕末の国学者大国隆正、「七卿落ち」の一人、東久世通禧の歌碑も残っている。

戎　祭　り

轟（とどろき）

轟は、真谷山の深谷にある滝の音が豪雨時に響きわたることが地名由来とされる。高台にある虚空蔵堂の本尊虚空蔵菩薩坐像は、昔あった真言宗寺院、西光寺の本尊と伝えられる。虚空蔵堂は字「堂垣内」にあり、正徳４年（1714）字「妙見平」にあった明寿庵（寺）が境内に移転してきたという。また、正徳４年に悪疫が流行った時、旅の僧の告げにより、奥山にあった草庵「雲門」と雲門寺の愚中大和尚が創建した「妙寿庵」の２ヶ寺を統一したという伝承も残っている。明寿庵は明治時代に雲門寺に統合され、廃寺となった。

河上神社　秋祭り

虚空蔵堂には享保 16 年（1731）の棟札が残り、境内にある大師堂前の石灯籠には享保 11 年（1726）の年紀が刻まれている。三界万霊塔、地蔵菩薩像は、18 世紀中頃の建立。宝篋印塔も残されている。５月８日に花祭りがあり、３月 13 日・８月 24 日に近い日曜日には数珠繰りを行う。紅白の団子を公民館で女性たちが用意、お重にピラミッド状に積み上げて仏前に供える。一番上の団子を食べると安産に効くといい、妊婦のいる家ではこの団子を持ち帰る習わしが続く。虚空蔵堂のお当番は一代当だったが、平成 18 年から隣保当となった。12 月に村全員が立ち会ってお当渡しが行われ、２月３日小野市の神明神社へ伊勢神宮のお札をいただきに行く代参の人をくじ引きで決める。なお、虚空蔵堂に残る明治 13 年（1880）の版木には、河上神社神官「河上左近」の名が刻まれている。

字「大井戸山」に鎮座する河上神社は、轟・山口・西山３地区の氏神。祭神は弥都波能売命で、明治時代に厳島神社・若宮神社などを合祀した。境内社は、大井戸（大猪）神社、川裾神社。川裾神社には４人のお祷があり、７月 26 日頃に川裾祭りを行っている。ご神体を小宮へ遷し、轟谷川と杉原川の合流点に設けた祭壇に安置し、神事を執り行う。道の反対側にせり出す巨岩は、鳥羽に鎮座する青玉神社の遙拝石と伝えられる。また、昔はこの場所に川裾大明神が祭られていたともいう。昭和 38 年（1963）頃まで行っていた灯籠流しが平成４年に復活、今も子供会によって続けられている。

河上神社のお祷は２人で、３月初午の日に近い土・日曜日にお祷渡しが行われる。旧の祷人は「過番」、新の祷人は「上番」と呼ばれており、興味深い。弓射の儀式があり、土曜日に的作り、日曜日に弓射神事が行われ、祷人らが２本ずつ３回的を射る習わしになっている。10 月の秋祭りでは、轟の 12 体を筆頭に、数多くの御幣が並ぶ神幸行列が行われる。先頭を行く赤い幟も、特色のひとつ。御幣箱の墨書銘には、文政 12 年（1829）の年紀が残る。

川　裾　祭　り

山　口（やまぐち）

山口の地名は、大井戸山の登り口に位置することに因む。弥生後期、３世紀頃の竪穴式住居址が５基以上あることがわかっている。弥生後期から古墳時代初頭にかけて集落があったと考えられ、平安後期から鎌倉時代にかけて南向きの大規模な倉庫群があったことも、発掘調査によって明らかになった。「山口村」の名は天正 19 年（1591）の文書に出ており、豊臣氏の蔵入地だったとされる。

慈　眼　寺

山口にあった臨済宗寺院が、福聚山慈眼寺。雲門寺の末寺で、天正 10 年（1582）天容元和尚が創立したと伝えられている。慶長５年（1600）の検地帳に火災により寺宝・什物全て焼失したことが記されているが、度々焼失と再興を繰り返したらしい。３点の棟札が残されており、寛政元年（1789）の棟札に「火災不興」、安政２年（1855）の棟札にも「火災不起」の文字が記され、防火の呪符としての意識が見られる。寛政元年の棟札には雲門寺 10 世の名があり、天保元年（1830）慈眼寺の阿弥陀堂を建立した時の棟札も雲門寺住職の名を記す。慈眼寺には、寺子屋も開設された。明治 20 年（1887）末寺廃止令によって雲門寺に統合され、廃寺となる。なお、慈眼寺本堂は大正３年（1914）に移築されて、近年まで公会堂として使用されていた。

阿弥陀堂は今も残っており、「慈眼寺」の名で親しまれている。本尊は阿弥陀如来立像。雲門寺第８世、第 10 世は慈眼寺の住職を兼務しているが、阿弥陀堂に残る位牌には慈眼寺専従の住職のものも残っている。境内には、宝篋印塔、六時名号を刻んだ石碑、地蔵菩薩像が立つ。英霊塔の前に置かれた手水石には享和３年（1803）の年紀が刻まれており、慈眼寺にあったものと考えられる。英霊塔の背後には、宝篋印塔１基と天和３年（1683）、文政８年（1825）の年紀を持つ石塔、坊主墓３基が並ぶ。５月８日の花祭り前日に、老人会の女性会員たちが花御堂を準備する。８日になると、村人は墓参りを済ませた後に阿弥陀堂へ参り、誕生仏に甘茶を注ぐ。本尊には、甘茶が供えられる。平成９年に 25 年ぶりに復活した「おせったい」は、阿弥陀堂前で行われた。なお、轟の虚空蔵堂、鳥羽の観音堂でも、５月８日に花祭りが行われている。

慈眼寺　花祭り

山口には広峯神社（天王神社）が祀られているが、轟の河上神社の氏子でもあり、いずれもお当２人で世話をする。広峯神社のお当は、稲荷神社の世話もする。広峯神社・河上神社のお当渡しは、４月に広峯神社で一緒に行う。また、今は社殿などは残っていないが、お当が継承されていることから、かつては愛宕神社があったと考えられる。愛宕神社のお当２人は、８月 24 日に公民館でお当渡しを行う。

西　山（にしやま）

西山は、明治22年（1889）市町村制度が実施された時、杉原谷役場が設置されたように、旧杉原谷の中心地だった。西山は轟・河上神社の氏子だが、地区の氏神は金比羅神社。手水石には、天保４年(1833)の年紀が刻まれている。数年前に合祀されたが、西の山中に奥の院があり、今も石灯籠と狛犬が残されている。金比羅神社の当人は３人。10月のお当渡しには半紙に包み水引を掛けた御供餅が配られ、盃事の時には全員で謡曲を謡う。その後、奉納子ども相撲が行われる。河上神社のお当渡しは12月で、当人は２人。今は河上神社でお当渡しを行うが、かつてはお当渡し後の祝宴が公会堂で３日間盛大に行われていたという。

観　音　堂

西山には、中世から近世にかけて、真言宗の小倉山正蔵寺、通称「北寺」と、禅宗の高照山荘厳寺の二つの寺があった。荘厳寺は西山墓地の南山麓にあり、延宝の検地帳によると薬師堂があった。正蔵寺には、同検地帳に記された観音堂が現存している。雲門寺文書や棟札から、正蔵寺は寛保３年（1743）に再建されたこと、荘厳寺は天文10年（1541）雲門寺の牧翁玄勤禅師が再建し、安政２年（1855）に焼失したが翌年に再建されたこと、明治20年に雲門寺に統合されたことがわかる。この時、荘厳寺の用材の一部が西山公会堂に使用されたという。公会堂は、昭和49年（1974）に焼失した。また、正蔵寺は檀家がなく、加持祈祷や托鉢で維持されていたといい、轟の虚空蔵堂には正蔵寺の名を刻んだ祈祷札の版木が残されている。明治初期、短期間だが正蔵寺学校となった。明治２年に入寂した住職の墓碑銘に「寺子中」とあり、幕末に寺子屋が開かれていたことがわかる。かつては薬師如来のお当が１月８日にあり、参列者一同の顔に赤土を塗る習わしがあったことから「赤土当」と呼ばれていたという。この二つの寺の住職墓は荘厳寺跡に統合して祀られ、位牌や仏像、什物は正蔵寺跡である観音堂に納められた。天文20年（1551）の年紀を持つ牧翁玄勤禅師の位牌も残っている。

観音堂の本尊千手観音菩薩は、４年に一度の開帳。他に、薬師如来、大師像、十二神将も祀られ、慶応元年（1865）の絵馬２面、宝暦年間(1751～1764)の俳額２面が掛かっている。４月のお接待、８月９日の夜に行われる千日講、８月17日の観音祭りの世話をするのは当番。千日講の後、当番の引き継ぎを行う。きな粉をまぶした団子「お玉」は、千日講の供物。雲門寺住職の読経がある観音祭りでも、「お玉」が作られる。なお、観音祭りでは、「荘厳寺」の名が入った牛玉宝印の札が参拝者に配られる。

金比羅神社　秋祭り

市　原（いちはら）

平成７年（1995）に完成した「こはる公園」は、大正３年（1914）実業之日本社主宰の「全国の孝子節婦」３人に選ばれ、翌年県知事から表彰された森安こはるを顕彰するもの。表彰を機に市原地区が進呈した畠「孝行畠」が屋敷跡に設けられ、家の仕事に励み、怪我をした養父の世話をした孝養の徳をたたえる石碑が立つ。市原は、市原坂を越え、生野へと通じる越知谷（神河町）に抜ける道と、杉原谷を縦貫する杉原街道の交差点に当たる交通の要衝。播磨・丹波・但馬の商人の市が立った「市場」でもあり、鉱山もあって中世末期には「市原千軒」と呼ばれていた。

専浄寺　阿弥陀如来坐像

浄土宗寺院の白雲山専浄寺は、生野方面から市原鉱山へ入山した鉱夫のため鉱山主が建立したという。本尊の阿弥陀如来像は平安後期の作で、国の重要文化財である達心寺（丹波市）のものと似ている点が注目されている。天保３年（1832）の年紀を持つ地蔵菩薩像の銘文にある「長寿禅庵智貞尼」の名は、観音堂に祀られている千手観音像の銘にも見える。千手観音像は、念仏講の助力で造立された。銘文を記したのは門村の「浄居寺玉林」で、長寿庵は浄居寺末寺。長寿庵跡の六地蔵前では、８月に地蔵祭りが行われている。明和９年(1772)の明細帳には、他に高野山宝城院末寺の真言宗寺院宝徳寺と阿弥陀堂が載っている。

この明細帳に記載されているのが、「二軒宮大歳大明神」。専浄寺の下に位置し、大歳神社が２社祀られていたことから「二軒宮」と呼ばれたという。後に、１社は丹治へ移り、もう１社は市原の氏神熊野神社に合祀された。熊野神社の秋祭りには、「熊野神社」とともに「大年神社」の幟が並ぶ。熊野神社の当人４人も、熊野神社２人、大歳神社２人。熊野神社には、伊邪那岐命・伊邪那美命・大歳明神と伝わる江戸期の男神像や鎌倉時代とされる神像が残る。享保12年（1727）造立の地蔵菩薩立像などの仏像は、境内にあったという「遍昭坊」という宮寺にかかわるものと考えられる。境内社の稲荷神社は、文政９年(1826)に京都伏見稲荷から勧請された。なお、熊野神社のお当渡しは、10月の秋祭りに行われる。くじ引きで決まった新当人に「神さん」と呼ばれる当事箱が引き継がれ、数え年１歳から青年まで12番の子ども奉納相撲が奉納される。他に、下山、北山には愛宕神社が鎮座。８月に「愛宕さん」がある。また、隣保ごとの伊勢講も続いている。

熊野神社　秋祭り

市原・寺ノ下遺跡は、加美区でもっとも古い遺跡。発掘調査によって、約８千年前の縄文早期の土器片が出土したほか、縄文晩期の竪穴住居址も発見されている。

丹　治（たんじ）

大　歳　神　社

丹治は、鉱山と関わりの深い村と伝えられる。笹ヶ峰の山頂に文殊菩薩とともに法道仙人が勧請した丹治大明神は、和泉国の鉱山師丹治氏が祀っていたという。この鉱山師が加美区の久留寿銅山や黒見鉱山を開いたとされている。ある時、丹治大明神は三原村（丹波市氷上町）へ飛行して内尾神社に祀られ、文殊菩薩は丹治村へ飛行してこの地に祀られたとか。また、天狗が飛び交ったと言い伝えられ、東の山中の巨岩にある凹凸は「天狗の足跡」と称されている。山伏も横行したと伝えられ、延宝の検地帳には「山伏実相院」が載っている。妙見山の中腹に祀られていた妙見社は、養蚕の神として信仰を集めていたが、明治初期に衰退した。字「小屋場山」にあった紫雲山日光寺は、享保８年（1723）に真言宗から臨済宗に改宗、明治になって門村の浄居寺に統合された。

文殊堂の文殊菩薩は、伝承によれば、天平宝字５年（761）「千日の行」に訪れた法道仙人が笹ヶ峰の頂上に祀り、約 400 年後に丹治村の竹藪に遷座。さらに約 400 年祀られたといい、「古文殊」と呼ばれる場所に古い五輪塔が残っている。元禄年間（1688 ～ 1704）に現在地に祀られ、約 200 年前に火災にあったが、文殊菩薩は焼けなかったとか。天橋立の文殊と姉妹関係とも言い伝えられている。堂内には、平安後期の阿弥陀如来立像をはじめとする諸仏も祀られている。「丹治のお大師さん」として親しまれているのは、背後の文珠山に祀られた四国八十八ヵ所の石仏。昭和 20 年（1945）頃から中絶していた文殊の縁日、１月 25 日に近い日曜日に行われる文殊祭りは、平成２年に復活した。知恵の輪潜り行事や、古い版木で刷った受験お守りなど、さまざまな工夫によってにぎやかに行われている。昔は青年団が世話したが、今は４隣保が回り持ちで世話する。なお、丹治には、日切り地蔵、子安観音なども祀られており、８月 24 日には地蔵盆が行われている。

氏神は大歳神社。境内に淡島神社が祀られている。宝暦 12 年（1762）の棟札は、古い社殿が老朽化し、「地神之森」に丹治大明神社を再建したことを記す。鎌倉時代の男神坐像や狛犬が祀られている他、平安後期の聖観音立像・菩薩形坐像が残っており、神仏習合の名残を感じさせる。お当人は２人。かつては長男が 15 歳になると氏子に登録、年齢順に務めた。10 月の秋祭りの時にお当渡しが行われるが、宵宮の日からお当渡し終了まで当人宅には「大歳神社」の幟が立つ。お当箱に納められている帳面は、天和年間（1681 ～ 1684）から当人の名を書き継いでいる貴重な史料。

文　殊　祭　り

大　袋（おおぶくろ）

大神宮社　祭礼

バイカモの自生地として知られる大袋。三谷からの眺めが袋を背負っているようであることから「負い袋」と呼ばれ、後に「大袋」の字が当てられたとされる。杉原川を挟んで東西に集落が広がるが、古くは川東のみに集落があった。水利の関係で畑地が多く、水田の開発も遅れたが、明治 30 年（1897）県道が開通。県道沿いに商店が建ち並び、明治中期に境内が整備された大神宮社には、商売繁盛を願って西宮恵比須の分霊が勧請された。正面に、大小二つの社殿が並んでいる。また、大袋の「三日市」という小字は、昔、毎月３日に牛の市が立ったことに由来するという。商人の町として栄えた名残として、玉垣に多可町内だけでなく、姫路をはじめ町外の商店の名が多く刻まれている。

大袋は江戸時代には三谷の大歳神社の氏子だったといい、大神宮社境内に遙拝所がある。大神宮社を祀ったことから氏子を離脱したとされており、社殿横に大きな伊勢灯籠が立つ。文政 13 年（1830）建立。「だいじゅんさん」と呼ばれており、台座には大袋はじめ多くの村名が願主として刻まれている。７月に行われる夏祭りは、平成 23 年から地区の蛍祭りと合同となった。正面の社殿の一つが戎神社で、１月の「初恵比須」は福投げなどで賑わう。他に、かつて杉原川を見下ろす岩壁の上に祀られていた鎌足神社があった。祭神は摂関家の始祖、藤原鎌足。近年、町道に沿った「大袋四季の庭公園」南側に移された。棟札から、安政４年（1857）に再建されたとされる。大正４年（1915）、大正天皇御大典記念に際して社殿の再建がなされている。大袋地区のお当人は２人で、「セイ当」「アイ当」と呼ばれている。お当渡しは 10 月に鎌足神社で行われ、くじ引きによってお当人を選ぶ。

川東に立つ観音堂の入口に安置されているのは、「西向き地蔵」と呼ばれる大きな石地蔵。観音堂の本尊は千手観音菩薩で、脇に弘法大師と弥勒菩薩が祀られている。弥勒菩薩は、明治 39 年に廃された弥勒堂の本尊。鰐口には宝暦４年（1754）の年紀があり、「西村左近」という作者名が刻まれている。所蔵する大般若経の奥書には、寛延４年（1751）「修補願主」として「郷領庵恵明」の名が記されている。郷領庵は、豊部にあった尼寺。穴の空いた石が残されていて、目の悪い人が奉納したものという。盂蘭盆には、浄居寺の住職を招いて読経会を行っている。かつては数珠繰りも行われていた。観音堂から北にある愛宕山に松明を供える儀式があったが、今は行われていない。観音堂のお当は２人で、くじ引きで決まる。お当渡しは１月。浄居寺の住職の読経がある。

観　音　堂

三　谷（みだに）

三谷では古墳時代後期の古墳群、弥生後期から古墳時代初頭にかけての集落跡が発見されている。千ヶ峰の南東麓に位置し、雌雄の滝がある三谷渓谷などの奥深い谷があることから、「三谷の三谷に道迷い」という古謡があったという。氏神は字「小嶋」に鎮座する大歳神社。杉原川が蛇行していた時代、防災のための竹林に囲まれていたことから「竹の宮」と呼ばれていた。竹藪は残っていない。

大歳神社　祭礼

江戸時代の男神立像２体と、狛犬２体が残されており、幕末から明治頃の「川中島合戦図」絵馬が奉納されている。お当人は「本当（正）」「相当（副）」の２人で、一代当。村内の廻り順で勤めている。10 月の秋祭りの後にお当渡しを行い、終了後に 12 番の奉納子ども相撲が行われる。棟札によれば、天和元年（1681）、享保２年（1717）に社殿を修築した。境内社は、天満神社・日鷲神社・山神社・金比羅神社。日鷲神社は、紙の祖神とされる天日鷲命を祭神とする。延宝の検地帳に載る稲荷神社と八幡神社は、明治 41 年（1908）に大歳神社に合祀された。

同検地帳に、他に阿弥陀堂があったことが記されている。その跡地に岩座神の神光寺の隠居寺だったという臨済宗神明（命）寺が建立されたとされるが、年代はあきらかでない。残されている住職墓の中には、享保 10 年（1725）の年紀が刻まれたものもある。幕末から明治８年まで、寺子屋が設けられていた。他に地区の南西山麓に尼寺があったと伝えられているが、記録は残されていない。

字「篠山」に大日堂・大師堂・地蔵堂が向かい合うように建つ。大日堂に祀られている銅造金剛界大日如来坐像は、室町時代の作。本来は懸け仏で、大歳神社の本地だったのではないかという。鰐口は応永 21 年（1414）の作で、「摂津豊嶋北条細河東山姫宮為」の銘がある。昭和 30 年（1955）頃まで使用されていた。当番は輪番制で３軒が世話をし、１月の大日堂祭りには地区の人々がお菓子などのお供えを持って参る。大師堂には、貞享４年（1687）の弘法大師坐像とともに、同２年の年紀を持つ阿弥陀如来像が祀られている。地蔵堂は台風で倒壊したが再建され、平成４年に修復記念祭が行われた。なお、三谷観音は、文政 10 年（1827）正月、庄屋の宇高光信が観世音菩薩の「東の山の高いところに祀れ」という夢告を受けて造ったもの。西国三十三番観音像の石像が、山中に残る。造立の力になった浄居寺の玉林和尚が、文政 13 年（1830）開眼供養の導師を務めた。かつては、一番高い所にある十六番の石祠の前で盆踊りをしていた。

大　日　堂

箸　荷（はせがい）

紅茶の栽培で知られる箸荷は、慶長 15 年（1610）の検地帳に「杉原谷長谷貝村」と記されている。「播磨国風土記」託賀郡賀眉の里の条に見える大海山は、箸荷地区の東方、丹波へと通じる大見（近江）坂が遺称地とされる。大海は、明石郡大海の里（明石市西部）の人が移り住んだことによる地名とか。秀吉の時代、近江の兵が大見坂を越えて、杉原氏が拠る門村構居を攻めたとも伝えられる。昭和 50 年（1975）頃に衰退した村芝居を、平成５年に消防団が復活。同 14 年に「箸荷むら芝居保存会」を結成して「全国むら芝居サミット」を催し、翌年文部大臣表彰を受けた。

大歳神社　百々手祭り

字「宮ノ前」に鎮座する氏神の大歳神社は、建国記念日に行われる「百々手祭り」で知られる。以前は２月卯の日に行われていたとか。百々手祭りのお当７人を中心に、地域を挙げて参加する。お当渡しの後に手製の弓と青竹の矢で弓射神事を行うが、的は真ん中に「鬼」と書き、それを墨で塗りつぶすのが決まり。百々手祭りの矢を家に飾れば、福を授かるといわれている。この日は、米粉の団子が供えられる。大歳神社のお当は「お当屋」といい、大歳神社の世話をする「本当」１人、愛宕神社の世話をする「愛宕当」１人の２人。愛宕神社の祀られた山の麓に地蔵堂があり、８月の火祭りはこの２ヶ所で行われる。まず愛宕神社へ参った後、地蔵堂脇の広場で松明が燃やされるが、どちらでも、神式の拝礼と般若心経の読経を行う。なお、大歳神社本殿は元禄 13 年（1700）の再建で、鎌倉時代とされる男神像が残されている。かつては 10 月の秋祭りに曳山が出ていたが、戦時中に姿を消した。「かわっさはん」と親しまれている川裾神社は、以前は箸荷川と杉原川の合流点に鎮座していた。明治末期に神社を勧請したという、地方相撲の親方「中瀬川」の墓が、境内に立つ。７月の川裾祭りは、百々手祭りのお当７人が世話をする。

大歳神社境内には観音堂、もとは毘沙門堂だったお堂がある。さまざまな仏像が祀られているが、伝蔵王権現像は天部像だったのではともいわれ、鎌倉時代の作と考えられている。観音堂のお当は「権現当」２人で、昔は「毘沙門当」と呼ばれていたといい、11 月にお当渡しを行う。昔は牛を連れて詣っていたとか。江戸時代前期に作られた、数珠繰りのための大数珠が残されている。明治中期までは宮寺の仏護山菩提寺があり、寺子屋があった。また、文和３年（1354）の年紀が刻まれた、多可町最古の宝篋印塔が残されている。個人の家で祀っており、生団子を供える習わしだとか。

愛宕神社・地蔵堂　火祭り

門　村（かどむら）

門村にある天徳山浄居禅寺は、臨済宗妙心寺派の寺院。開山とされる禹門玄級和尚は、妙心寺歴代の中でも名僧として知られ、慶長11年（1606）に入寂した。大名の有馬氏や脇坂氏に崇敬を受けたとされる。寛永5年（1628）に達外和尚が再興、寛文12年（1672）正式に京都の妙心寺末寺となった。

浄　居　寺

本堂は寛文9年の再建で、聖観音像など江戸時代の諸仏が祀られており、達磨大師像は、江戸初期の名僧盤珪の銘を持つ。開山堂の伝薬師如来像は平安時代の作、十一面観音像は室町時代の作。文政4年（1821）の年紀を持つ弁天像も祀られている。裏庭には、見事な築山庭園が残されている。

「天徳山学区内用」と刻まれた明治8年（1875）の版木は、同9年まで浄居寺内に設置されていた「昌徳学校」で使用されたもの。境内にある地蔵堂では、8月に地区の子どもたちを集めて、地蔵祭りを行う。なお、浄居寺の下にある地蔵堂には、「北向き地蔵」と信仰される地蔵菩薩と薬師如来が祀られている。

門村では、近隣十数ヶ村を治めていた在地領主、杉原兵太夫安久が浄居寺を創建したと言い伝えられている。安久は、「門村構居」の主とされる人物。構居には全長300mに及ぶ三重の土塁が築かれ、今も土塁と堀が残っている。伝承によれば、安久が天文5年（1536）に観音堂を浄居庵に改め、菩提所としたのが浄居寺の始まりという。安久は、天正2年（1574）に「オオミの殿さん」、あるいは、中区の森本城主に攻められて滅びたとされる。

浄居寺の鎮守は氏神の厳島神社だが、落城によって衰退したという。再建されたのは、貞享3年（1686）。宝徳4年（1452）「中原景安」の銘がある棟札が残る。記録によると、厳島神社において、お面掛け神事を行った「春熊太夫」という猿楽の太夫がいたという。浄居寺には、春熊太夫が使ったと考えられる翁面が残されている。西山地区の正月行事、赤土当にも、門村の猿楽太夫が招かれていた。

厳島神社　神楽舞

なお、厳島神社の秋祭りに奉納されていた神楽（獅子舞）は神崎郡方面から伝えられたといい、「旧の神楽」「新の神楽」の二種があったとされる。平成18年に復活し、2体の獅子が村を廻って荒神祓いを行う。また、1月に厄神祭、2月に亥祭りが行われる。亥祭りでは、珍しいきな粉をまぶした切り餅、「御供さん」が供えられる。厳島神社のお当は2人で、お当渡しは10月の秋祭りに行う。

杉　原（すぎはら）

杉原は交通の分岐点に位置し、「杉原越え」の道は、中世から播磨と京都、丹波、但馬に通じる道として知られていた。地区内には、「右たんば　左みたにくﾌんおん」と刻まれた高さ1m近い道標が残っている。

八　幡　神　社

応神天皇を祀る氏神の八幡神社は、もとは村の中にあった。その後、昭和46年（1971）に国道脇、杉原兵太夫安久供養塔のある場所に移り、平成14年に国道拡幅のため、山麓の現在地に遷座した。真新しい鳥居や玉垣、狛犬などは、この時に造立されたもの。杉原にはお当係と宮係があり、お当3人がお当箱を4ヶ月ずつに預かる。祭りや神社の世話をするのは3人の宮係で、お当係はその輔佐を務める。1月第3日曜日に行われる厄神祭では、「破魔矢」「お札」が配られる。お当渡しは、10月の秋祭りに行う。

八幡神社は門村に住した杉原兵太夫安久の守本尊といわれ、もとは安久の居館北に祀られていたという。安久は天文から永禄年間（1558～1570）近在10ヶ村余りを領し、門村構居や笛草城を築いたと伝えられる。天正2年（1574）豊地城（小野市）の別所重棟の奇襲にあい、安久は従者17名とともに杉原地区の字「山根」で自刃。自刃したのは榎の大木の下だったといい、その後八幡神社は杉原地区に移されたとされる。また、伝承によれば、天正2年頃の杉原地区には5軒の農家しかなかった。安久の子や親族はこの5軒の農家にかくまわれたが、5軒は大江山の鬼退治で名高い渡辺氏の子孫だとか。

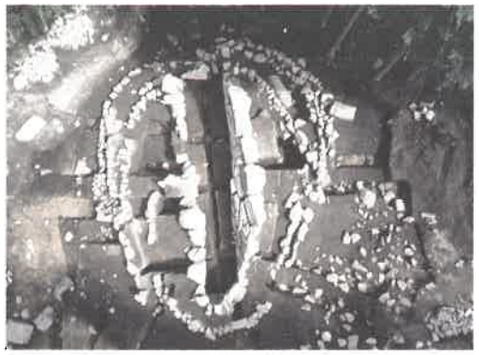
浄居寺を望む国道427号線沿いの地に、杉原兵太夫安久供養塔が立つ。平成15年に、除幕式が行われた。横に立つ古い石碑は安久の墓碑とされるもので、明治期に建立され、もとは、旧八幡神社境内にあった。同境内には、他に17基の五輪塔の残欠とやや大きな五輪塔が埋まっていたとされる。また、安産の神様と信仰される石もあった。大洪水の後、村人が川原で見つけた石を自宅の庭に置いたところ、夢の告げがあり、安産の神として祀られていた石で、洪水で流れ着いたこと、身重の女性が石を撫で自分の腹を撫でると安産になることを教えられたと言い伝えられている。

西教寺は、慶長7年（1602）の開基。安久の菩提を弔おうと杉原に定住した父娘が建立を提唱したとされ、浄土真宗へ帰依したのは5軒の農家が望んだためだったと伝えられている。何度も火災にあったといい、現在の堂宇は戦後に再建された。本尊は阿弥陀如来立像、文化6年（1809）西本願寺より下賜されたもの。安永2年（1773）の銘のある喚鐘があったが、戦時中に供出された。「乳の木」と呼ばれる見事な銀杏の木が、境内に立つ。

杉原兵太夫安久墓碑

奥　豊　部（おくとよべ）

奥豊部は豊部村の北東に位置し、慶長国絵図には「豊辺村」と記されている。地区の西の山麓に、古墳時代後期の群集墳があったことで有名。奥豊部古墳群は14～15基の古墳からなり、1号墳は平成9・10年に発掘調査が行われた。加美区ではじめての古墳の発掘調査で、全長9.4mの大きな横穴式石室と周囲を囲む「外護列石」が見つかっている。石室内はほぼ未盗掘で、貴重な土器や鉄器など、多くの副葬品が出土した。東山古墳群と築造時期が重なっている点も、注目されている。石室を持っていた奥豊部1号墳は今はないが、遺物は那珂ふれあい館に保存されている。


奥豊部1号墳

氏神は、字「水石」に鎮座する大歳神社。明治16年（1883）の勧請と伝えられており、昭和38年（1963）明治時代の建物と思われる旧社殿を改築した。宮当番（宮役）2人で、一年間神社の世話をする。注連飾りや門松立てなどの正月の用意も、宮当番の仕事。14日には正月飾りを片付けて、翌日にトンドを行う。今は、グラウンドで行われている。10月の秋祭りには、子ども神輿が出る。

宝林山浄照寺は浄土真宗本願寺派に属し、寛政8年（1796）教味が開基したとされる。古くは天台宗寺院だったと言い伝えられている。真宗の総道場として栄え、江戸中期に本尊が西本願寺より下賜された。昭和50年（1975）に宗祖親鸞上人700回忌、中興上人450回忌が、稚児行列などで祝われた。本尊の阿弥陀如来像は、寛政10年（1798）の銘を持つ。昭和30年頃まで、樹齢300年といわれた老松が境内に立っていた。1月1日の修正会に始まり、10月の報恩講に至るまで、多くの法会が修される。1月には御正忌報恩講があるが、宗祖月忌法要（月命日）は毎月行われている。3月の永代経法要と10月の報恩講法要では、本山の布教使による説法がある。

地区の触れ合いの行事でもあるのは、3月・10月の法要。内陣を餅で荘厳する習わしがあり、「飾り餅」と呼ばれている。公会堂で各家から集めた米1斗8升を餅に搗き、小餅にして、木の円柱や竹串を用いてきれいに積み上げていく。先祖供養のために行うといわれ、仏前と高僧七祖像の掛け軸前に供えられる。昔は赤、黄、緑の色を付けたといい、より華やかに荘厳されたという。花や果物、菓子も供えられる。花飾りには、色とりどりの花とともに、雄松と「ウサギチャ」と呼ばれる常緑樹を用いる習わし。飾り餅は、法要の翌日、各家に配られる習わし。8月の盂蘭盆会、春と秋の彼岸会の他、5月の宗祖降誕会があり、新生児があった年には初参式が執り行われる。なお、古い公会堂は浄照寺前に建っていた。

浄照寺　報恩講

観　音　寺（かんのんじ）

観音寺は真言宗寺院の日東山観音寺に由来する村名で、「慶長国絵図」に見えている。観音寺は天平宝字年間（757～765）法道仙人によって字「堂山」に開基されたと伝え、本尊は十一面観音菩薩。脇侍には、不動明王と毘沙門天が祀られている。天正年間（1573～1592）兵火のため焼失し、現在地に再建された。旧跡には礎石などが残り、渓谷の入口にある大岩の上に「清めの不動」と呼ばれた不動明王像が残る。

観　音　寺

元禄年間（1688～1704）に大破し、享保2年（1717）再建されるが、この頃は観音寺にあった樺坂銅山の最盛期に当たる。当時、同銅山は、後の住友財閥の基礎となる大坂の泉屋が管理していた。泉屋は、観音寺に両界曼荼羅や涅槃図を寄進している。鉱夫の多くが観音寺の檀家となり、その数は一時2000人を数えたとか。その後観音寺は無住となり、豊部の極楽寺が兼帯、極楽寺住職の尽力によって大正12年（1923）に復興した。

樺坂鉱山は宝暦2年（1752）に産出量が多い優良な鉱山を示す「白札山」となっており、生野鉱山の所有になったこともあったという。樺坂鉱山近くに祀られているのが、青倉神社。岩盤の上に立つ小さな社だが、わき出ている清水で目を洗うと眼病が治るとされ、「眼の神様」として今も信仰されている。そばに中から涼しい風が吹き出ている鉱山跡の穴があり、残っている石垣などが鉱山の歴史をしのばせる。なお、朝来市山内に鎮座する青倉神社は、やはり湧き水が眼病に効くといい、目の神様として有名。

氏神は、字「村下」に鎮座する大歳神社。社伝によると、江戸初期に生野から来住し、樺坂鉱山を経営していた鉱山関係者が鉱山鎮護のため、字「石舟」（豊部）に勧請したとされる。伝承では、勧請したのは明応年間（1492～1501）ともいう。鉱山が衰退した後も祭祀を続け、明治初年に鉱山が再開したとき、現在地に遷した。社殿は、明治40年（1907）五社神社に合祀された豊部八幡神社の建物を改築したもの。2人の当人は「神主」と「青年宿」と呼ばれ、大歳神社だけでなく青倉神社、不動明王の世話をする。お当渡しは、10月の大歳神社の秋祭りに行う。この時、「ずいきの酢味噌和え」を当人がいただく習わしがある。「青年宿」の呼び名は、神楽舞いをする青年団を世話したためと思われる。神楽は一時休止し、平成8年に神楽保存会として復活した。観音寺はもと五社神社の氏子だったといい、かつては宵宮の丑の刻に五社神社へ詣り御幣を頂いて帰ってきていたという。なお、八千代区の特産品「凍りこんにゃく」の振興に務めた、観音寺出身の藤田平右衛門を顕彰する石碑が、観音寺墓地の南側に立つ。もとは、門村の島田橋のほとりにあった。

大歳神社　神楽舞

豊　部（とよべ）

五社神社　秋祭り

寛文５年（1665）の杉原川大洪水までは田畑が豊かだったことから、「豊部」と名付けられたと伝えられる。ほ場整備を行う以前は、条里遺構が見られた。弥生時代から古墳時代の集落跡、平安時代の大型の掘立柱建物なども発見されている。江戸時代には寺谷鉱山、柏谷銅山が栄えた。また、もとは「柏の里」といったが、延徳２年（1490）兄谷桐越中守基国とこの地に来た弟後藤彦四郎左衛門が柏谷に居館を構え、「豊部」と改称したともいう。

伝承によれば、笛草城を築城した基国が、同地にあった土まんじゅう７つの内５つを持ってきて祀ったのが、字「森内」に鎮座する五社神社。かつて同社の祭礼は重陽の節句に行われ、神輿は谷桐氏の子孫の家に渡御して一夜を明かしたとされる。祭神は、素盞嗚尊と誉田別命、神皇産霊神、大山祇命。境内には、青倉神社の遙拝所がある。鎌倉時代とされる神像が複数残されており、その内の２体は永仁４年（1296）の墨書銘を持つ。明治40年（1907）頃合祀された八幡宮は、昔の氏神だったとか。お祷は正祷人４人、副祷人４人の８人で、10月秋祭りの宵宮にお祷渡しを行う。かつては、「種籾の用意ありや」に始まる七度の挨拶が行われていた。大太鼓屋台は昭和55年（1980）に復活したもので、境内に寄贈者の歌碑が立つ。荒神祓いの舞いも継承されている。現存しないが、宮寺の住仙寺があり、寺子屋が設けられたという。

故谷山極楽寺は、白雉年間（650～654）法道仙人開基を伝える。昔、山号は「深谷山」だったが、天文年中（1532～1555）に谷桐基国の菩提寺となり、改称したと伝えられる。古くは森内山の山中にあり、火災で現在地に移ったとされる。真言宗寺院で、本尊は大日如来。多可町で最も多い26点の版木が残り、宝暦９年（1759）の涅槃図、嘉永６年（1853）の両界曼荼羅など、多くの書画も残る。３月に盛大な祭りが行われる庚申堂は、明治42年現在地へ移されたもの。丹波から来た盛雅上人が延宝年間（1673～1681）再興したとされる。

豊部には７つの谷（地区）があり、５つの谷の地蔵堂や観音堂で８月に数珠繰りが行われるとか。入江谷では、閻魔大王をはじめとする十王像や、奪衣婆坐像、獄卒などを祀った十王堂で数珠繰りを行う。寛文12年（1672）の造立。なお、熊野部との村境には杉原街道をまたいで青玉神社の一の鳥居が立っていたといい、樺坂峠には空腹の人に取り憑く「ひだる」が出たと伝えられる。昭和22年（1947）に豊部の一部だった双葉鉱山社宅が分立して双葉地区となったが、平成17年に統合された。

五社神社　神楽舞

熊　野　部（くまのべ）

義人夏梅太郎右衛門碑

荒田郷の東端に位置することから、「隅の辺」といわれたという熊野部。氏神は、天文２年（1533）に勧請された稲荷神社。神社境内には、平成15年に再建の除幕式が行われた「義人夏梅太郎右衛門」の碑が立つ。太郎右衛門は熊野部村字「夏梅」に住む庄屋で、当時の生野代官に嘆願をするが聞き入れられず、自らの命と引き替えに直訴に及んだ。明和元年（1764）、太郎右衛門は、村の字「才ノ木」で火あぶりの刑に処せられたと伝えられる。村人たちは深く感謝し、明治44年（1911）７月に碑を建立した。稲荷神社の境内にも夏梅神社が祀られ、７月に夏梅太郎右衛門祭が行われる。

稲荷神社の祭神は、宇賀能霊神・大歳神・若歳神。境内には、熊野神社、金刀比羅神社、八坂神社などの小宮が祀られている。現在の社殿は、文化６年（1809）に修築されたもの。「忠臣蔵」絵馬に、絵師「羅泉堂一窓」の名が記されている。版木が２点残されていて、昭和12年（1937）頃まで牛玉宝印のお札を刷り、１月２日に行われていたお当渡しで配布していた。祭りはかつて卯月卯の日に行われ、「卯の日祭り」と呼ばれていた。現在は10月の秋祭り。４年に一度、「稲荷」「若宮」と呼ばれる２基の神輿が巡行する。特色ある民俗行事として注目されるのが、１月に行われる「すべ切り神事」。２月のお当渡しに供える餅を準備する行事で、「大当」２人、「歩射当」（毘沙講）２人や手伝い人らが石づき歌に合わせて１斗２升の餅をつく。藁すべでも切れるほど軟らかい餅であることから、「すべ切り餅」と呼ばれた。お当渡しでは弓射神事があり、歩射当が矢を渡し、大当が的を射る。的の裏に貼られた「鬼」と書いた紙に命中すると豊作だという。新しい大当の初めての行事は、２月の初午・千人参り。

真言宗阿弥陀寺には応永11年（1404）の銘がある鰐口が残されており、「松井庄熊野辺村長満寺鰐口并浴釜」の銘が刻まれている。県の指定文化財。また、昭和30年代に移転されたものだが、境内に康応元年（1389）の年紀が刻まれた宝篋印塔が立つ。松井小学校のそばに立つ大きな石碑は、明治時代に同校の教諭を務めた戸田春次郎師の記念碑。春次郎は多田村の人で、26年間松井小学校に奉職、42才の若さで世を去った。松井小学校周辺では、縄文時代から弥生時代にかけての集落跡が発掘されている。

なお、「奥播磨短歌会」を主宰した細田直俊（現当主は恭三）宅の庭園に、師であり斎藤茂吉の高弟だった鹿児島寿蔵の歌碑が立つ。寿蔵は紙塑人形の創始者でもあり、人間国宝だった人物。

稲荷神社　秋祭り

岩　座　神（いさりがみ）

神　光　寺

千ヶ峰はかつて「磐座神（いわすわりかみ）山」と呼ばれており、岩座神はそれが転訛した地名だという。平成 11 年「日本棚田百選」に選ばれた棚田で知られる。

真言宗の萬霊山神光寺は法道仙人開基を伝え、北播磨一帯の信仰を集めた。本尊十一面観音は、平安後期の作で町の指定文化財。天正の兵乱で衰退し、宝暦年間（1751～1764）に明道上人が住寺の末光院を神光寺として再興。その神光寺も昭和６年（1931）鐘楼のみを残して全焼し、兆殿司の絵画など多くの寺宝も失われたという。同 15 年、村内外の人々の寄進で本堂庫裏が再建された。千ヶ峰中腹には旧神光寺跡といわれる通称「寺屋敷」があり、礎石群が残っている。2001 年に現神光寺周辺の発掘調査が行われ、多くの僧坊跡と思われる区画が見つかった。

有名な「岩座神の七不思議」の１つ目は「血石」で、川沿いにある赤みを帯びた色の大石。加古川流域には死者が出ると神光寺に葬る習わしがあり、担いできた死体をこの石の上に置いた。重くて運べず、手足を切ったため、石が血で染まって赤くなったという。２つ目は、神光寺奥の山中にある高さ 10 m余りの巨岩、「塔の石」。アマンジャコが、夜中に天まで届く塔を５つ作ろうとしたが、４つまで積んだ時、夜が明けた。残った一つの塔がこの巨岩だとか。３つ目は、「弁財天の三本竹」。山中に竹が三本生えている場所があり、その竹は一本切っても必ずまた一本生え、数が変わることがないといわれる。４つ目は、県の天然記念物に指定されている、神光寺の「千本杉」。高さ 14 mの巨木で、樹根６、７mのところで多数に枝分かれした珍しい形をしている。５つ目は、「仁王門のしおれシキミ」。神光寺の仁王門脇にあるシキミは、午前中は勢いがあるが、午後になると勢いがなくなるとされる。仁王門の金剛力士像は鎌倉時代の作で、町の指定文化財。６つ目は、「唐滝」。干ばつの時、この滝でウナギを捕まえると必ず雨が降るという。また、大蛇が棲み、一人で足を踏み入れると生きて帰れないとも伝わる。７つ目は、「雨乞岩」。山中にある巨岩で、この岩の上で雨乞い踊りをすれば必ず雨が降るという。また、昔、近くの「踊場」という場所で、唐天竺より百人の神様が来臨し雨乞いを行ったとされる。

五霊神社　秋祭り

氏神の五霊神社は文化６年（1809）創立とされるが、江戸初期には鎮座していたと考えられる。お当人は３人で、７月の夏祭り（湯立て）、10 月の秋祭り、11 月の亥の子祭りなどの世話をする。お当渡しは、秋祭りに行う。

棚　釜（たなかま）

広　峰　神　社

多田村の北に位置する棚釜は、延宝の検地帳には「多田中間村」と記されている。また、「多田仲間」「多棚釜村」とも記された。多田の仲間村だったことが、地名の由来とされている。「多田」はタタラに因む名ともいい、棚釜には当地にあった勝浦鉱山のたたら師が居住したと伝えられる。勝浦鉱山は優良な銅山で、役人が常住し、明和３年（1766）には 8600 斤余りを産出したという。

棚釜は多田に鎮座する春日神社の氏子であり、そのお当も務めている。同社のお当人は１人で、10 月の秋祭りに多田とともにお当渡しを行う。地区内に鎮座するのは、大歳神社と広峰神社。大歳神社は、延宝の検地帳に「大歳之森」と記されている。大歳神社のお当人も１人。くじ引きによって、17 年に一度当たる。お当渡しは「二十日当」と呼ばれ、１月 20 日に公会堂で行う。７月には、祇園祭りが行われる。西の山中に鎮座している広峰神社は、棟札によると明治５年（1872）の建立。「廣嶺神社武大神」とあり、「安楽田村」「多田村」の大工の名が記されている。本殿・幣殿・拝殿と、その脇にこもり堂を備えている。囲炉裏を切ったこもり堂は、昭和 45 年（1970）頃まで使われていた。本殿には３社が祀られており、中央は「広峰神社」、向かって左は「山之内大明神」となっている。右の社の祭神は不明。周囲は植林によって森となっているが、植林以前は村全体を眼下に望む立地だったと考えられる。

お当人は１人で、４月第３日曜日に神社でお当渡しを行う。以前は４月 18 日で、お当渡しの前には姫路の廣峯神社へ参拝したとされる。お当渡しでは、神前で般若心経を唱える。お当事箱が４つあり、古い箱には源尚隆の「牛頭天王・三太神・八王子」の書が納められていた。祭神は牛頭天王。また、明治 25 年の「青面金剛像」の掛け軸と、江戸時代後期とされる役行者図を納めた箱の蓋には、「大百味供物　威徳院」と記されている。拝殿に奉納された絵馬の内、明治 16 年（1883）の「四季耕作図」絵馬は、当時の農耕の様子を具体的に描いている。農具や服装などを知ることができる、貴重な資料。田植えを行っている水田に牛玉宝印らしい札が刺してある様子が描かれており、注目される。かつては、12 月 12 日に「ニジュウソウ」の祭りをしていたという。

「四季耕作図」絵馬

延宝の検地帳にも載る阿弥陀堂（地蔵堂）では、４月にお接待がある。８月にもお接待があり、この時に当番の交替を行う。当番は２人で、回り番。なお、明治 14 年（1881）10 月に「門弟中」によって建立された力士墓、「朝風墓」がある。

多　田（ただ）

諦願寺　二十五菩薩来迎像

多田には久留寿鉱山、宮前鉱山、勝浦鉱山があり、戦前まで鉱山選鉱場が設けられていた。室町時代の鋳銅工房ではないかという建物跡も発掘されている。多田峠は、江戸時代、生野鉱山や代官所との往来に用いられた道。地蔵谷には、嘉永２年（1849）に建立された道標が残る。市原峠や高坂とともに、的場の金蔵寺や鍛冶屋の大歳金刀比羅神社へ参詣する道としても近年まで使われていた。

多宝山諦願寺は、元禄２年（1689）真言宗から浄土宗に改宗し、銅山寺として栄えたとされる。開創は大永３年（1523）と伝えられ、本尊阿弥陀如来の脇侍に二十五菩薩来迎像が安置されている。町の指定文化財。菩薩の背面に施主名が刻まれている。江戸時代の涅槃図や、明治時代の大般若経 260 巻も残されている。文政５年（1822）本堂を焼失し、庫裏を改修して本堂とした。11 月にお十夜、８月には数珠繰りを行う。数珠繰りが始まる前、地区の人々は、諦願寺の住職とともに、上野どんぶり地蔵、久留寿地蔵、公民館前の地蔵、多田峠の地蔵、諦願寺境内の地蔵に参る。どんぶり地蔵という名は、地蔵の前でどんぶりかえる（でんぐりがえる）と丈夫になるという信仰によるもの。

光明山林松寺の本尊薬師如来坐像は、金蔵寺、円満寺とともに多可郡三薬師の一つとされる。鎌倉中期の作で、町の指定文化財。天文８年（1539）創建とされる古刹だが、衰退して、諦願寺兼帯となった。浄土宗寺院。毎月８日の縁日にお参りがあり、版木で刷った薬師如来の健康守が５月の健康の集いで配布される。幕末には寺子屋が設けられ、棚釜、岩座神、熊野部からも子弟が通い、明治初年には天神堂（焼失）を建てて教育したほどだった。雨乞いには、林松寺の南の山で千駄たきをしたといい、「火とぼしさん」という大きな穴があったと伝えられる。

氏神は天児屋根命・厳島姫命を祀る春日神社で、字「宮前」に鎮座する。大正 14 年（1925）社殿を修築した。境内に、同年建立の狛犬像一対が立つ。もう一対は、文政４年（1821）造立。棚釜地区も氏子で、多田は５人、棚釜は１人の祷人が世話をする。選ばれた一番目の人が「神主」を務め、「かみさん」と呼ばれるお当事箱を祀るという。天保 10 年（1839）「神馬図」絵馬など多くの絵馬が奉納されており、江戸時代の女神像や十一面観音立像、元禄２年（1689）の棟札などが残る。３月の春祭りには秋葉さんの祭りも一緒に行われるが、諦願寺北の山中にある秋葉神社は一度春日神社に合祀したところ大火が起き、元の場所に祀り直したという伝承を持つ。

春　日　神　社

奥　荒　田（おくあらた）

若　宮　神　社

平安時代の荒田郷最奥部に位置する奥荒田。「高坂の水」とも呼ばれた、名水「松か井」の所在地として名高い。「播磨鑑」は、「播磨十水」のひとつとして「落葉の清水　松か井」と記す。「落葉の清水」は、荒田神社の境内にあったとする伝承もあるが、「松か井」は、松井庄の名前の由来と伝えられている。

高坂峠の頂上付近にあった「松か井」は、土砂に埋まって所在がわからなくなっていたが、林道工事で再発見され、昭和 63 年（1988）に 30 年ぶりによみがえった。通称「奥山」にあり、今も清水が湧いている。高坂峠は生野街道の難所だった場所。頂上には供養碑が祀られている。今賑わっているのは、高坂トンネルが開通した時に発見されたわき水を利用した「新松か井の水公園」。平成 13 年に完成し、「平成の名水百選」にも選ばれた。奥荒田は「楮と名水の里」を標榜しており、平成４年「楮栽培互助会」を結成、杉原紙の原料である楮を育てることに力を入れてきた。

奥荒田は的場に鎮座する荒田神社の氏子だが、地区の氏神は古くは「大将軍神社」とも呼ばれた若宮神社。中区門前にあった段の城城主、有田源八朗朝勝を「有田大神」として祀る。同氏は、野間城の在田（有田）氏の分流という。天正３年（1575）三木城主別所長治の叔父、別所重棟によって、朝勝が拠る段の城は落城。従者とともに熊野部の南から的場の荒田神社へ至り、奥荒田まで逃げて自刃したと言い伝えられている。若宮神社に祀られている古い石塔群は、奥荒田まで落ちのびたと伝えられる朝勝主従のものとされる。また、山中の小径沿いに、古い宝篋印塔１基が祀られている。村人が悲運の武将を「若宮大明神」として祀ったという若宮神社の、もう一柱の祭神は素盞嗚尊。境内には、大歳大神、大山祇大神、菅原の大神、田中の大神、佐田彦の大神、宇迦之御魂の大神、大宮能売大神を祀る小宮がある。石灯籠に刻まれた年紀は、安政４年（1857）。

10 月の八朔祭りでは、小宮の他に五輪塔にも小餅が供えられる。宮総代や区長、役員、厄年（42 歳）と還暦（60 歳）の男性が列席して神事を行う。その後、子ども相撲が奉納される。また、二の宮荒田神社の秋祭りにも参加する。

地区には、田中地蔵、花咲地蔵、桜地蔵、穴原地蔵が祀られている。田中地蔵では４月・８月にお接待、花咲地蔵・桜地蔵では地蔵盆がある。穴原地蔵は、子宝を叶える地蔵として祀られている。杉原川に沿って生野街道が通り、古くから主要交通路だったと考えられ、坂上田村麻呂が荒田神社に参拝した時に宿泊したと伝える旧家があった。

若宮神社　石塔群

的　場（まとば）

金蔵山金蔵寺は、高野山真言宗の寺院で、標高約400ｍの山中にある。縁起によれば、その昔、笠形山に黄金仏薬師如来が湧出、熊野権現の導きで金蔵山へ移り、役小角がこれを感得し、開山した。その後、行基菩薩が自ら薬師如来像を彫り、その中に黄金仏を納めて本尊とし、仏殿を建立して安置したと伝えられる。また、その後、慈覚大師が来山したと伝えられ、奥の院には、役行者、行基菩薩、慈覚大師が祀られている。現在の本尊は、室町時代の作。本堂に安置される阿弥陀如来坐像は、頭部が奈良時代の脱活乾漆造(だつかつかんしつづくり)で、県の指定文化財に指定されている。また、建長５年(1253)の年号を持つ「紺紙金泥法華経」は県、室町時代の「真言八祖図」は町の指定文化財。現在の本堂は、安政２年（1855）の建立で、境内には奥ノ院、権現堂、庫裏などが立ち並び、「千年杉」がそびえ、紅葉も美しく、昭和３年（1928）には多可八景に選ばれている。

金蔵寺　本堂

丁石地蔵や石像仏が立ち並ぶ、金蔵寺表参道の登り口には蓮華寺がある。法道仙人の開基で、この地に宝珠を埋めたので山号を「宝頂山」としたと伝えられており、明治期には寺子屋があった。

「播磨国風土記」に、託賀郡賀眉里の「荒田」の地名由来が載る。道主日女命が子供の父神を見つけるために「盟（うけひ）酒」を醸し、天目一命が父親とわかったが、後に米を作った田が荒れたので「荒田」になったという。この道主日女命を祀ったとされるのが、「播磨国二宮」といわれる荒田神社で、現在の祭神は少彦名命・木花開耶姫命・素盞嗚命。「峰相記」は、赤い衣をまとった女神が降臨し、坂上田村麻呂が社殿を建てて祀ったとする。地元では、天平勝宝元年(749)「神立」と呼ばれる場所に少彦名命が降臨、大雨が降って田畑が荒れたのでこの神に助けを求め、小祠を建立したと伝えられている。また、田村麻呂が崇敬して社殿を修築、神馬60頭を奉納したともいう。秋祭りに「馬駆け」があり、氏子の奥荒田・的場・寺内・西脇がそれぞれ一頭ずつ流鏑馬を行っていたが、戦時中に取りやめとなった。今はお旅行列と屋台の練入りが見所となっている。

荒田神社の北にある「御田上」には、天目一神社の小社が立つ。「めひとつさん」と親しまれ、４月に祭りを行う。昔は荒田神社の辰巳にあった勅使塚の傍らにあり、水害によって荒廃したため、現在地に移したとされる。平成９年の荒田神社裏遺跡の発掘調査では、３世紀の竪穴住居の他に、中世の銅の精錬所の跡が発見されている。地区には、他に戎神社、稲荷神社、金比羅神社、お大師さんが祀られている。大師堂では、８月に数珠繰りを行う。

荒田神社　秋祭り

寺　内（てらうち）

寺内という地名は、かつて荒田神社の別当寺、「神宮寺」の寺域内だったことから名付けられたと伝えられる。神宮寺は「庵寺」ともいい、近代は「庵主さんの寺」と親しまれる尼寺だった。昔は、円山山下に広大な堂宇があったとか。真言宗寺院で、本尊は釈迦如来坐像。他に弘法大師像、阿弥陀如来像などが祀られている。庭に、一字一石塔、宝篋印塔が立つ。「地蔵菩薩守護札」「主夜神火災盗難除札」などの版木も残されている。

神　宮　寺

寺内は、的場の荒田神社の氏子。地区内には、もと烏帽子山麓にあったとされる大歳神社の他、金比羅神社、稲荷神社、山の神、川裾神社が祀られている。金比羅神社は、かつて寺内に男子が生まれない時代があり、他所から来た僧侶に占ってもらうと金比羅神社を祀れば男子が生まれると言われ、祀ったと伝えられる。祭りは、４月10日前後の日曜日。神事の後、子ども奉納相撲と餅投げがある。今も、「男の子を授かる神様」「子供の成長を見守る神様」として信仰されているとか。山の神の祭りは、１月に山の神参りと、９月に山の神祭り。

円山頂上には、稲荷神社と妙見堂が祀られている。山裾から稲荷神社までの約50本の鳥居は、昭和50年（1975）に新調されたもの。２月に初午がある。妙見堂には、江戸時代の妙見菩薩像が祀られている。川裾神社は、もとは松井庄大橋のほとり、杉原川と多田川が合流する場所に祀られていた。昔どこからかこの地に流れてきたといい、祀ると水害が止まったという。川裾祭りにお参りすると夏負けしない、また、水害などを防いでくれるとされ、７月の川裾祭りには多くの人がお参りする。町道川東線の建設で、平成９年に農協前へ移転した。今も、「かわっさん」と親しまれている。

寺内地区には、本村と枝村の２ヶ所に地蔵が祀られている。伝承によれば、農協前に安置されている「枝の地蔵」は、享保９年（1724）の建立という。お堂は文化元年（1804）、嘉永３年（1850）、昭和10年（1935）、同61年に改築された。本村の地蔵堂にはお当があり、１組５、６人で村を廻っている。「おとぼりさん」と呼ばれるお当事箱を代表が預かるが、箱には天保９年（1838）の墨書があり、元禄11年（1698）、宝永３年（1706）、延享３年（1746）の古文書が納められている。お当渡しは、３月の地区初総会の直前に行う。お当人は、行事の前には、地蔵堂・庵寺（神宮寺）・神宮寺の墓の掃除を行うほか、大晦日には、地蔵堂と神宮寺に小餅を供える。

地蔵堂　お当渡し

西　脇（にしわき）

西脇は、昭和46年（1971）、山野部とともに加美区でもっとも早くほ場整備が完成した地区。戦後まもない頃、青年団による村芝居が行われていた。

西　光　寺

中世には荒田郷に含まれており、今も的場の荒田神社の氏子。同社の秋祭りには各地区の宮総代が奉仕するが、西脇は寺内地区とともに余興を担当している。杉原川の対岸には中区の門前が位置しており、門前から眺めると西の脇にあったので「西脇」と呼ばれたと伝えられる。また、杉原川の氾濫でよく荒らされたため、西にそびえる烏帽子山の麓に集落を作ったことから名付けられたともいう。

明和９年（1772）の村明細帳には、「大歳大明神」「西光寺」「阿弥陀堂」「弥勒堂」「権現堂」「鐘楼堂」「観音堂」「地蔵堂」が記されている。大歳神社は今も鎮座するが、創立年代などは明らかでない。祭神は大歳神。他に、素盞嗚尊、菅原大神、倉穂魂神を合祀している。お当は３人で、年齢順に務める一代当。お当渡しは、１月に行う。５月に公会堂で行われるお日待ち行事も、当人が世話をする。

石土山西光寺は真言宗寺院で、法道仙人の開基を伝える。本尊は十一面観音菩薩で、鎌倉時代の作。阿弥陀如来と伝えられている仏像は、平安後期の作という。多くの塔頭があったとされ、西光寺の裏山にいくつも見られる平坦地は、５院12坊あった伽藍跡だと言い伝えられている。大永３年（1523）に金剛院初代が入寂した記録が残っており、現在の西光寺は延宝の検地帳に載っている宝城院の系譜を引く。弥勒堂では、１月に「みろくさん」と呼ばれる行事がある。かつて、同堂は烏帽子山の山中にあり、後に現在地に祀られたとされる。耳の病に霊験あらたかなことで知られ、石に穴を開けたものを供える風習があった。弥勒堂に、平安後期とされる天部像が祀られている。庫裏にも、室町時代の薬師如来像が残る。仁王門の仁王像は、江戸時代の作。観音堂の前にあった鐘楼の梵鐘は、戦時中に供出された。なお、西光寺には寺子屋があった。境内の無縁仏を祀っている付近に、五輪塔と石造地蔵尊が立つ。地蔵尊は、もと「地蔵屋敷」と呼ばれる場所に安置されていたと伝えられる。８月24日に地蔵盆があり、数珠繰りが行われていたといい、盆踊りが催されたこともあった。

大　歳　神　社

なお、西脇は、本村と月ヶ花の２地区よりなる。寺内地区にもまたがる月ヶ花は、もと「築ヶ鼻」「築ヶ端」と称したという。在田氏を城主とする段ノ城の一番端に位置したことから名付けられたという地名由来と、もう一つ、杉原川の氾濫を防ぐため砂籠を入れていき、ここで堤防を築き終わったことに因むという地名由来が伝えられている。

山 野 部（やまのべ）

中区と接する山野部は、「播磨国風土記」にも登場する古代の部民、「山部」がその名の起源ともいわれる。氏神は烏帽子山山麓に鎮座する大歳神社で、大年神と天御中主命を祀る。天御中主命は、明治41年（1908）に合祀された天中神社の祭神。広い境内には、広峯神社、日吉神社、天照大神社、金比羅神社、稲荷神社、祇園神社、秋葉神社が祀られている。祇園神社の脇にある祠に安置されているのは、「妙見さん」と呼ばれる棟札。山中に妙見岩という巨岩があり、大晦日には周囲に御幣を挿す神事を行う。

大歳神社　秋祭り

大歳神社は天保年間（1830～1844）に火災にあったと伝えられ、天保８年に再建されたと考えられている。焼失を免れた随身門は、安永９年（1780）の建立。拝殿には、天保年間の「壇ノ浦図」絵馬などが奉納されている。10月の秋祭りは、曳山と花火が特色。青年団が曳山音頭を歌いながら曳山を引き、拝殿までの急な石段を引き上げるのが見せ場となっている。

神社の世話をするのは、頭主（お頭人）１人とそれを輔佐する連中４人。門に注連縄を張った頭主宅には、氏神の分霊を祀る「オハケ」が立つ。大晦日の「御幣切り」で作られた107本の御幣の内、75本は妙見岩の周囲に納められる。なお、小正月の時期に村人総出で作る大注連縄にも、「ハタ」と呼ばれる四角い御幣を約75本突き刺す。元旦の「初参り」では、村人たちが小石を半紙に包んで榊にくくりつけ、神前に供えて豊作を祈る。翌２日には蓬莱山常楽寺の薬師堂でお頭行事が行われ、「ごうづえ」「鬼の金棒」「ユッラの花」「紙の鬼面」が登場する。常楽寺は真言宗寺院。本尊は室町時代の薬師仏で、中区の量興寺から杉原川沿いに担いで搬入したとか。なお、江戸時代、住職だった慶祐上人は飢饉で窮乏する農民たちのために力を尽くしたと伝えられる。晩年は眼病を患い、「首から上の病は必ず治す。村が見える場所に葬ってほしい」と遺言して入定したといい、今もその墓が大切に祀られている。

大正10年（1921）頃まで、「鍛冶ノ堂」と呼ばれる地蔵堂があった。伝承によれば、秀吉に仕えた大和の藤原鍛冶兵衛元次が祀ったとされる。大坂城落城の後、元次はこの地に隠れ住み、刀鍛冶をして暮らしていたという。その供養に始まるといわれる数珠繰りは、常楽寺で８月に行われている。数十基の一族の墓があったといい、今も大きな岩を背に十数基の五輪塔が並ぶ。また、大歳神社前に、弘化３年（1846）に建てられた「溢禦塚」がある。洪水の被害を受けることが多く、その対策として北の西脇地区から排水溝を掘ったことを記念する石碑。道路新設によって現在地に移転した。

常　楽　寺

八 千 代 区

八千代区地図

① 八千代プラザ（八千代地域局）
『敬老の日』発祥の碑

② エアレーベン 八千代

③ エーデル ささゆり

④ フロイデン 八千代

⑤ 竹谷山公園

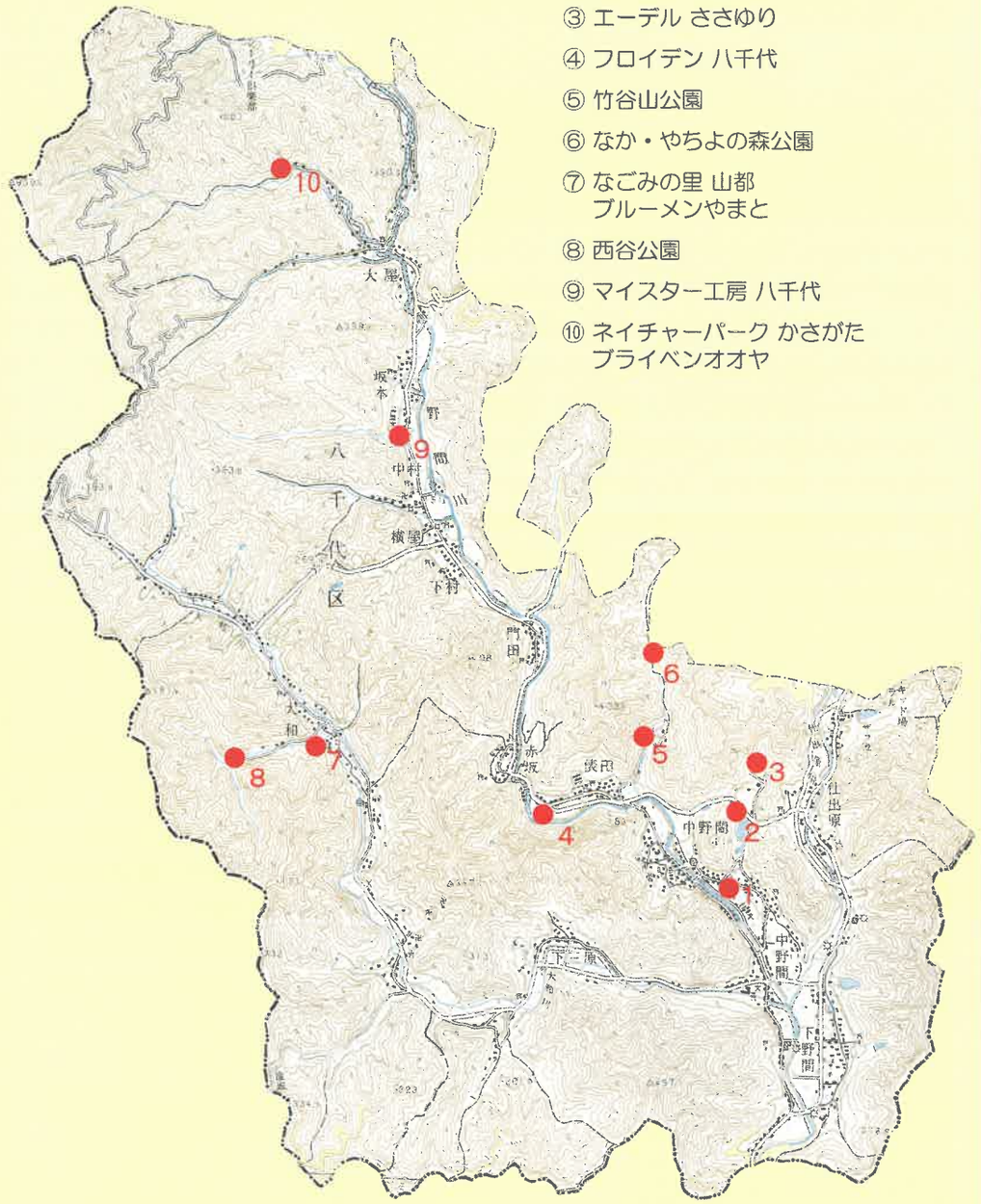
⑥ なか・やちよの森公園

⑦ なごみの里 山都
ブルーメンやまと

⑧ 西谷公園

⑨ マイスター工房 八千代

⑩ ネイチャーパーク かさがた
ブライベンオオヤ



コラム　敬　老　の　日（けいろうのひ）

門　脇　政　夫　氏

八千代プラザ（八千代地域局）前に、「多可町住民憲章」碑と並んで、「『敬老の日』提唱の地」モニュメントが立つ。平成１６年にこのモニュメントが建立されたのは、翌年多可町の名誉町民となった門脇政夫の存在による。

明治 44 年（1911）加西郡多加野村（現加西市）に生まれた政夫は、姫路中学校卒業後、織物染色業に従事した。政夫は当時の野間谷村、現在の八千代区中野間に住み、30 歳で野間谷村議会議委員を務めた。昭和 22 年（1947）、野間谷村村長となった政夫は、村主催の第１回敬老会を開く。子どもたちを戦地に送った親たちの心労を眼にし、また、福祉政策を柱としていたことから、有名な美濃の国の「養老の滝」伝説にヒントを得て、敬老会を企画したという。政夫は、家族制度の大きな変革が老人軽視の風潮を生んだことを憂い、「一家の宝」「殊勲者」として大切にしたいという気持ちを、第１回敬老会の挨拶で述べている。

翌 23 年には農閑期で気候的にも過ごしやすくなる９月 15 日を敬老会の期日とし、公会堂でお年寄りたちをもてなした。敬老会は、長年社会に貢献してきたお年寄りに敬意を払うだけでなく、その経験や知識を伝えてもらう場としての意味もあった。この年、「子どもの日」「成人の日」など国民の祝日に関する法律が施行される。しかし、「敬老の日」は制定されなかった。政夫は兵庫県の各市町村に呼びかけ、敬老会活動の輪を広げていく。その結果、同 26 年には兵庫県が「としよりの日」を制定。同 38 年には老人福祉法が制定され、９月 15 日が「老人の日」として祝日となり、同 41 年「敬老の日」と改称された。法律の改正によって９月第３月曜日となったが、門脇政夫が提唱した「敬老の日」は国民の間に定着し、社会の先達たちへの感謝を改めて認識する日となっている。その発祥の地である多可町では、毎年、多可町として喜寿敬老会、おじいちゃんおばあちゃん児童画展などを開催、各地区でも敬老の催しが行われている。

『敬老の日』提唱の地　モニュメント

現在、八千代プラザ内には、「敬老の日ギャラリー」が設けられ、政夫に贈られた国や県からの感謝状や叙勲の賞状、トロフィー、年表や遺品などの資料が展示されている。また、設置されたテレビで「故門脇政夫氏を偲ぶ」などの映像も流され、その姿を身近に感じることができる。没年は、平成 22 年。

その３年後、平成 25 年には、敬老のうた「きっとありがとう」が製作された。これは、町内の小学生、中学生、高校生に呼びかけて、歌詞を公募したもの。曲は、全国から募集した。お年寄りを敬う精神と思いやりの心を受け継いでいく楽曲として、広がっていくことが望まれる。

門脇政夫が広めようと努力し続けた敬老精神は、高齢者社会を迎え、いっそう大切なものとなっている。多可町の精神的財産として、未来に向けて受け継ぎ、全国に発信していきたい。

大　屋（おおや）

鹿子神社　武者行列

大屋の氏神は、荒田神社（加美区）と同じ少彦名を祭神とする鹿子神社。少彦名が笠形山山頂から降臨したと伝え、笠形山中にある龍ヶ渕の岩のくぼみは少彦名が乗った馬の蹄跡とされる。かつて、龍ヶ渕では、少彦名が蛇（龍の化身）を助けたことを由緒とする雨乞いが行われていた。また、延暦年中（782～806）、征夷大将軍坂上田村麻呂がこの地に立ち寄り、村人６人の案内で荒田神社に参拝したと伝えられ、同社の秋祭りには大屋から鎧武者一人と足軽姿６人の武者行列を仕立てる習わしがあった。「大屋の武者行列が来ないと祭りが始まらない」とされたが、現在は鹿子神社の秋祭りにのみ武者行列が出る。

武者に扮するのは、鹿子神社の前年度の宮当番（お当）の人たち。宮当番は 12 人で、１月から 12 月まで一人ずつ「神主」役を務める。境内社として、金毘羅神社・愛宕神社・秋葉神社などがある。１月の秋葉神社祭り、８月の愛宕神社祭りなど、小宮の祭りはその月の宮当番が世話をするが、10 月の秋祭りなど大きな行事は全員で務める。鹿子神社には大日堂、薬師堂が隣接しているが、３月・９月彼岸会、５月灌仏会など薬師堂で行う行事も宮当番の世話。１月と２月に行われるトンドや６月の野休みなどの世話も行う。お当渡しは、１月第１日曜日。尉と姥の人形を飾り、大根ナマスを盛った「島台」を回す習わしが珍しい。その後、鍵渡し神事が行われる。お当状箱は区長が預かり、区長交代の時お当状箱渡しを行う。

鹿子神社の本殿は、江戸時代末期の建築。拝殿には、「忠臣蔵芝居図」など 31 点の絵馬が奉納されている。薬師堂には薬師如来坐像、日光・月光菩薩立像、十二神将が、大日堂には大日如来坐像と地蔵菩薩立像２体が祀られている。笠形山へ続く林道沿いに祀られているのは、子授け地蔵として信仰の厚い六本地蔵。また、笠形山中には「稚児の岩屋」と呼ばれる岩屋があり、「峰相記」に記されている高句麗から渡来した恵便を幽閉した「野間楼」と伝えられている。

笠形山登山口のネイチャーパークかさがた西側には、腫れ物に霊験あらたかと信仰を集めた「浄善さんの墓」がある。浄善自身が生前腫れ物に苦しみ、同じ病気で苦しむ人を救うことを願ったとか。伝承によれば、浄善には修験道を修め、各地で人助けをした浄慶という兄がいた。少し離れた山腹にある墓が、浄慶の墓とされる。兄弟は享保年間（1716～1736）に大屋へ来たといい、定住した「雉子垣内」は一族が木地椀の製作をしたことに因む地名とされる。なお、播州織の出発点といわれる「大屋博多」は、文政９年（1826）に大屋村の市位重兵衛が開発した。

浄善さんの墓

坂　本（さかもと）

坂本の地名は、山野部坂の下にあたることに由来するとされる。地形が船の形をしているという「天船」地区で、坂本の坂は船の櫓の形をしているとされ、「櫂の坂」の名称もあった。

化　け　椿

大屋との境近くには、兵庫県郷土記念物に指定されている椿の大木が立つ。幹周りは約２m、高さ約 10 m。県下最大のヤブツバキとされ、樹齢約 500 年とか。地元では「化け椿」として親しまれている。樹下に「三界万霊」と刻まれた石碑が立ち、南北朝時代の戦死者の墓とされる古い五輪塔などが祀られている。夜中に椿の木が化けて出るとも、年に何度も花を咲かせる不思議さから「化け椿」と呼ばれているともいう。置かれている木札には、「見たか聞いたか化椿年に２，３度花咲かす」という、かつて歌われていた「化け椿の歌」の歌詞が墨書されている。旧道坂本橋北詰に、仏の種字と「右たんば・京」「左かなくら・いくの」の文字が刻まれた道標が立つ。

公民館の東に建つ薬師堂には、平安時代後期の作とされる菩薩形立像と天部立像２体が祀られている。菩薩形立像は本尊「薬師如来」とされており、他に江戸時代の十二神将も祀られている。大屋へ通じる道のほとりに立つ石造地蔵立像は、享保 12 年（1727）建立。「おきの国の首なし（あごなし）地蔵」と呼ばれている。台座には、「右ハ京道」「左ハ生野道」の文字が刻まれている。

坂本地区の氏神は、山麓に祀られた若宮神社。本殿の背後に迫る岩肌のくぼみに、「山の神様」と伝えられる自然石が祀られている。拝殿には、安政２年（1855）「酒呑童子図」絵馬をはじめ、明治７年（1874）、同 13 年の絵馬が掛かる。江戸中期の雨宝童子図は、紙本著色。「日参」という習慣が受け継がれており、「若宮神社」と書かれた白い幟が各家を順々に回る。幟が回ってきた家は、若宮神社、薬師堂、お大師さんに参拝して掃除をする。なお、中村の貴船神社に祀られている山ノ神社は、もと天船坂本村字「初田」に鎮座しており、明治 42 年（1909）に移転合祀された。

薬師堂　伝 薬師如来立像

若宮神社のお祷は２人で、名簿順に 20 年に一度廻ってくる。お祷渡しは、１月初めの冬祈祷の終了後。若宮神社の他、正（當）勝神社、薬師堂、お大師さん、地蔵の世話を行う。８月 24 日に公民館で行われる地蔵盆には、ピラミッド状に盛られた百八個のお団子を供える。地蔵堂に木造の地蔵坐像が祀られており、古い数珠繰りの札は享保６年（1721）の年紀を持つ。地蔵堂には「お大師さん」、板絵の弘法大師も祀られており、かつては大師講があった。今は、当番の村人で祀っている。

中　村（なかむら）

中村に鎮座する貴船神社は、中村ほか坂本・横屋・下村の４地区を氏子とする。かつては「天船四ヶ村」と呼ばれた。「天船」の名は、４ヶ村の地形が山頂から見ると船の形に似ていたことに由来するという。

貴船神社　龍王の舞（リョンリョン）

10 月の秋祭りには、王の舞の系譜を引く「リョンリョン（龍王の舞）」、田楽の系譜を引く「ゲイゲイ」が行われる。「リョーンリョン」のかけ声に合わせて跳ねる天狗は、木の鉾を持つ。拝殿前の地面に鉾で線を引く所作は、天船の地に降り立った神が開拓のために測量する様子を表わすという。その後、「かぐらの舞」と呼ばれる古い形の獅子舞が行われる。獅子が飛び跳ねる姿は、土地を耕す様子を表すとされる。ゲイゲイは、「踊り子」の男児４人と「神仕丁」の大人（男）が向かい合い、踊り子はササラ、神仕丁は布張りの太鼓を奏する。祭りの諸役を記した目録が毎年作成され、宵宮に公民館で行われる儀式では「目録渡し」が大切な意味を持つ。貴船神社のお当は、２ヶ村ずつが組んで隔年で務める。お当渡しは、秋祭り終了後。なお、同社には、太閤秀吉が参拝し、奉納した陣太鼓とされる太鼓や、鎌倉時代の神像・狛犬、室町時代の随身像なども納められている。

天船４ヶ村では、正月と７月に村祈祷を行う。導師を務めるのは、中村の金峰山安海寺の住職。また、同地区ではかつて雨乞い踊りを行っていたが、その内の「お寺踊り」は安海寺で踊ったという。秋祭りの始まりには、宮当番が寺の鐘を突く。同寺は高野山真言宗の寺院で、白雉年間（650～654）法道仙人の開基。後に行基が伽藍を建立したと伝える。本尊の阿弥陀如来坐像は平安時代後期の作で、県指定文化財。薬師如来坐像、釈迦如来坐像なども平安時代の作とされ、多くの仏像が安置されている。注目されるのは、古代の渡来僧、恵便とされる木造坐像。「峰相記」に、恵便は物部守屋によって「安田ノ野間」に幽閉され、後にその場所に「一伽藍」を建立したと記されている。村祈祷で転読される大般若経は巻物で、古い形を残す。現存するのは、600 巻の大般若経の内約 300 巻。タンス型の収納箱に入れられており、かつては当番の村人が担いで運んだとか。大般若経の奥書には、盗難にあって長年失われていたが再び戻ってきたことなどが記されている。

安海寺　阿弥陀如来坐像

元禄 10 年（1697）のものなど版木 16 点が残り、村祈祷に今も用いられている。多くの書画も残っており、「釈迦三尊十六善神」像は鎌倉時代末から南北朝期の作。８月・９月に数珠繰りが行われる薬師堂にも、平安時代の薬師如来坐像などが祀られている。中村地区のお当渡しは、１月冬祈祷の後。あきお・権現・妙見などを世話する。

横　屋（よこや）

慶長国絵図に、「横矢村」とある。横屋区有文書が残されており、溜池の堤が決壊、新しく築いた池の資金償却について役所の援助を願う嘉永７年（1854）の文書などがある。

大歳神社　龍王の舞（リョンリョン）

横屋の氏神は大歳神社で、元禄２年（1689）の棟札に４度目の修築であることが記されている。秋祭りには中村・貴船神社のお旅所となり、本宮に貴船神社から大歳神社まで神幸行列が行われる。今は、神輿は出ていない。大歳神社では、宮当番が神主役を務め、祝詞を奏上する。貴船神社で宵宮に行われる「リョンリョン」、「かぐらの舞」、「ゲイゲイ」が、大歳神社でも奉納される。ゲイゲイ終了後に、地面に土俵を描いて子ども奉納相撲を行う。貴船神社境内に祀られている大神宮社、祇園神社は、元は横屋の大歳神社境内に祀られていた。

横屋には、山麓に正一位吉盛稲荷神社が祀られている。背後に巨岩がそびえ立ち、その上に小さな社が祀られ、手前には石灯籠が立つ。かつては、巨岩自体が御神体だったのだろう。この神社には、割り箸に白い紙を付けた旗を供えると願い事をかなえてくれるという信仰があり、受験シーズンにはにぎわうとか。稲荷神社のお当（当屋）は２人で、３月に初午を行う。１月冬祈祷の終了後に、公民館でお当渡し。中村・貴船神社のお当は、坂本とともに２年に一度務める。

天船４ヶ村では、正月と７月、「般若当」とも呼ばれる村祈祷を行う。かつては当人宅で行ったが、今は横屋はじめ、いずれの地区でも公民館で行っている。本尊釈迦十六善神の軸を掛け、その両脇に木札（青竹に祈祷札を付けたもの）を置き、安海寺の住職が大般若経の転読を行う。その後、釈迦十六善神画像を納めた木箱と「とうじょう箱（お当事箱）」を重ねて持ち、住職が二人の当人の頭を「コッツン」と打つ。次に当人が住職の頭を「コッツン」と打ち、村人全員に同じ所作を繰り返す。「こっつりさん」と呼ばれる行事で、貴重な習俗。村人は古い版木で刷った祈祷札をいただいて帰るが、家内安全のほか雷除けの功徳もあるとされる。正面に置かれていた木札は、儀式終了後に当番が村の境２ヶ所に立てる。他の３ヶ村でも、冬・夏とも同様の儀式が行われている。安海寺は元禄年間（1688～1704）に火災に遭い、元禄６年（1693）横屋村にあった安養院（文書には「安海寺」とある）を合併して再建されたという。なお、かつて上三原から横屋へ通じる桑坂峠は難所で、野狐が多く住んでおり、キツネにだまされた話が多く残る。また、横屋には、安政２年（1855）建立の郷土力士「桂川甚兵衛」の墓がある。

こっつりさん

下　村（しもむら）

下村の名は、天船４ヶ村の一番下の村であることから名付けられたという。慶長国絵図に「下村」とある。正保郷帳には紙漉きに関わる「杉原役」が記されており、文政13年（1830）には「すご谷山内」に楮畑を新たに開くことが認められている。慶応４年（1868）の多可郡一揆では、下村の庄屋上月家が焼き打ちされた。

金　比　羅　神　社

氏神は、金比羅神社。創立年代は不明だが、地域の有力者が讃岐の金毘羅神社の分霊を勧請したのだろうとされている。境内には、銀杏の大木が立つ。拝殿には、「宗五郎一代記」の絵馬９面が奉納されている。明治時代の絵馬と思われるが、「橙樹斎」という作者の名が記されており、専門の絵馬師に依頼して作成したもの。それぞれ「仏長寺段」などと記されており、芝居の場面を描いたと考えられる。金比羅神社の祭りは４月、10月の秋祭りは中村・貴船神社で行う。なお、中村・貴船神社に祀られている若宮神社は、もと天船下村字「ツクノカイ」に鎮座しており、明治42年（1909）に移転合祀された。金比羅神社の世話はお祷人２人で行う。地区で順番に務め、１月初め冬祈祷の後にお祷渡しが行われる。かつてはお祷人宅で行われたが、今は公民館で行われ、「おとうじょうさん」と呼ばれるお当事箱と枡が、旧お祷人から新しいお祷人に引き継がれる。枡を用いた儀式は伝わっていないが、かつて収穫高を計る枡が村落において重要な意味を持っていたことを窺わせる。１月の冬祈祷と７月の夏祈祷は、天船４ヶ村に共通する儀式。下村は、中村とともに中村・貴船神社のお当を務める。

下村の東に位置する向山山頂に鎮座しているのは、愛宕さんを祀る小さな祠。かつては８月の地蔵盆に山に登り、愛宕さんに参拝、麓では松明がたかれたという。燃え残りの木の端を畑の畝に挿しておくと、虫が付かず豊作になると言い伝えられていたとか。正月のトンドが行われるのは、愛宕橋のたもと。地蔵堂には、江戸時代の地蔵菩薩立像と弘法大師坐像が祀られている。いずれも一木造りで、彩色が施されている。下村の墓地入口には、六地蔵と石造地蔵坐像１体と地蔵立像１体、そして、石造としては珍しい、奪衣婆らしい石造坐像が並ぶ。奪衣婆は三途の川の畔に座す鬼形の老婆で、亡者から衣を奪って衣領樹（えりょうじゅ）に掛け、その罪の重さを量る。六地蔵は、享保15年（1730）に「同行十二人」が建立したもの。いずれも、江戸時代の建立と考えられる。石造地蔵坐像の施主は、「松井庄大屋村」の住人。なお、昭和47年（1972）に再現された天船雨乞い踊りは、下村の「雨乞い踊り」から始まり、横屋、坂本、中村の順に行われた。

墓地入口　地蔵尊像と脱衣婆像

門　田（かどた）

門田は、凍り豆腐の創始者である森脇定治郎の出身地として知られる。慶長国絵図にすでに村名が出てくるが、かつては家数が10軒に満たない小村だったとか。そのほとんどの家が箕作りをしていたという。延宝5年（1677）の門田村検地帳には、「いかき役　銀三匁」とあり、「正保郷帳」にも門田村の「いかき役」が載っている。自転車に積んで丹波まで売りに行ったこともあったというが、昭和35年（1960）には箕を作る家は2軒になっており、40年代には箕作りに代わって播州織りが盛んになった。

神　明　神　社

門田の氏神は、神明神社。明治42年（1909）に改称されるまでは、「太神社」として信仰されていた。創立年代は不明だが、明暦4年（1658）の棟札が残っている。祭神は皇大神（内宮）・豊受大神（外宮）で、伊勢神宮をそのまま勧請した形となっている。境内社は、金刀比羅神社と地神社。その一社に、虫送りの行事に使っていた小ぶりの法螺貝が二つ納められている。お祷（宮当番）は5人。8月に夏祭り、10月に秋祭り、12月に霜月祭りが行われる。霜月祭りでは神事を行わないが、かつては宮当番によって神事が執り行われていた。祭りに太鼓屋台が出た時代もあったといい、今もその大太鼓が残っているという。拝殿脇の小さな建物には炉が切ってあり、祭りの時には酒の準備などをしている。また、境内に、樹齢250年と推定される「景観保全樹木」のムクノキがある。なお、昔は上・下二つの地区に分かれて、伊勢講を行っていた。稲荷神社では、3月に初午の祭りがある。

神明神社近くに位置するのが、「どうさん」と呼ばれる阿弥陀堂。本尊阿弥陀如来の他に伝教大師などの像が祀られ、堂守さん（お堂当番）5人で世話をしている。堂の背後には、古い石塔10基と五輪塔の残欠1基が並ぶ。石塔に刻まれた年紀でもっとも古いのは、享保9年（1724）。これらの石塔群は、村の先祖と伝えられている。お盆には、先祖迎えのため、村中の人が阿弥陀堂へ参る。8月13日夕方、訪れてくる村人たちの手にあるのは、線香、鉦、水桶、さいの目に切ったナスと洗米を載せたズイキの葉が載ったお盆。そして、シキビ。堂守さんが灯したロウソクから、線香に火を灯す。まず阿弥陀さん、次に境内にある文化3年（1806）建立の「北向き地蔵」へ参り、次に石塔一つ一つに線香とシキビ、ズイキの葉のお供えを置き、水を掛けて拝む。15日朝の先祖送りを行うのは、野間川の川原。

どうさん　先祖迎え

なお、阿弥陀堂の堂守さんを務めた後、神明神社のお祷を務める。引き継ぎは、1月に公民館で行われる。

赤　坂（あかさか）

宝暦7年（1757）に書かれた「播州名所集」に、多可郡の名所として載っている赤坂。同地区にある観音堂には、元禄12年（1699年）の銘が刻まれた鰐口が残されている。本尊は十一面観音立像で、50年に一度開帳される秘仏。他に、不動明王立像、毘沙門立像、阿弥陀如来立像、弘法大師坐像、伝教大師坐像が祀られている。

観音堂　数珠繰り

延宝の検地帳にも載っている観音堂の境内には、いくつも石塔が並ぶ。「大乗妙典日本廻国供」の文字が読み取れる石碑は六十六部の供養塔で、弘化4年(1847)の建立。「奥洲伊達」の人が「本願主」で、「丹洲氷上郡」の人が石碑の建立に関わっていたらしい。観音堂の世話は、村を順番に廻る月当番が行っている。毎月5日間の「月祭日」、春・秋の彼岸と8月20日・24日の「年祭日」があり、8月20日に数珠繰りが行われる。数珠繰りの先達を務めるのは、老人会。般若心経を唱えた後、大人も子どもも「南無阿弥陀仏」と唱和しながら大数珠を廻す。今は使われていない古い鉦には、享保8年（1723）の銘文が刻まれている。数珠繰りが終わると、地区の人たちが供えた菓子などが子どもたちに配られ、観音堂前の広場でにぎやかに盆踊りが始まり、地区の夏祭りが行われる。

赤坂の氏神は、伊勢大神宮（旧大将軍社）。天照皇大神・広峯・金比羅を祀る。10月の秋祭りには子ども神輿が出て、餅投げが行われる。家順で月毎に廻ってくる月当番が世話をし、月に4回境内の掃除などを行う。6月30日のお日待ちには神主役の人が祝詞を奏上し、直会の席で松茸山の競売が行われる。「おとう」があるのは観音堂近くにある小さな稲荷神社。くじ引きで2人のおとう人が決まる。おとう渡しは1月に公民館で行われ、3月の初午のお祭りには餅投げと子ども相撲がある。なお、秋祭りに子ども相撲を行うのは、伊勢大神宮。同社には、明治の「大職冠図」絵馬と年末詳の「松図」羽子板型絵馬が奉納されている。

金蔵山金蔵寺へ向かう道と、中三原へ向かう道の境にある地蔵堂の前には、古い道標が立つ。祀られている石造地蔵立像の台座には、享保14年（1729）の年号。8月24日、地蔵盆が始まる前に、向山中腹にある愛宕さんの祠に村の役員らがお参りするとか。なお、赤坂地区の旧共同墓地では、「積石墓」と呼ばれる、自然石を積んだ古い形の墓を見ることができる。俵田地区の墓地にも残るが、赤坂では今もこの古い墓地にお参りするという。卒塔婆のように立つ古びた雨傘が目を引くが、かつて葬礼の時に笠と杖を墓に立てる習わしがあった。笠が雨傘へと変化したのだろう。

地蔵堂と道標

俵　田（たわらだ）

弥　勒　堂

ホタルの宿路で知られる俵田では、毎年８月16日に数珠繰りが行われている。場所は、「お弥勒さん」と親しまれる２間四方の弥勒堂。寛文４年(1664)の棟札が残る。江戸時代の本尊弥勒菩薩像の他に、平安時代の仏像も祀られている。本尊の厨子の脇に穴が開いた石が入った木箱が置かれており、体の悪い所をこの石で撫でると治るという信仰があったとか。

お堂の脇に安置されている石造地蔵坐像は文政３年（1820）の銘を持ち、この時に寄付をした人の名前を記した額が弥勒堂に掲げられている。また、絵馬の他、江戸時代の俳額が４面掛かっている。数珠繰りで先達２人が叩く鉦は、万治３年（1660）のものと年不詳のもの。後者には、加美区山野部の常楽寺に残る鉦と同じ「西村左近宗春」の名が刻まれている。なお、石地蔵の寄進者の中に「念仏講中」があるが、田の中の道沿いに立つ宝暦７年（1757）石地蔵も「念仏講中」の建立。その石地蔵近く、中野間地区との境あたりに祀られている小さな薬師堂は俵田と中野間の共有のお堂で、掃除などの世話は俵田地区が受け持つ。

氏神の太神宮社は、地元では「伊勢大神宮社」と呼ばれている。祭神は豊受大神。俵田は明治９年（1876）に赤坂・門田と合併して豊谷村となった歴史があり、太神宮社の祭りや宮世話に最近まで赤坂地区も参加していたという。寛文９年（1669）の棟札が残っており、宝暦７年（1757）の改修時には、寛文の時の古材が活用されたと伝えられる。特色のある建築で、東播磨を中心に活躍した「日原大工」が腕を振るった。また、本殿前に「舞殿」があり、かつては神楽などが奉納されたらしい。一段下の境内に、祭りの時に村人が一座する長床が設けられている。境内社は、秋葉神社・八坂神社・稲荷神社。稲荷神社では、３月に初午の祭りがある。

例祭は、12月の初丑の日に近い日曜日に行われる霜月祭り。福引きと餅投げが行われる。当人２人は「神主」と呼ばれ、12月１日に交代の式を行う。他の地域が秋祭りを行う10月、俵田では「つきあい祭り」が執行され、神主は本殿に赤飯を供える。１月にはトンドときつねがえりがあり、昭和40年頃までは大小二つのトンドを作ったそうだ。きつねがえりは「よーねんこう」ともいい、12時頃に、村の東と西の境に御幣と油揚げを差した竹を１本ずつ挿す。神さん正月や節句祭り、お日待ち、二十三夜など、多くの行事が継承されている。酒造家だった小牧家には、天保４年(1833)に逗留した葭洲筆の襖絵や、明治４年（1871）に発行した「酒屋利兵衛札」などが残されている。

太　神　宮　社

中　野　間（なかのま）

極　楽　寺

中野間の伊勢和山極楽寺は、白雉２年(651)法道仙人の開基と伝わる天台宗寺院。「峰相記」に、法道仙人開基の寺として「伊世輪寺」が登場する。所蔵する国の重要文化財「絹本著色六道絵」は３幅からなる大作で、鎌倉時代末期の作。極楽浄土の様子を描いた、室町時代中期の「當麻曼荼羅図」も残る。また、記録にある「開山法道仙人筆」の「本尊千手尊像」と思われる大幅の画像が、平成14年に発見された。極楽寺は天正時代に兵火で焼亡、衰退したが、江戸時代に再建され、享保９年（1724）に落慶した。その様子を描いたのが、享保11年（1726）「伊勢和山中興図」。他にも、室町時代末期の「竹谷山道脇寺往古伽藍之図」が残っている。道脇寺は「兵庫観光百選」にも選ばれた竹谷山にあったとされ、極楽寺は、道脇寺西の坊という飛地境内だったが、「當麻曼荼羅図」を有していることから極楽寺と寺号が勅号されたと伝わる。

再建当時の建物としては、享保13年（1728）建立と伝えられる仁王門が現存。本尊の千手観音坐像は、平安時代後期にさかのぼる可能性があり、阿弥陀如来立像は同時代後期、不動明王立像は鎌倉時代の作。焼失したという本堂の跡地には観音堂、その横に再建された大日堂が立つ。観音堂周辺の発掘調査では、平安時代にさかのぼる建物の痕跡が見つかった。「中興図」に見える「八幡」の社と同じ位置に、厄八幡神社が祀られている。平成27年、新しい本堂が落慶した。

「播磨国風土記」に登場する「花波山」の遺称地、花の宮に鎮座する貴船神社は、中野間・下野間・仕出原の氏神。秋祭りに「馬駆け（流鏑馬）」が行われることで知られている。氏子の３地区が一年交代でお当を務め、お当の一人が色紙などで飾られた被り物を被って馬に乗り、的を射る役を務める。元禄４年（1691）と文政元年（1818）の的が現役で活躍しているとか。中野間の大歳神社では、３月のお当渡しに珍しい「桝返し」の儀式がある。また、仕出原川・野間川・大和川の合流点に「かわっさん」と親しまれる川下神社が祀られ、７月16日に近い土曜日に祭りを行う。境内の石灯籠は、かつて川の中にあった。火車天王神社が鎮座するのは、片瀬地区。両脇に祇園神社と山之口大明神を祀る。

「よそべ谷」にある清水薬師は「いぼ薬師」として知られ、置かれているすべ箒でイボを撫でるとイボが取れるという。道路脇にある「牛居さん」と呼ばれる墓の傍には、有用広葉樹母樹に指定された大ケヤキが立つ。なお、野間城と光竜寺山城という二つの山城跡があり、野間城主が落城の時に貴船神社に鞍を預けたという伝承が残る。

貴船神社　秋祭り

仕　出　原（しではら）

丹波街道沿いに位置する仕出原の氏神は、菅原道真を祭神とする天満神社。創建は寛延３年（1750）。拝殿には、橋を渡ってきた旅人とその顔を天眼鏡でのぞき込む僧体の男が描かれた、珍しい絵柄の絵馬が掲げられている。４月25日に近い日曜日、３人のお当人と役員、各隣保の代表によって天神祭りが執行される。お当渡しは３月末で新当人宅で行われるが、約30年前まではくじ引きでお当を決めていたという。

貴船神社　秋祭り

秋の天神祭りは中野間・下野間とともに祀っている中野間の貴船神社の秋祭りと重ねて行い、屋台の練りだしがある。貴船神社の秋祭りでは、３年に一度、仕出原も流鏑馬を行う。境内社は、戎神社・金毘羅神社・稲荷神社。１月10日には戎神社で戎祭りがあり、吉兆が売られる。また、11月23日には金毘羅神社で金毘羅祭りがあり、子ども相撲大会がある。近年まで、１月に稲荷神社で初午が行われていた。天満神社の他に秋葉神社と愛宕神社が祀られており、１月には餅投げが行われる秋葉祭りが、８月には火を焚いて子どもたちに菓子を配る「愛宕さん」がある。

天満神社に隣接して立つのが、薬師堂。延宝７年（1679）の検地帳に、「薬師前」「薬師ノ本」の記載がある。享保20年（1735）の棟札や、文化元年（1804）の「薬師如来御守札」の版木が残り、境内にある廻国の巡礼者の名を刻んだ石造地蔵像は享保４年（1719）の年紀を持つ。地区の人が順番に務めるお当番（堂世話）２人が世話をし、春と秋の彼岸には地区の人たちが集まって数珠繰りを行う。数え札としてシキビの葉を用いるのが珍しい。かつて、子どもたちは、「日迎え」という行事を済ませてからお堂に来たという。早朝に子どもだけで近くの山に登り、お弁当を食べるという行事で、小学校の高学年の子がリーダー役を務め、登る山も彼らが決めたとか。

薬師堂の境内には、廻国者の地蔵の他にもう一体石造地蔵尊が祀られている。明治時代に建立された坐像で、登校途中に強風のため野間川に落ちて亡くなった女の子を悼んで造られた。また、薬師堂の階段を下りた、「東向き地蔵」が立つ辺りは「百マチの田んぼ」といい、鶴林城（野間城）を攻める兵たちが戦死した場所だと伝わる。仕出原は「シドロ原」といわれるほどの泥地で、敵兵たちは馬が泥に足を取られて動けなくなったという。なお、当地区には、八千代区では数少ない古墳、ぬか塚古墳がある。直径約15ｍの円墳で、横穴式石室を持っていたとされる６世紀末頃の古墳。

薬師堂境内　地蔵尊

下　野　間（しものま）

下野間は花の宮の貴船神社を中野間・仕出原とともに祀るが、下野間の氏神もやはり貴船神社。お当は隣保当で、14隣保の内10隣保が順に務めている。花の宮の貴船神社は10月の秋祭りの馬駆けで有名だが、下野間はかつては独自に馬駆けをしていたと伝わり、氏子の中で唯一自分たちの地区の神社でも毎年馬駆けを行う。馬駆けは流鏑馬神事だが、今では花の宮、下野間いずれの貴船神社でも馬は歩いて鳥居前へ行く。馬乗り役も、弓矢を構えるものの矢は射ず、木製の的にコツンと矢を当てる所作をするだけとなっている。下野間では、３年に一度のお当に当たり、花の宮・下野間の両方で馬駆けを行う年を「両宮」、下野間のみで行う年を「片宮」と呼ぶ。昔は、中野間は９本、下野間は10本の矢を射る習わしだったという。矢数が一本多かった由来は伝わっていない。

貴船神社　秋祭り

文政11年（1828）の棟札に加西郡の大工の名が見えるが、この大工は幕府の大工頭を務めていた中井家に属していたとされる。境内社は、八将軍社、天満宮、金比羅神社、稲荷神社。稲荷神社は一段高いところに位置し、本村地区が祀っている。初午は３月。なお、拝殿には、江戸後期の「神馬」図絵馬、「宇治川先陣」絵馬が掛かっている。

金毘羅神社は保木にも祀られており、４月に金毘羅祭りがある。野口の新宮社では、８月には新宮祭を行う。藪田には天満宮が鎮座しているが、同社の上に鐘楼があったと伝わる。この鐘楼の鐘は、宝永７年（1710）村人が村の繁栄を祈って鋳させて神社に奉納したものだったという。ところが、村は少しも発展せず、「鐘の音がよくないせいだろう」ということになり、京都で新しい巨鐘を鋳させたとか。前の鐘を鋳たとされるのは、姫路野里の藤原家久、播磨国の鋳物師の頂点に立つ芥田家の初代「芥田五郎右衛門家久」。天満宮のお当は隣保当で、４月25日にお当渡しが行われる。境内の小宮には、お不動さんと四郎大夫大神神霊が祀られている。他に、本村が祀る薬師堂で、７月には祇園祭り、８月14日に数珠繰りを行う。

慶長国絵図には「下野間」の記載があるが、その南に「宮屋村」とあり、これが保木地区にあたるとされる。同地区には保木遺跡があり、溝の下層から古墳時代の土師器、上層からは平安時代後期から鎌倉時代頃の須恵器が発見された。また、下野間深田遺跡では古墳時代後期の土器が見つかっている。なお、天明７年（1787）加古川筋酒屋騒動に下野間村人が参加したこと、慶応４年（1868）の多可郡一揆では下野間村庄屋宅が焼き討ちされたことが記録に残っている。

天　満　宮　社

下　三　原（しもみはら）

貴　船　神　社

下三原の氏神は、貴船神社。天文10年（1541）、中野間地区の花の宮に鎮座する貴船神社から分社した。祭神は、高龗神・宇気母智神。「神主」２人が世話をする。寛文12年（1672）の棟札が残っており、「淡州津名郡来馬庄浦村」（現在の淡路市東浦町浦）の大工の名が記されている。浦村は、17世紀後半から18世紀初頭にかけて活躍した大工集団があったことで名高い。貴船神社の建築様式には、浦村の大工集団の特色がよく表れているという。貴船神社を建立した大工は、同時期に加西市若井町にある磯崎神社も建立している。

年中行事の中でよく知られているのが、「雨散散」（ゆうわらわら・ゆうばらばら）と呼ばれる正月神事。貴船神社本殿の脇に立つ八幡神社で行われる。神主２人は、年末に村の「しきみ山」へ榊・樒・藤かずらを取りに行く。１月１日早朝、神主は、樒・藤かずらと４つの木椀に盛った白むしなどの供物を準備する。氏子たちは樒の枝に藤かずらで３つの輪を作ったものを付け、洗米を半紙に包んだものを水引でくくり付けると、社前に集まる。神主の一人が祝詞を奏上、もう一人が「お祝い申す」と言いながら、柄のついた木杯に入れた神酒を氏子たちの頭上に振りまく。氏子たちは、樒の小枝を振りながら「雨散散」と唱える。これを３回繰り返す。「樒に御神酒のしずくが多く付くがよい」と伝えられ、樒の小枝は家に持ち帰って雨戸の戸袋付近に挿す。かつては、苗代田を作る時、水口のあたりに挿した。下三原では天明年間（1781～1789）に大旱魃があり、八幡神社に雨乞い祈願したのが始まりとか。棟札によると、八幡神社は元禄７年（1694）の建立、弘化４年（1847）に再興された。江戸時代前期の男神坐像が祀られている。

「雨散散」終了後に住民センターで神主の引き継ぎが行われるが、神主は貴船神社だけでなく、稲荷神社の世話もする。同社では、２月に神さん正月・初午、４月に稲荷祭り、６月に端午の節句、７月に夏祭りを行う。稲荷神社がある山中に石碑が立っており、石碑の下には一字一石経が埋められていると伝えられる。８月には、もと稚蚕飼育所だった住民センターで数珠繰りが行われる。住民センターは、昭和８年（1933）に解体された観音堂の跡地。伝承によれば、現在地蔵堂に祀られている江戸時代の阿弥陀如来像や、室町時代の十二神将などの諸仏は観音堂にあったという。本尊は、享保11年（1726）の銘がある石造地蔵立像。衣が赤く彩色されているのが珍しい。「中野間村日原治右衛門勝吉」と記された棟札が残る。他に、不動明王堂があり、江戸時代の不動明王立像と脇侍が祀られている。

貴船神社　雨散散

柳　山　寺（りゅうさんじ）

楊　柳　寺　本　堂

楊柳寺は、白雉年間（650～654）法道仙人の開基を伝える天台宗の古刹。柳山寺は、同寺の寺百姓村として開かれたとされる。地名も、山号の「柳山（やなぎさん）」に由来するとか。頭痛や手足の痛みを癒す「観音さん」として、今も広く信仰されている。寺伝によれば、法道仙人は千手観音の霊告により柳の大木に自ら観音菩薩を刻み、伽藍を造立してその尊像を安置したという。室町時代の地誌「峰相記」にも、法道仙人開基の「楊寺」として載る。

本尊の観音菩薩像は平安時代の作で、楊柳観音とされる。本堂に祀られている十一面観音像３体、奥之院に祀られている千手観音像と毘沙門天像２体も平安時代の造立。本尊を含め７体の仏像が県の指定文化財となっている。現在、法持院・薬王院という二つの塔頭が隔年で寺を管理しており、多くの書画を所蔵している。広大な境内は、県の環境緑地保全地域。江戸時代に建立された本堂と仁王門は、国登録有形文化財に指定されている。楊柳寺は天正３年（1575）野間城落城の時に兵火にかかり、その後に一部が再建されたという伝承を持つ。１月５日に「鬼まつり」が行われ、版木で刷った牛玉宝印札が配られる。今は鬼面を飾るだけだが、古くは修正会に田遊びと鬼踊りが行われていた。なお、千手観音菩薩と脇侍の毘沙門天・兜跋毘沙門天を彫った版木が３点残されている。

柳山寺の氏神は、字「東谷」に鎮座する大歳神社。寛政８年（1796）の創建と伝えられている。かつては、「宮の頭」「笠頭」「新頭（敬神頭）」という３つのオトウがあった。今は隣保で順に世話をし、３月末で交代する。境内社は、八幡神社・宇賀太神社・八坂神社・稲荷神社。境内の六社権現社は、かつて楊柳寺の鐘楼近くに祀られていた神社。明治42年（1909）に合祀された。10月の秋祭りでは、六社権現社に神輿が安置され、大歳神社へ短い神幸行列が行われている。秋祭りに登場する鼻高面を付けた「テング（ハナタカとも）」、「カグラ」と呼ばれる獅子は、中世に都で流行った「王の舞」の系譜を引くもので、かつては田楽踊りも行われていた。大歳神社と六社権現社には室町時代のものを含むいくつもの神像が祀られており、歴史を感じさせる。

ぽっぽこねんじゃ

愛宕山の山上に祀られているのが、愛宕神社と山ノ口大明神の祠。８月24日に近い土曜日の夕方、子どもたちが大人とともに松明を持って愛宕山へ登る。区長や愛宕神社の当番（世話役）が執り行う神事が終わると、火を付けた松明を掲げて下山。「ぽっぽこねんじゃ、ほうねんじゃ」と唱えながら、村内を歩いて大歳神社へ帰る。「ぽっぽこねんじゃ」と呼ばれる、貴重な盆の火祭り行事。

中　三　原（なかみはら）

中三原の氏神は大歳神社で、今は大和川の西側に鎮座している。もとは東側の山裾にあって、明治の初めに現在地に移されたという。中三原・上三原両地区の氏神で、延享４年（1747）の「村明細帳」に載る。創立年代は明らかでない。棟札から、寛永２年（1625）本殿を再興、寛文12年（1672）拝殿を再興したことがわかる。現在の社殿は、明治時代（1868～1912）に再建されたもの。拝殿の十二支など見事な彫刻が施されており、有馬郡「新井弥三郎正次」という彫工の名前と明治16年の年紀が残っている。祭神は、大歳命・大田命の二柱。境内社には、若宮社と大神宮社が祀られている。

大歳神社　秋祭り

中三原では、平成の初期に改正されるまで、神社前の隣保が約10軒で宮守をしており、「宮党（みやんとう）」と呼ばれた。宮党は、伊勢講とほぼ重なっていたという。現在は隣保党で、幟立て・餅つき担当の「餅つき当番」と行事・祭り担当の「お党」がある。まず「餅つき当番」を務め、翌々年に「お党」を務める。お党の交代は大晦日の午前０時で、儀式はない。かつては「地神主」の家が祭りを担当しており、上三原の当番が七度半の使いに立った。その後に地神主は神社に詣でたといい、その道筋を「ごこう道」と呼んだ。

中三原の10月の秋祭りには、特徴的な赤い幟が登場する。党人は、祭りの日、家の庇にこの赤い幟を２本立てかけておく習わし。神幸行列の時も、露払いの子ども３人の後に赤い幟が続く。上三原にも同様の赤い幟が見られ、興味深い。また、祭りの日、大歳神社の名を記した幟が柳山寺地区との境に立つ。そこは、昔、中三原の神輿が柳山寺に出向いていた時代に、柳山寺の神輿が出迎えにきた場所だという。

延享の「村明細帳」にも載る阿弥陀堂の梵鐘は、「西山安明寺　阿弥陀堂」の銘を持つ。本尊と脇侍の勢至菩薩像、天部の２体は、平安後期の作。薬師如来は、イボ取りの霊験あらたかな仏として知られる。また、内陣と外陣の境には木造の千体仏が奉納されており、「千仏（せんぼとけ）」として親しまれている。阿弥陀堂では大師講を行う。弘法大師が中三原に来たが谷が一つ足りず、高野山へ行った「九十九谷」の話や、大師に水を恵むのを拒んだため、水の流れが無くなった話などが残る。

阿　弥　陀　堂

西谷公園に残っているのは、江戸時代とされる池の堤防跡。算木積みなどの手法が石垣に用いられている。大和地区と称されている中三原・上三原・柳山寺は、かつて赤穂藩領だった。そのためか、この池を大石良雄（内蔵助）が見に来たことがあると伝えられ、石垣は「大石の石垣」として親しまれている。

上　三　原（かみみはら）

上三原の毘沙門堂は、古くは「西光寺毘沙門堂」だったと伝えられる。現在は、楊柳寺法持院の飛地境内。江戸初期に火災にあい、元禄14年（1701）に再建され、修復を重ねた。南北朝時代の名品「般若十六善神画像」は県指定の重要文化財で、法持院が保管している。伝承によれば、本尊の毘沙門様を、京都に修理に出した。取りに行ったところが、仏様が２体ある。迷っていると、一方がゴトゴト動いたので持ち帰ったという。

毘　沙　門　堂

本尊の脇に祀られた十一面観音像は、平安後期の作。八千代区でもっとも古い安永９年（1780）の神馬図絵馬をはじめ、数多くの絵馬や俳額が奉納されており、信仰の深さを感じさせる。21面も掛かっているナマズを描いた小絵馬は、皮膚病平癒の信仰があったらしいことを示す。堂内には江戸時代中期以降の祈祷札が何枚も掲げられ、享保４年（1719）の大般若経600巻、千人参り用の木軸や虫送りのホラ貝なども残っている。

境内には景観保存樹の楠や老杉が立ち並び、池にはモリアオガエルが生息している。江戸時代の大日如来などを祀った大日堂、神仏習合を感じさせる七社神社、寛政９年（1797）の石造地蔵立像、室町時代とされる宝篋印塔などが残る。石段下にも、江戸時代の石造地蔵坐像、「南無観世音菩薩」と刻んだ石塔が並ぶ。鐘楼の鐘は、戦後まもなく鋳造された３代目。初代の鐘は延慶２年（1309）、２代目は享保６年（1721）に造られたと銘文にある。かつては、日照りが続くと毘沙門堂の鐘を降ろし、カジヤ杉の奥の滝壺に放り込んで雨乞いしたとか。

もっとも大きい行事は、１月14日に行われる「十四日祷」。早朝に堂守と老人会で堂内を掃除し、当番隣保はこの日までに毘沙門堂にある版木で祈祷札を刷っておく。特徴的なのは、四角に切った、小さな高野豆腐を竹ひごで串刺しにし、藁苞にたくさん挿した飾り物。僧侶による大般若経転読の後、御神酒と用意した煮物で「お斎」をする。かつては、牛玉宝印をハゼの木に挟んだものを持ち帰り、苗代田の水口に挿す習わしがあった。他に、星祭りや大般若会、毘沙門講、８月の虫干しが行われている。また、大日堂で年３回大日講、七社神社で７月に祇園祭りを執り行う。

毘沙門堂　十四日祷

上三原は中三原に鎮座する貴船神社の氏子で、秋祭りの時には当人宅に赤い幟が立つ。大歳神社には、「宮本衆」（七家）があり、祭りの時には七度半の使いが行われたと伝えられる。他に川代神社があり、７月に川代祭りがある。

多可町の指定文化財一覧

【国指定文化財】

名　称	員数	時　代	所有者（管理者）・所在地等
絹本著色六道絵	3	鎌倉時代	八千代区中野間 極楽寺

【国登録文化財】

名　称	員数	時　代	所有者（管理者）・所在地等
楊柳寺本堂	1	江戸時代（寛延４年）	八千代区大和 楊柳寺
楊柳寺仁王門	1	江戸時代中期	八千代区大和 楊柳寺
極楽寺仁王門	1	江戸時代（享保 13 年）	八千代区中野間 極楽寺

【兵庫県指定文化財】

名　称	員数	時　代	所有者（管理者）・所在地等
木造聖観音立像	1	平安時代後期	中区坂本 鳳泉寺
村東山古墳 石棺	1	古墳時代後期	中区 那珂ふれあい館
東山古墳群	12	古墳時代後期	中区東山
善光寺のイブキ	1	—	中区東安田 善光寺
思い出遺跡中世墓出土品	1式	鎌倉時代	中区 那珂ふれあい館
杉原紙技術	—	—	加美区鳥羽 杉原紙研究所
青玉神社の大杉	7	—	加美区鳥羽　青玉神社
岩座神の杉（千本杉）	1	—	加美区岩座神
阿弥陀如来坐像	1	奈良時代	加美区的場 金蔵寺
紺紙金泥法華経	8	鎌倉時代（建長５年）	加美区的場 金蔵寺
般若十六善神画像	1	鎌倉時代	八千代区大和 法持院（楊柳寺）
木造阿弥陀如来坐像	1	平安時代後期	八千代区中村 安海寺
木造観音菩薩立像	1	平安時代前期	八千代区大和 楊柳寺
木造十一面観音立像（甲）	1	平安時代前期	八千代区大和 楊柳寺
木造十一面観音立像（乙）	1	平安時代後期	八千代区大和 楊柳寺
木造十一面観音立像（丙）	1	平安時代後期	八千代区大和 楊柳寺
木造兜跋毘沙門天立像	1	平安時代後期	八千代区大和 楊柳寺
木造毘沙門天立像	1	平安時代後期	八千代区大和 楊柳寺
木造千手観音立像	1	平安時代後期	八千代区大和 楊柳寺

【多可町指定文化財】

名　称	員数	時　代	所有者（管理者）・所在地等
多哥寺梵鐘鋳造遺構	1	奈良時代	中区 那珂ふれあい館
播州柏種	—	—	中区 播州柏保存会
荒田神楽	—	—	中区 荒田神楽保存会
スズメノモン	—	—	中区 鍛冶屋地区
阿弥陀如来立像	1	平安時代中期	中区東安田 善光寺
興善院領相伝系図	1	鎌倉時代	中区天田 量興寺
地頭代官仲原某畠地寄進状	1	鎌倉時代	中区天田 量興寺
量興寺寺領図	1	鎌倉時代	中区天田 量興寺
思い出遺跡第 14 区墓１出土品一括	8	平安時代末～鎌倉時代	中区 那珂ふれあい館
思い出遺跡第 14 区墓２出土品一括	5	平安時代末～鎌倉時代	中区 那珂ふれあい館
思い出遺跡第 15 区墓１出土品一括	1	平安時代末～鎌倉時代	中区 那珂ふれあい館
白衣観音図（土蔵栄相 筆）	1	室町時代	中区中安田 法幢寺
釈迦三尊・地蔵・十王図（土倉栄相 筆）	12	江戸時代前期	中区中安田 法幢寺
白衣観音図（驢雪鷹灝 賛）	1	室町時代	中区中安田 法幢寺
大愚宗築像図	1	江戸時代（万治３年）	中区中安田 法幢寺
貫十梵通・大中梵発像図	2	江戸時代（元禄３年）	中区中安田 法幢寺
涅槃図	1	室町時代	中区中安田 法幢寺
薬師如来立像図（伝 台昉 筆）	1	安土桃山時代	中区西安田 圓満寺
阿弥陀如来坐像	1	平安時代後期	加美区市原 専浄寺
薬師如来坐像	1	鎌倉時代	加美区多田 林松寺
十一面観音立像	1	平安時代後期	加美区岩座神 神光寺
金剛力士像	2	鎌倉時代	加美区岩座神 神光寺
二十五菩薩来迎像	25	江戸時代	加美区多田 諦願寺
鰐口	1	室町時代（応永 11 年）	加美区熊野部 阿弥陀寺
出山釈迦図（伝 可翁 筆）・寒山拾得図	3	室町時代	加美区清水 雲門寺
鷹・猿猴捉月図（曽我直庵 筆）	2	安土桃山時代	加美区清水 雲門寺
出山釈迦図（土倉栄相 筆）	1	江戸時代前期	加美区清水 雲門寺
書画貼交屏風	2	江戸時代	加美区清水 雲門寺
白衣観音図（土倉栄相 筆）	1	江戸時代前期	加美区門村 浄居寺
真言八祖図	7	室町時代	加美区的場 金蔵寺
善導大師・法然上人像図	2	江戸時代（万治３年）	加美区市原 専浄寺
雲門寺文書 くろししき売券	1	安土桃山時代（天正 19 年）	加美区清水 雲門寺
杉原谷地震関係文書	11	江戸時代後期	加美区 熊野部地区
鳥羽経塚出土遺物（経筒・和鏡）	5	鎌倉時代	加美区 鳥羽地区
奥豊部１号墳出土遺物	1式	古墳時代後期	中区 那珂ふれあい館
釈迦三尊十六善神像図	1	室町時代	八千代区中村 安海寺
釈迦涅槃図	1	鎌倉時代	八千代区中野間 極楽寺
伊勢和山中興図	1	江戸時代（享保 11年）	八千代区中野間 極楽寺

多　可　町　歌

作詞：閑念君代
作曲：橋本喬雄

1　雪どけ水の　せせらぎに
　　いのち育む　つちの色
　　風の光に　悠久の
　　歴史を刻む　多可の町

2　連なる峰の　霧はれて
　　緑したたる　谷間に
　　共に勤しみ　織る夢を
　　高くかかげる　多可の町

3　黄金の稲穂　波打ちて
　　今日の稔りの　喜びを
　　若き世代に　つなぎつつ
　　永遠に伸びゆく　多可の町
　　永遠に伸びゆく　多可の町

スマートホンでＱＲコードを
読みとっていただくと曲が流
れます。

平成 18 年（2006）11 月 1 日制定

敬老のうた　きっとありがとう

作詞：小西洋哉　補筆：吉澤久美子
作曲：星　知 央　編曲：佐藤昌弘

1　おじいちゃん　おばあちゃん　いつも優しくしてくれて
　　とてもうれしい　ありがとう
　　じいちゃん　ばあちゃんが　いてくれるから
　　僕たち　私たち　スクスク　大きくなれるんだ
　　この大切なこころ　今日から明日へとつなげるよ
　　長生きしてね　見守っていてね　きっとだよ

2　おじいちゃん　おばあちゃん　いつも笑ってくれて
　　とてもうれしい　ありがとう
　　じいちゃん　ばあちゃんが　いてくれるから
　　僕たち　私たち　元気で　大きくなれるんだ
　　この大切なからだ　春から秋へとつなげるよ
　　長生きしてね　見守っていてね　きっとだよ

3　おじいちゃん　おばあちゃん　いつも守ってくれて
　　とてもうれしい　ありがとう
　　じいちゃん　ばあちゃんが　いてくれるから
　　僕たち　私たち　立派に　大きくなれるんだ
　　この大切ないのち　ここから世界へとつなげるよ
　　長生きしてね　見守っていてね　きっとだよ

スマートホンでＱＲコードを
読み取っていただくと曲が流れます。

平成 25 年（2013）製作

【執筆者紹介】

埴岡真弓（はにおか まゆみ）
1955年 岡山県倉敷市生まれ。
奈良女子大学大学院文学研究科修士課程終了 日本史専攻
播磨学研究所運営委員兼研究員
たつの市、加西市、西脇市、赤穂市の文化財保護審議委員
2014年度姫路市芸術文化年度賞受賞
専門は歴史学、民俗学

〈主な論文〉
「姫路城刑部姫伝説の成立と展開」（「播磨学紀要」第5号）「近世中期における地方社会の怪異観」（「宗教民俗研究」第12号）「“桜の下の僧”とその背景」（「絵解き研究」第19号）など

〈主な著作〉
単著に『はりま 歴史見て歩き』『はりま伝説 夢物語』（いずれも神戸新聞総合出版センター）
共著に『播磨の妖怪たち —「西播怪談実記」の世界』『はりま伝説散歩』『播磨の民俗探訪』『池田家三代の遺産』（いずれも神戸 新聞総合出版センター）、『遊楽と信仰の文化学』（森話社）
他に、『播磨の祭礼』『稚児の祭礼』『播磨の王の舞』（いずれも兵庫県教育委員会）、『坂越の船祭り総合調査報告書』（赤穂市教育委員会）、『播磨国総社三ツ山大祭調査報告書』（姫路市教育委員会）など

平成18年度～平成25年度
多可町民俗悉皆調査の調査員及びアドバイザー
平成21年度～現在
多可町歴史街道推進協議会アドバイザー
平成25年度～現在 多可町文化財保護審議委員
平成27年度～現在 杉原紙総合調査準備委員

頒布価格 300円

多可町合併10周年記念誌

多可の里風土記
～ 62集落を訪ねて ～

2015年11月

発行 多可町役場
〒679-1192 兵庫県多可郡多可町中区中村町123番地
印刷 ウニスガ印刷株式会社